

---

# 幻想郷に飛ばされし信念貫きし者

龍賀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻想郷に飛ばされし信念貫きし者

### 【Nコード】

N4434U

### 【作者名】

龍賀

### 【あらすじ】

なのはの世界から他の神によって東方の世界に飛ばされた龍斗。

この先に待っているのははたして何か。

**プロローグ あんたが正しいって言うのなら！俺に勝ってみせる！（前書き）**

今回から東方を始めました！

更新は少し遅めですが無事完結できるように頑張ります！

タイトルは好きなキャラの名言を入れてくつもりです！

プロローグ あんたが正しいっていつのなら！俺に勝ってみせろ！

あの神以外のクズみたいな神のせいでは何処かに飛ばされたみたいでここが何処か分からない。

「此処が何処か分かるか？」

『いえ、あの・・・マスター？』

「何だ？」

『体が縮んでますよ？』

「何？」

どうやら今の俺は19歳の姿ではなく12歳から14歳くらいの状態らしい。

無理に世界を超えさせられたのだからこれで済んでマシなのかもしれない。

3

「とりあえず動くぞ、何時までも此処にいても変わらない」

『そうですね』

「あら？もう行くのかしら？もう少し此処にいてくださいな」

「誰だ？」

そう呼びかけるとすぐ後ろから奇妙な目が大量に見える隙間が出てきた。

まさか・・・。

「私は八雲 紫よ、あなたは？」 「俺は森 龍斗だ」

「あなた・・・人間じゃないのね」

「ああ、一応吸血鬼だ」

一瞬ではれるとはな。  
まあ境界を見たんだろっつが。

「で？何か用か？」

「ええ、何故此処にいるのかしら？（急に反応があったから急いで来たのよ・・・そのせいでまだ眠いわ）」

「それは悪かったな、俺も好きで此処に来たのではないのでな」

「どういうことかしら？」

男の娘（笑）説明中・・・

何故だろうか・・・殺意が芽生えた。

「どうかしたの？」

「いや、それはそうと案内してくれないか？何処か寝る場所があれば完璧だ」

「ええ、良いわよ、案内するわ」

「感謝する」

「いいわよ、それよりも自分の心配をしなさい、此処では気を抜くと死ぬわよ？」

「フツ、大丈夫だ、少なくともそこらの雑魚妖怪には負けはしないさ」

まだ同化していないから上位の妖怪には苦戦するだろうが。

まあ同化はもう始めてるがな。

今は8%くらいだ。

「それで？何処に案内してくれるんだ？」

「博霊神社よ」

「何故神社なんだ？」

まあ予測はつくがな。

「そっちが近いからよ、今日はそこで寝ててくれるかしら？」  
「別に構わない、文句を言う立場ではないのでな」  
「そう、助かるわ、じゃあ此処の事を説明しながら行くわよ」  
「分かった」

少女（笑）説明中・・・ぎゃああああああ（ピチューン

「無茶しやがって・・・」  
「どうかしたのかしら？」  
「イエナンデモナイデス」  
『すごく怖いですね』  
「そうだな」  
「何か？」  
「『イエ、ナンデモ』」

そんなことがありながらも無事？神社についた。

「霊夢？いるかしら」  
「何よ・・・」  
「ちよっとこの子を今日だけでもいいから泊めてくれるかしら」  
「何で私がそんなこと・・・」

そつえば此処は神社だったな。  
金もあるし参拝するか。  
そつ思い財布を取り出した。  
中には千円以下が無いのでとりあえず五千円を入れた。

「( ) どうかあいつらが無事でありますように」

「それでも泊めないのかしら」

「是非泊めさせてもらいます!」

「ん?」

『変わり身早いですね』

何故か無事に泊まる事ができるようだ。

よかった。これで野宿しなくてすむ。

「俺は森 龍斗だ、よろしく頼む」

「私は博霊 霊夢よ、こちらこそよろしく頼むわ」

こうして博霊 霊夢と出会った。

これから先に何が起こるかわからないが・・・今の全力で当たるのみだ。

そう決意していると、

「ようこそ幻想郷へ、歓迎しますわ」

「歓迎・・・ね」

「ええ、幻想郷は何もかもを受け入れますわ、それはとても残酷な事ですけど」

こうして俺の幻想郷ライフが始まった。

ブログ あんたが正しいっていつのなら！俺に勝ってみせる！（後書き）

後書きコーナー！！

龍「無謀にも東方に挑戦することにした作者であった」

変なナレーションはやめてよね！？

龍「まああつちよりは遅くなるかもしれんが・・・頑張らせるので読んでくれると嬉しい」

次回の更新予定は木曜か金曜予定です！！

龍「まあ気楽に待っていてくれ、頑張るのでな」

ではでは！

龍「ではな」

第1話 世の中に偶然なんてない、あるのは必然だけ(前書き)

今回は遅くなった上に短いです・・・。

それでもよければどうぞー！

## 第1話 世の中に偶然なんてない、あるのは必然だけ

幻想郷に来て数日。

今日はスペルカードを作る事にした。

じゃないと不便だからな。

「で？何か思いついたの？」

「まあ少しはな」

「じゃあ弾幕ごっこだぜ！」

「ああ、構わない」

弾幕ごっこに誘ってきたのは最近知り合った霧雨 魔理沙である。とりあえずスペルカード（以後スペカ）は4枚ほど作ったから試してみるか。

「じゃあスペカは4枚までで」

「オツケーだぜ」

「此処で暴れないでくれる？」

「分かっている、少し離れてからやるぞ」

「ならいいわ」

一応結界張っておくか。

「じゃあ行くぜー！」

「来い」

こうして初めての弾幕ごっこが始まった。

「こっちから行くぜー！」

「――魔符「スダーダストレヴァリエ」――」

まずは小手調べか？なら、

「――秘剣「燕返し」――」

日本刀に変化したクロスで同時に3つの斬撃を放つ。  
それだけで自分に当たる弾幕を潰す。

「やるなあ〜じゃあこれならどうだ！」

「――星符「ドラゴンメテオ」――」

すると隕石みたいに弾幕が降って来た。  
これなら、

「――光盾「ロー・アイアス熾天覆う七つの円環」――」

ロー・アイアス熾天覆う七つの円環を出して防ぐ。

二枚割れたな。やはりスペカにするとランクがかなり下がるらしい。

「弾幕はパワーだぜ！」

「――恋符「マスタースパーク」――」

目の前に白い極太レーザーが発射された。  
すごいな・・・ならば、

「――魔砲「ファントムブレイク」――」

黒い極太レーザーを放つ。  
そしてお互いの攻撃は相殺された。

「お互いにラストだ・・・悔いの無いように全力で来い」  
「勿論だぜ！」

そっぴいお互いに構えた。

「行くぜ！」  
「来い！」

――魔砲「ファイナルスパーク」――

目の前にさっきのマスタースパークよりも太いレーザーが発射された。  
なら俺もこれで行くか。

――幻想「尊く儂い理想郷」――

相手のスペルを飲み込む。

「なっ！？そりゃ反則だろ！？」  
「まったくね」

む、霊夢まで言うか。  
とまあ弾幕ごっこは俺の勝ちらしい。  
なんでも魔理沙は自分のあのスペカを使って勝てなければ負けだとの事。

「律儀だな」

「でも次は勝つぜ！」

「ああ、次も全力で相手しよう」

まだスペルは作る気だしな。

そういえば、

「霊夢」

「何？」

「まだ新品のスペカあるか？一枚でいいんだが」

「あるわよ？」

「なら持ってきてくれ」

「分かったわ」

何をする気がって？

勿論スペカの複製。

空想具現化って便利だね。

「持ってきたわよ」

「ありがとう」

「いいわよ別に・・・お賽銭入れてもらったりご飯作ってくれるんだからこれくらい構わないわ」

「そうか」

さて、さっそく複製するか。

「・・・」

「増えた？」

「そつみたいだな」

「ああ、これでカードに困ることはないな」

色々作りたいたいスペルは沢山あるからな。

オリジナルとか宝具とか。

勿論鬼巫女のスペルとか。

必然「キングクリムゾン」から永遠「レクイエム」までな。

オリジナルは今一つ思いついたから作ってみた。

「うん？もう浮かんでる・・・矛盾「全てを否定し肯定する世界」  
？どんな感じのスペルなんだ？」

「それは秘密だ、まあ弾幕ごっこをやつてれば見る事もあるだろう  
さ」

まあ切り札ジョーカーみたいなものだが。

使わないようにはしたいな。

このスペルは作った本人だから分かる。

これは加減が効かない・・・本気で使えば間違いなく此処の住人は  
死ぬ。

「さて、もう夕方だが・・・魔理沙はまだいるのか？」

「勿論だぜ！夕食をご馳走になるしな！」

「・・・はあくそんな事だろうと思つたわ、龍斗、悪いけど手伝っ  
てくれる？」

「別に構わない、誰かと一緒に料理を作るのは楽しいからな」

昔の事を思い出してしまふな・・・この光景は。

妹がいて姉がいて・・・父がいて母がいる。

そんな普通の家庭だった頃を・・・。

「・・・そう、なら早く作るわよ（そんな悲しそうな顔で言わない  
でよ・・・私が悪いみたいじゃない）」

「？」

「何でも無いわよ」

「そうか」

「で？今日は何をやるんだ？」

「魔理沙・・・」

「な、何だよ」

「空気を読みなさい」

確かに少しだけ暗くなってたが・・・だからこそ魔理沙はこうしたんだろうな。

「俺も腹が減ったからな・・・早く作って食べようか」

「龍斗まで・・・まあいいわ、今日は鍋よ、だから材料を切るのを手伝ってくれる？」

「了解した、魔理沙は配膳をしてくれ」

「了解だぜ！」

夕食を食べた後、魔理沙は帰っていった。

霊夢もすぐ寝るみたいだから俺はもう少しだけスペカを考えてみるか。

『で？どれくらいつくるのですか？』

「さてね、まあ沢山あって困るものでもないし、まあ程々にしておくれ」

4人分な。

(分かってンじゃねエか)

(ええ、助かります)

(よし！いっぱい考えようっと)

・・・面倒な事になりそうだ。  
というより寝る事ができるだろうか・・・まあいざとなれば別荘を  
出すか。

そして全員が満足した数のスペルを作るのに別荘内で5日かかった  
のは予想外だった。

そのせいで睡眠時間が2時間しかなかった。

「くそっ・・・眠い・・・」

『大丈夫ですか？マスター』

「ああ、何とかな」

『今日はどうするのですか？』

「現状況で挨拶できるやつらに挨拶しに行くさ」

『そうですか』

そして俺は他のやつらに挨拶をするために向かった。

第1話 世の中に偶然なんてない、あるのは必然だけ（後書き）

後書きコーナー！！

龍「適当だな」

違うよ！全力だよ！

龍「余計にたちが悪い」

うっ！

龍「まあこんなやつはほっておいて感謝コーナーだな、さっさとやれ」

い、イエッサー！！ユタ様、夜神様、雨季様、八雲 葵様、メガネ様、感想ありがとうございます！！

龍「次回こそは日曜には更新させる、だから待っていてくれると嬉しい」

では！また次回・・・また日常ですけどね！

龍「・・・ではな」

第2話 選択肢なんてのは他人に与えられるのではなく自ら作り出していくもの

この台詞に共感を得た龍賀です。この台詞言ったの蝶 変態ですけどね！

今回から少しの間挨拶に出かけます！龍斗が。

なので？気楽にどうぞ！

いつも通り短いですが。

## 第2話 選択肢なんてのは他人に与えられるのではなく自ら作り出していくもの

今日から他の場所に挨拶しに行く事を霊夢に言ってから向かう事にした。

霊夢は、

「あんたなら大丈夫でしょ、行って来なさい、きちんと帰ってくるのよ？」

と優しく送り出してくれた。

さっそく出かける事にした俺は、

「何処に向かうか・・・だが」

『とりあえずは面倒なところからでいいんじゃないでしょうか』

「それもそうか」

なら・・・太陽の畑に向かうか。

戦闘は必須だろうが。

『ですよ、ある程度説明されていますが間違いなくそこがややこしいですね、風見 幽香でしたっけ？』

「ああ、ある意味戦闘狂らしいからな」

『ああ、マスターと同類ですね』

「だれが戦闘狂か」

『マスターですよ、自覚なかったんですか？』

「・・・本当か？」

『嘘を言っても意味はないですよ』

確かにな・・・まあいい。

「さっさと向かうぞ」  
『話をそらしましたね?』  
「文句でも?」  
『いえ! 無いです!』  
「なら行くぞ」  
『イエッサー!』

無駄話をしながら俺は太陽の畑に向かった。

「ここが太陽の畑か・・・向日葵が綺麗だな・・・」  
『そうですね、よほど花がすきなんでしょうね』  
「だろうな、じゃないとここまで綺麗に咲かすことはできないだろうしな」  
「あら、何処の誰かしら」  
「む?」

花を見てみると目の前に女性が現れた。  
此処にいるってことは・・・。

「あなたが風見 幽香でいいのか?」  
「あら、私の名前を知ってるのね、なら何故逃げないのかしら」  
「いや、挨拶をしていてな、最初はここにしようと思っただけだ」  
「物好きね、普通のやつならここには来ないでしょうに」  
「生憎普通ではないからな」  
「あらそう、なら少しは楽しめるのかしら」

やはり戦いになるか。

「ああ、今の俺で出来る全力で相手をしよう、なら満足できるかも

な

「フフ、面白いわね、じゃあ始めましょうか」

「ああ、始めよう」

「楽しい楽しい死合いを！！」

こうしてスペルカードを使っても命の保障がまったくない勝負が始まった。

「行くわよ？」

そう言うと風見 幽香は傘を思いっきり振りかざしてきた。

「ぐ、重いな」

「あら、女性には失礼じゃないかしら」

「クク、思ってもいない事言うな」

「あら、失礼ね！」

「うおっ！？」

さらに重みが増したか。

これ以上は面倒だな。

「はあっ！」

「あら？」

「たくつ、妖怪はみんなこんなに馬鹿力なのか？」

「さあ？そうかもしれないし違うかもしれないわね」

「はあく、まだ完全に同化はできてないから精々20%か30%くらいか」

「？」

まあそれでも何とか勝てる・・・かな。

「いくぞ！」

——模倣「無想封印」——

「あの巫女のスペル？でもこれくらいじゃあ……」

そう言いながら簡単に避ける。

「喰らわないわよ？」

「それもそうか」

「この程度なのかしら？」

「いや、まだまだいけるさ」

「ならもう少し私を楽しませなさい！」

そう言いながらさらに近づき攻撃を繰り返してくる。  
つくづく思うんだが……、

「これスペルカードいるのか？」

「それを言ったらおしましじゃない」

「それもそうか、なら」

——秘剣「燕返し」——

同時に3つの斬撃を繰り返す。  
だが、

「あぶないわね」

傘で防がれた、えらく丈夫だな。

「余裕だな」

「結構キツイわよ、何よ同時で3撃なんて・・・何かの能力かしら」

「さあな、言うとても？」

「それもそうね、今は楽しめればそれでいいわ！」

そっついながらさらに攻撃をしてきた。

「やはり大妖怪は格が違うな」

「当たり前じゃない！」

そこらの妖怪なら5%もいらなかったのだが・・・15%に引き上げるか。

「ギアを上げるぞ」

「？」

「いいか？今から攻撃をするからな？不意打ち扱いはいやだからな」

「来なさい！」

――剣技「無極四式・零」――

最速の居合いを喰らわせる。

「くう！！」

「まだまだ行くぞ」

――剣技「無極一式・牙」――

「うっ！」

「どうした？もう終わりか？」

「なめないでくれる？こんなので終わる訳ないでしょ！」

「――起源「マスタースパーク」――」

妖力をレーザーに変え、発射してきた。

「クク、なら礼儀に応じてこれを使おう」

「――変化「鬼巫女」easy――」

スペルの効果によって変わる。

「ハハハ！コレで終ワリ！！」

「――必然「キングクリムゾン」――」

過程をすっ飛ばし結果だけが残る。

「・・・私の負けね」

「ふう・・・気は済んだか？」

「ええ、あなたの名前は？」

「森 龍斗だ、これからいつまでかは分からないが幻想郷に住む、よろしく頼む」

「ええ、また戦うわよ」

「・・・まあいいだろうさ」

「必ず勝ってみせるわ、覚悟しなさい」

「フツ、ああ、だが俺も簡単には負けてはやれないからな」

誓ったからな。

「それでいいのよ、だからこそ倒す意味があるの、だから私があな  
たを倒すまで負けるのは許さないから」

「クク、ああ、元々負けるつもりはねえよ、当然な」

さて、もう夜か、今日は戻ってから明日別の場所に向かうか。

「次は何時来るのかしら」

「多分挨拶が全て終わってからだからな・・・大分後だろうさ」

「そう、まあいいわ、次に会えるのを楽しみにしておくわ」

「アンタこそ物好きだな」

「そうしたのは誰かしら」

「？」

「フフ、まあいいわ、また会いましょう？」

「そうだな、またな」

こうして風見 幽香との挨拶は終わった。

ついでに言うと幽香とは話が合ったのでこんどリグルとかいうやつ  
と会う事にする。

中々面白いやつらしいので楽しみだ。

『(ドSですね、両方・・・リグルとかいう人？・・・強く生きて  
ください)』

「クク、楽しみだ」

余談だが、霊夢に太陽の畑に行ったというと怒られた。

なんでも「無茶しないでよ！」だそうだ。

幽香に勝ったと言うと、「ああ、やっぱり反則なのね」と呟いてい  
た。

失礼な、誰が反則か。

第2話 選択肢なんてのは他人に与えられるのではなく自ら作り出していくもの

後書きコーナー!!

龍「今回は太陽の畑に行っただけだな」

戦闘もしたからね!?

龍「まあどうでもいいがな」

酷いな!?

龍「まずは感謝コーナーだ」

夜神様、メガネ様、感想ありがとうございます!!

龍「次回はおそらくだが火曜か水曜だ」

次は何処に行くか楽しみにしてください!といってもその場のノリで書いてるので完全にランダムですがね!

龍「まあもし何処が行ってほしいところがあれば感想にでも書いてくれ、多分そこになるから」

ひどっ!?!そこになる可能性高いけども!

龍「はあくどうでもいい」

・・・では!また次回!

龍「無理やりメたな、まあいいか、ではな」

第3話 オレは『納得』しただけだ！『納得』は全てに優先するぜッ！！でな

今回も中途半端で雑です。

口調があっているか分からない・・・間違いがあったら言って下さ  
い！

直しますので！

第7部も面白いです！

第3話 オレは『納得』しただけだ！『納得』は全てに優先するぜッ！！でな

昨日は太陽の畑に行つて、幽香と戦つた。

さて、今日はどこに向かうか……。

『今日は人里に行つてみては？』

『そうだな、その次に妖怪の山にでもいけばいいか』

『ではさっそく向かいましょう』

「ああ」

人里なら戦いにはならんだろうしな。

そう思つていた時期が俺にもあつた。

「あなたは食べてもいい人類？」

「いや、俺は一応人間ではなく吸血鬼なんだが」

「そーなのかー」

「調子が狂うな」

こんな小さい少女が妖怪なんてな……はあく。

「君の名前は？」

「ん？ルーミア」

「ルーミアか、俺は森 龍斗だ、よろしくな？」

「よろしく〜」

ぐうづい。

腹の音が聞こえた。

「腹が減ってるのか？」  
「うう〜お腹減った〜」  
「ならこれ食べるか？」

そう言いながら俺は何処からともなくおにぎりを出す。

「食べてもいいのか？」  
「ああ、そのために出したんだからな」

そう言った瞬間、手に持っていたおにぎりが消えた。  
まあルーミアが食べたんだが。

「じゃあ俺は人里に挨拶しに行くからな、また会おう」  
「ついてくのさー」  
「は？別に構わないが・・・人は喰うなよ？」  
「りょーかいー」

本当に調子が狂う・・・。  
そう思いながらも人里へと進む。

「ここが人里か・・・」  
『ええ、そうですね、人の気配が大量にあるので』  
「そーなのさー」  
「いや、知ってるだろ」  
「わはー」  
「・・・はあ〜、挨拶を済ませよう」  
『そうですね』  
「ん？君は誰だ？見かけない顔だが」  
「俺か？」

「君以外にいないだろう」

それもそうか。

「俺は森 龍斗だ、あなたは？」

「私は上白沢 慧音だ、それで？君は何故ここに来た」

「最近幻想郷に来たからな、挨拶しているんだ」

「そうなのか、そして今回は此処に来たと」

「そういうことだ」

「そーなのかー」

「・・・」

話が・・・続き辛い。

「ルーミア」

「ん？」

「これをやるから少し静かに・・・な？」

そっぴいなながら和菓子（大福など）を渡した。

「ありがとう！」

「それで、此処の村長・・・もしくは偉い人に挨拶したくてな」

「そうか、なら寺子屋に来るか？私が話を聞こう」

「ん、分かった、向かおう」

「それよりも・・・その妖怪は大丈夫なのか？」

「ああ、人喰いの衝動を零にしているからな、普通の料理で満足できる状態だ」

「そうか、なら安心だな」

まあ俺からあまり離れなければ・・・だがな。

「さて、さっそく向かうとしよう、もしかしたらほかに人が一人いるかもしれないが気にしないでくれ」

「分かった、ルーミアも連れて行っていいか？」

「ああ、構わない」

理由は説明したしな。

そんなこんなで寺子屋に到着。いたって普通？の寺子屋だ。

「ここが寺子屋だ、よかつたら先生を試してみるか？」

「いきなりだな・・・まあ考えておくよ」

先生か・・・まあ悪くはないよな。

「ああ、そうしてくれるとありがたい、で？挨拶以外に何かするこ  
とはないのか？」

「する事か・・・なら幻想郷（ここ）の説明をしてくれるか？まだ知らない  
事が多い」

「分かった」

少女（笑）説明中・・・

――「無何有浄化」――

ぎゃあああああああああ！！

「どうかしたか？」

「いや、不快な気配がしてな」

「？」

「そーなのかー」

「気のせいだろう、さて、説明が終わったが・・・」  
「おーい、慧音くいるか〜」  
「む？どうやら妹紅が来たようだな」

どうやら来たようだ。

「ん？お客さんか？お邪魔したみたいだな」  
「いや、もうそろそろ帰るところだ、気にしないでくれ  
くれ〜」

「は？ま、まあそういうならいいけど・・・」

「じゃあな、また会おう」

「ああ、次は教師として来てくれるか？」

「フツ、考えておこう」

こうして人里での挨拶は終わった。

阿求？いなかったんだよ。

多分何処か行ってるんだろうさ、また次来る時にでも挨拶するぞ。

「さて、ルーミアはどうするんだ？」

「？」

「いつまでも一緒にいる訳のもいかなだろ」

「そーなのか？」

「ああ、で？どうする・・・」

「あっ！ルーミア！探したよ！」

「あっ！リグルだ〜」

「リグルだ〜じゃないよ、皆で探したんだよ？」

どうやらルーミアは皆とはぐれていたらしい。

でも空腹には耐え切れなかったと。

「ごめんなさい・・・」(シユン)

すごく落ち込んでいるな・・・相手は罪悪感があるだろうな。

『あれは狙ってるのでしょうか』

「いや、天然だと信じたいな」

じゃないと色々信じれなくなりそうだな。

「あゝ、別にいいよ？で、でもね？心配したんだからね？」

「うん」

「あゝミステリアも大ちゃんも心配してたよ？」

「チルノは？」

「えゝと・・・遊んでた」

馬鹿だな

『馬鹿ですね』

「リグルだったか？あの子」

『ええ、そのはず・・・まさか』

「幽香が進めてくれたんだ・・・面白い反応するんだろうなア」

『ちよっ！？リグルさんっ！逃げてください！！』

「えっ？」

幽香に教わった方法でやってみるか。

『逃げてー！リグルさん超逃げてー！！』

「ど、どちら様で？」

「ん？俺は幽香の友達（了承済み）だよ」

「え、幽香さんの？」

「ああ、君の事を聞いてね、面白そうだから会ってみる事にしたんだ」

「そ、そうですか（何故だろう・・・この人からは幽香さんと同じ雰囲気気がする）」

あア楽しみだなア。

「さア！俺を楽しませてミロ！」

『（弄り甲斐がある人を見ると発動するドSを超えた超ドSモード・  
・止められませんね・・・すみません、無力な私を許してください  
い）』

「え・・・ま、まさか」

「幽香が教えてくれたからな・・・その方法でいこう」

「に、にげっ！」

「逃げるなら・・・いや、もう遅いか」

「その後リグルの姿を見たものは誰もいなかったのか」

『洒落になってないんですが』

その後リグルをいじ・・・弄って遊んでいたら夜になりかけたので戻る事にした。

弄っているときに何故カリグルの顔が嬉しそうだったのが気になるが・・・気のせいだろ。

第3話 オレは『納得』しただけだ！『納得』は全てに優先するぜッ！！でな  
後書きコーナー！！

龍「次は何処に行くんだ？」

一応妖怪の山かな？

龍「その次は？」

多分紅魔郷編かなあ。

龍「・・・考えているのならいい、では感謝コーナー」

Jam様、雨季様、メガネ様、ケルベルス様、月詠様、感想ありがとう  
ございます！！

龍「次回はおそらく金曜か土曜だろうな」

あくまで予定ですので少し遅れるかもです！

龍「それでも間に合うように頑張るから気長に待ってて欲しい」

ではでは！また次回！

龍「ではな」

第4話・・・僕は自分のした事に一片の後悔もない たとえ何度生まれ変わ

今回は妖怪の山です！

にとりの口調が気を抜くと某ラジオの口調に……。

いつも通りのグダグダ感ですがどうぞ！

第4話・・・僕は自分のした事に 一片の後悔もない たとえ何度生まれ変わ

今日は妖怪の山に向かう事にした。

「さて、ついたぞ妖怪の山」

『着きましたね』

面倒なのは戦闘だが・・・ネタに走るから大丈夫だろ。

「そこのお前！何用だ！ここは無断で入るのは禁止されているんだ！早く戻れ！」

「さて」

天狗（下っ端）が現れた。どうする？

戦う

世紀末バスケ

アイテム

逃げる

「ユクゾ！」

「なっ!？」

『逃げてー！超逃げてー!!』

ナギッペシペシナギッペシペシハアーンナギッハアーンテンシヨ  
ヒヤクレツナギツカクゴオナギツナギツフウハアナギツゲキ  
リュウニゲキリュウニミヲマカセドウカナギツカクゴーハアール  
シヨウヒヤクレツケンナギツハアアアアキーンホクトウジョウダ  
ンジンケンK.O.

「命は投げ捨てるもの（キリッ）」

『非殺傷設定ですけどね』

「あやや、これはどういう事何でしょうか、新しく来た外来人がいたと思えば・・・部下がやられているじゃないですか」

「話を聞いてくれそうになかったからな、いかにも人間を見下してそうだったしな、まあ俺は吸血鬼だがな」

「おや、そうなんですか？人間にしか見えませんが」

「まあ元人間だからな」

「？」

「まあどうでもいいだろ、で？お前は誰だ？部下がやられてるところを見て、俺のほうを観察しているなんて趣味が悪いぞ？」

「あ、あやや・・・ばれてましたか、それはともかく、私は清く正しい射命丸 文です！」

清く正しい？

「何故でしょうか、疑問に思われたくないものを疑問に思われた気が・・・」

「気のせいだろ？」

此処ではコイツにでも挨拶してればいいか。

天魔だっけか？はコイツに頼めばいいだろうし。

「で？何か御用ですか？態々ここまで来たのですし、あっ！用がなければ取材を！」

「用は挨拶だ、それと取材は気が向いたらな」

「受けてくれるんですね！いや〜よかったですよ、取材もせずに記事にしたせいで信憑性が・・・」

は？コイツ今なんて……。

「幽香さんを倒したと言う事で有名ですよ？私も記事にしましたし、あっ、これ文々。新聞です、購読よろしくお願ひします！」

そう言いながらやつは新聞を渡してきた。

見出しは、

『新しく来た外来人、フラワーマスターを余裕で倒す』

だった。

合っているだけムカつくんだが。

でもそうか……コイツのせいか。

「お前の所為か……」

「はい？」

「お前の所為で雑魚妖怪共の相手を無駄にさせられてるのか！」

「は、はい？」

「最近おかしいと思ったんだ、何故ここまで妖怪が襲ってくるのかと、その中には新聞がどーとか言ってたからな……お前だったのか」

そのせいでストレスが溜まりまくったんだよ……100%で表示と30%だ。残りの70%？女装とか女装とか女装に決まっているだろうが！

『マスターが壊れていく……』

「うおっ！？だ、誰ですか！？」

『あっ、私はですね……』

デバイス説明中・・・

「なるほど・・・にとりが聞いたら興味を持ちそうですね」

「にとり？」

「ええ、河童ですよ、何なら会いますか？」

「どんなに下手に出ようとも許さないからな？」

「ひい！？わ、分かってますよ！ほらっ！早く向かいますよ！」

そう言いながらやつ・・・文は飛んでいった。

そういえば天狗（下っ端）を忘れていたな・・・まあ大丈夫だろ。

ギャグ補正あるし。

それよりも早く行かないとはぐれてしまうな。

急ぐか。

さて、さっそく着いた訳だが・・・。

「で、では！私はこれから用事を思い出したので帰らせていただきます！」

「だが断る」

「離して下さい！まだ死にたくないです！」

「何も殺すとは言っていない」

「え？」

「せめて痛みを知らず死ぬがいい（いい笑顔で」

「やっぱり死ぬんじゃないですかー！」

「あ、あの〜」

「ん？」

「な、何かあったの？」

「コイツが勝手に記事にした、以上」

「あ〜」

「ちよっ！？諦めないで下さいよ!?!」

まあ自業自得だしな。

『で？どうするんですか？』

「えっ！？機械が喋った？」

『以下略・・・略された気が！』

「気のせいだろ？」

「へ〜興味深いね、見せてくれない？」

「すまん、コイツは俺の相棒だから、他人に簡単に見せる訳にはいかないんでね」

「ふ〜ん、分かった！」

よかった・・・まあ大丈夫だとは思ってたがな。

「で？どうするんですか？」

「む、そうだな・・・そこに隠れているやつと将棋でもするかな？」

「はいっ！？」

おっ、出てきた。

今更だが・・・自己紹介は終わらせてある。

「さて、相手してくれるか？将棋は中々好きなんだ」

「はあ、構いませんが」

「ならやるぞ、文、もう戻ってもいいぞ？まあ天魔だったか？によるしかな、これ土産」

そっいいながら酒を渡す。

「はあ、別に構わないんですがね、では！」

「じゃあ将棋だ」

「はい、お手柔らかに」

こうして夕方まで将棋をした。

勝敗は5勝5敗だった。

かなり強かったから白熱してしまった。

犬走 椀だったか、また将棋をしたいものだ。

次は俺が勝ち越してみせるからな。

河城 にとりとは次に会ったら作ったやつを見せてもらおう約束をした。

勿論土産は渡すつもりだ。

次は永遠亭か・・・兎が鬱陶しいらしいが・・・大丈夫だろうか。

『大丈夫ですよ、気楽に行きましょう』

「そうだな、じゃあ帰るか」

もう神社が俺の家な気がしてきた。

そう言うのと霊夢は少し嬉しそうな顔をしていた。

第4話・・・僕は自分のした事に 一片の後悔もない たとえ何度生まれ変わ

後書きコーナー!!

龍「やれやれだぜ」

いきなりどうした？

龍「今ならお前をプツンオラでボコボコにできそつだ」

何故に!?

龍「お前は俺を怒らせた」

り、理由は？

龍「シユタインズゲートのゲームに逃げようとしたな？」

ソナナコトハナイヨー。

龍「久々にポケモンをしたり」

イ、イヤダナー・・・ソナナコトシテナイヨー。

龍「さあ・・・覚悟はできたか？」

無理です!

龍「答えは聞いてない!星の白金!ザ・ワールド!!」

ちよっ・・・シーン

龍「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラア！！そして時は動き出す」

ガフツ！？あ、ありのまま今起こった事を話すぜ！

龍「黙っている」

イエッサー！！

龍「さて、感謝コーナーだ」

Jam様、ケルベルス様、メガネ様、月詠様、感想ありがとうございます！！

龍「次回の更新は早ければ月曜、遅ければ火曜だ」

次は永遠亭かもしくは紅魔郷です！

龍「そこは作者の気紛れなんぞな、すまない」

では！また次回お会いしましょう！！

龍「ではな」

第5話 我は空、我は剛、我は刃！我は一振りの剣にて、全ての『罪』を刈り取

また題名が・・・気にしないで頑張ろう！

でもグダグダ・・・orz

戦闘描写を少し頑張ってみました！たいして変わってないかもですが・・・。

先生・・・文才が・・・ほしいです！！

第5話 我は空、我は剛、我は刃！我は一振りの剣にて、全ての『罪』を刈り取

妖怪の山に行つた次の日。

今日は永遠亭に向かう事に。

まあ・・・、

「世話になる事はないだろうかな」

『大抵の怪我は一瞬で治りますしね』

「ああ、まあ挨拶しておいて損はないだろ」

『そうですね』

確か迷いの竹林にあるんだつたか？

もう殆ど覚えてないな。原作知識。

まあいいか・・・覚えていない方がいい事もあるからな。

「で？ここが竹林か」

『はい、ここからはかなり迷いやすいそうです』

「名前通りだな」

迷う原因が幻術とかなら無駄だな。

俺には眼があるからな。

「後どれくらいで着くか分かるか？」

『もう少しだとは思いますが・・・罨には気をつけてくださいね？』

「ああ、あんな幼稚な罨にかかる奴はいないだろ」

そう言いながら落とし穴を見る。

・・・あの兎耳はなんだ？まさか引つかかって・・・いや、まだ決  
め付けるのは早い。

確認してからだ。

「大丈夫か？」

「は、はい。た、助けてください」

「ああ、了解した」

そう言いながらその兎耳の女を落とし穴から出した。

「た、助かりました、ありがとうございます」

「いや、まあ・・・偶然だから気にするな」

まさか本当に引つかかっているやつを見るとはな。

「くうくうてゐのやつく覚悟してなさいよ・・・」

「どうかしたか？」

「いえ、なんでもありません!!」

「そ、そうか」

そういえば此処にいるということは・・・永遠亭の住人か。

「君は永遠亭の？」

「はい・・・そうですが？」

あつ、言葉が足りなかったか？

「まさか・・・月からの追っ手！」

「話を・・・」

「追っ手からの話なんて聞かないわ！此処から消えなさい！さもな  
いと・・・」

「さもないと？」

もうやけど。

「此処で死んでもらう！」

――波符「マインドシェイカー赤眼催眠」――

同じように見える弾幕が張られる。

どうやら能力で見辛くしているみたいだな・・・なら、

――恐符「始めから誰もいなかった」――

相手の弾幕に合わせるように黒と白の弾幕が襲う。

これで大丈夫か？

「くっ！なら！」

――狂符「ビジョナリチューニング幻視調律」――

さっきと同じように幻覚を使って、弾幕を張ってくる。  
面倒だな。

「消える」

――虚無「全て消えた世界」――

相手の弾幕に対して、見え辛いほぼ透明な壁を作る。  
その壁に当たった弾幕は全て消えた。

「え！？」

「そら、次はこっちからだ」

――幻想「全て止まりし世界」――

時を止めて、通常弾幕（白と黒の弾幕）を放つ。

「そして時は動き出す・・・何てな」

「はっ！？くっ！」

――狂視「イリュージョンシーカー狂視調律」――

さっきの弾幕の強化版か・・・こちらの弾幕が打ち消されたか・・・。

「次よ！」

――アイドリングウエーブ懶符「生神停止」――

周りの使い魔？みたいなものから複数の弾幕が現れる。

これくらいなら余裕だろうが・・・、

「今！」

まあ簡単にはいかないよな・・・あの狂気の目はややこしいな。

普通の人間なら抵抗すら出来ないだろうな、俺は人間じゃないけどな。

目のせいかな、抵抗しないでおくと、弾幕が増えたり勝手に移動しているように見えてしまう。

さっさと終わらせようか。

「そろそろ終わりにしようか・・・」

「負けない・・・負けられないのよ!」

「これでラストだ」

「はあああああ!」  
「ルナティックレッドアイズ 幻想月睨」

原作のゲームでもラストワードのスペルだ。

全方位に撃たれる高速度の粒弾と、全方位こつち狙いの青中弾が放たれる。

その後、あの目で幻覚を見せて、いくつかの弾幕が消える。

「面白いが・・・もう終わらせるといったからな」

「ラグナロク 幻想「神々の戦争」」

まるで今までの弾幕がお遊びのような弾幕を相手に浴びせる。その弾幕はもはやただのレーザーとかしていた。相手はこれで力尽きたらしい。

「これで話を聞いてくれるか？」

『でしようね』

「くっ・・・すみません・・・師匠・・・姫様・・・」

「まだ勘違いしてるのね・・・」

「し、師匠!？」

目の前に現れたのは特徴的な服を着た女性だった。

赤と青はやりすぎだと思っただが・・・。

まあいいか。

「で？俺の疑いは晴れたのか？」

「そもそも最初から疑ってないわよ、あなたは挨拶しに来ただけだ

もの」

「え!?!」

今までの戦闘は全て無駄だったのか。  
別に構わないが。

「で? あんたが永琳か?」

「ええ、あなたは?」

「俺は森 龍斗だ」

「ほら、あなたも挨拶しなさい」

「はい、鈴仙・優曇華院・イナバです」

これで今は大丈夫か?

「家に来てくれるかしら?」

「別に構わない」

という事で永遠亭に到着。

どうやら全員と挨拶することができそうだ。

「姫様、お客です」

「そう? 少し待っていてくれる?」

「早くしてくださいね」

僅かにゲームの電源を切る音が聞こえた・・・気にしないでおう。  
その後自己紹介を済ませた。

「もう用は終わったの?」

「ああ、もうそろそろ帰るさ」

「そう、次は何時来るのかしら?」

「さてね、まあ暇な時に思い出したら向かつま」  
「ならいいわ」

まあ異変が来れば嫌でも世話になるかもな、相手が。

「じゃあ帰る、そこに隠れているう詐欺に一言言っておこう」  
ずっと隠れていたからな。

「俺を罠に嵌めたければその3倍は持って来い、それでもかかりはしないがな……まあ俺以外に罠を使うなら余裕で手伝うが」

『（鈴仙さん……ご愁傷様です）』

俺が言った一言で鈴仙が絶望したような顔をしていたが……何故だろうか。

『まあ自分が引つかかる罠がグレードアップするとなればそうなりますよね』

「？」

『（駄目だこのマスター……早く何とかしないと！）』

そして神社に戻ろうとしていた。  
だが、

「ぐっ！」

『マスター？』

「やはり無防備にあの眼を見るんじゃないかな……狂気が膨れ上がってる……」

『大丈夫なんですか？』

「さてね、まあいざとなれば発散するさ、今のようにな」

「「「GUUUUUU」」」

話しているうちにどうやら雑魚妖怪共が集まったみたいだ……。

「恨むなどは言わない……恨みなければ存分に恨め……そして今のタイミングで此処に来てしまった己も恨め」

アア……少シ壊ソウカ……。

「ジャアナ」

――絶望「全て消滅せし世界」――

その時、幻想郷の一部の土地が丸ごと消滅した。

だが、その後すぐに何もなかったように戻っていた。

第5話 我は空、我は剛、我は刃！我は一振りの剣にて、全ての『罪』を刈り取

後書きコーナー！！

龍「遅い」

すみません！！

龍「本来なら遅くとも昨日に投稿じゃなかったか？」

思い浮かびませんでした！！

龍「次は守れよ？」

イエッサー！！

龍「さて、感謝コーナーだ」

メガネ様、荒井スミス様、月詠様、感想ありがとうございます！！

龍「こんな駄文ですまないな、作者自身何がしたいか分かり辛いから嘆いている」

もっと精進できるように頑張ります！！

龍「次回はおそらく木曜だ、次は守らせるからみてくれると嬉しい」

では！また次回！

龍「ではな」

**第6話 俺は俺の心情に肩入れしているだけだ！（前書き）**

Fateの兄貴はマジ格好いい。

はい！いつも通りのの？寧ろいつも以上の？駄文です。

今回から紅魔郷編です。

もう片方でやった番外編とは微妙に違う終わり方にする予定です！！  
多分後4話くらいですが頑張ります！！

## 第6話 俺は俺の心情に肩入れしているだけだ！

永遠亭への挨拶が済み、次は何処に行こうか悩んでいると、

「ん？何だ、この霧・・・紅い？」

『どつやらこれが異変のようですね』

「なら霊夢が動くのか・・・俺も行ってみるか」

『別に構わないのでは？その方が楽ですし』

なら聞いてみるか。

「霊夢」

「いいわよ？」

「聞いてたのか」

「ええ、聞こえてたわよ、別にいいわよ、その方が楽できるし」

「だろうな」

「さて、行くわよ！」

「待て！私も行くぜ！！」

気がついたら魔理沙がいた。

3人になるのか。別にいいがな。

「ならさっさと終わらせようか」

「ええ、じゃないと洗濯物が乾かないじゃない！」

やはりそんな理由か・・・霊夢らしいと言えばらしいのか？

「ふむ、何処か分かるか？」

「私の勘があっちって言うてるわ」

「ならあつちに行くか」

理不尽なほど当たるからな。

「じゃあとつとと行くぜ!!」

「ああ」

「ええ」

そして俺達は異変解決に出かけた。

「というより・・・」

「どうかしたのか？」

「なんでそんな装備なのかしら」

「ん？」

おかしいところがあるか？

今の俺の装備はクロス（モード2nd）と、エアと断罪者+黒鍵（ジャッジメント）

これはいくらでも出せる（を装備状態なんだが・・・おかしいか？

「装備多すぎだぜ・・・」

「そうか？」

「ええ、もう少し減らしてくれる？」

「別に構わない」

そう言いながら俺は黒鍵とエアをしまった。

「霧が鬱陶しいな・・・紅いから尚更だな」

「まあ仕方ないな、異変だから・・・早く終わらせよう」

まあすぐに終わってくれる方が楽だからな。

「龍斗〜!!」

「なんだ？グフツ!!」

いきなりタツクル・・・新手の奇襲か！？  
つて・・・ルーミアか。

「どうした？」

「龍斗が見えたから！」

「そうか、嬉しい限りだ」（ナデナデ  
ん〜）」

悪意のない攻撃は避け辛いからな・・・でも撫でていると小動物にしか見えないな。

「とりあえず先に進みたいんだが？」

「一緒についてってもいい？」

「別に構わないが・・・」

「おいおい、これ以上増えるのは勘弁だぜ？」

「？別に仲間が増えるのはいい事だと思っが？」

「そうじゃないんだけどなー」

ん？何故呆れたような表情をする。

「どうでもいいけど・・・先に進むわよ（何で龍斗には女がよりま  
くるのかしら・・・）」

何故か不機嫌な霊夢についていくことに。  
無論ルーミアもついてきた。

「ここは・・・湖か」

「冷えるなあ・・・」

「さぶいわね・・・」

「そーなのかー」

「アンタ達ね！アタイの縄張りに入ってきたやつはー！！」

何故か妖精の登場。

まあ理由はいつている通りなんだろうが・・・。

「すまないな、すぐに退くから通してくれないか？」

「龍斗！そんなもの戦って通ればいいんだぜ！」

そう言いながら魔理沙は八卦炉を構える。

「とりあえず・・・」

霊夢まで札を構える。

「早く進むためにもさっさと倒すわよ」

「はあくそこの妖精、通してくれないか？無理なら・・・押し通る  
」！」

もう自棄になつて断罪者ジャッジメントを構える。

『（どう考えても過剰戦力です、本当にありがとございました）  
』  
「いくぞ」

「ええ（おう）！」

「うえっ！？え、えつと・・・」

「恋符「マスタースパーク」」



「龍斗、まだなのかな？」

そういえばルーミアが背中にいたな。  
軽すぎて気づかなかった。

「ああ、今向かう所だ、ではな」

「うん！」

まあ自己紹介は済ませているから大丈夫だろうな……妖精だけど大丈夫だよな？チルノ。

第6話 俺は俺の心情に肩入れしているだけだ！（後書き）

後書きコーナー！！

龍「遅い」

すみません！！

龍「理由は？」

本当に悩んでいたのと、PCが不調なためです！！

龍「買いなおす余裕がないもんな」

そうなんだよね。親父が帰ってきたら頼めそうんだけど・・・。

龍「まあ今の状態で頑張るしかないな」

（言えない・・・ポケモンのホワイトでテッカニンとガブリアスを育ててたなんて言えない！）

龍「？まあいい、感謝コーナーだ」

Jam様、メガネ様、感想ありがとうございます！！

龍「毎度約束を守れなくてすまない、次はおそらく日曜だろうが・・・少し遅れるかもしれん」

PCの調子がよければ大丈夫です！！

龍「ではな、また次回で会おう」

ではでは！

第7話 我らは神の代理人、神罰の地上代行者 我らが使命は我が神に逆らう

はい、今回もサブタイが長いです。

今回は遅くなっていたので急いで書いたものです。

カオスもしくは訳が分からないよ・・・になると思われるのですが、ご了承ください。

第7話 我らは神の代理人、神罰の地上代行者 我らが使命は我が神に逆らう事

チルノと別れてから少し・・・霊夢たちと合流した。

「何しに行つてたんだ？」

「まあお詫びをな」

「ふん」

「どうでもいいからさっさと進むわよ」

「了解だ」

ルーミアがまだ背中にいるので、あまりスピードが出せないのいてくれと頼んでも無理だしな。

「さて、もう少しだよな？」

「ええ、もう目の前のはずよ」

「ならあれは門番か？」

「え？」

目の前にいかにも私中国人ですといったげな格好をした人間？・・・妖怪か、がいた。

「此処に何の用ですか？」

「この霧を止めてほしくてね、ここが怪しいから此処に来たんだ」

「そうですか、なら通す訳にはいきません!!」

それだと告白しているよな？此処の主が異変を起こしていますって。

「なら此処に犯人がいるのね、さっさと行きたいから通してくれるかしら」

「無理と言いましたが？」

「なら無理やり通るだけだぜ！」

「結局こうなるんだな」

「私の名は紅 美鈴！此処を通りたければ私を倒してからにしない！！」

「望むところだぜ！！」

こうして紅 美鈴とのスペルカードバトルが始まった。

「行きますよ！！」

「――華符「芳華絢爛」――」

相手の弾幕が全方位にばら撒かれる……。少し避けるのは面倒か？

「まどろっこしいんだぜ！！」

「――恋符「マスタースパーク」――」

大きなレーザーで相手の弾幕が打ち消される。

「くっ！」

「何処を見ているのかしら、私もいるわよ！！」

「――霊符「夢想封印」――」

相手をホーミングする光の玉を打ち出す。相変わらず卑怯くさいスペルだな。

「アンタに言われたくないわ」

「まったくだぜ」

「何故分かった？」

「顔をみて何となく」

「何それ怖い」

迂闊に考えられないんだが……。

「考え事とは余裕ですね！こちらから行きますよ！！」

——虹符「彩虹の風鈴」——

虹色の弾が全方向にばら撒かれる。

全方位好きだな……おい。

「ちっ！」

——魔弾「爆裂炸裂弾」——

相手の弾幕に当たった瞬間、爆発し、数が増え、打ち消しながら相手に向かう。

その数は200。

「くっ！」

——彩符「彩光乱舞」——

虹色の弾幕がさらにはら撒かれる。

それによって俺のスペルも消されてしまう。

「まだまだです！」

——彩符「極彩颱風」——

相手は虹色の弾幕を高濃度で放ってきた。  
数が多いので避けるのも一苦労だな。  
まあ面倒なだけとも言えるが……。

「どうしましたか？もう終わりですか？」

「冗談はよしてくれ、まだまだ頑張れるさ、なあ？魔理沙、霊夢」

「ああ！（勿論！）」

元気だな。

「さて、終わらせる！」

「出来るものなら！！」

——幻想「否定されし存在」——

目の前が見えなくなるほどの弾幕を放つ。  
それはまるで存在が肯定されないようにも見える。

「くっ！きゃあああああ！！」

相手が完全に被弾したため、終わった。

「さて、通してもらっぞ」

「すいません……お嬢様……」

何故かこっちが悪党に見えるな。

「さて、行くわよ」

「おう！」

「分かった」

「そーなのかー」

そういえばルーミアが背中にいた状態で戦ってたんだな。軽すぎて忘れていた。

そんなこんなで紅魔館へ到着。

地下から懐かしい感じがする。

この感じ・・・誰かが狂気に飲まれているな。

自分も飲まれた事があるからな。

まあ会ったら何とかするか。

「さて、今何処に向かっているんだ？」

「多分・・・図書館ね」

「何故分かる」

「勘よ」

「何それ怖い」

「そーなのかー」

と言う事は・・・また面倒そうだな。

「さて、此処がそうか？」

「そうみたいね、早く入るわよ」

「おう！楽しみだぜ！」

「食べ物あるかなー」

「無いだろ」

図書館に入ると、本が大量に見えた。

すごいな・・・これだけあれば何かすごい本が沢山見つかりそうだ。

「あなた達はだれかしら、客を招いた覚えはないんだけど」

「さあ？まあこの霧を何とかしてほしくてね、君が主犯か？」

「いいえ、でもそれが目的ならここは通せないわ」

「ならさつきと同じで無理やり通るぜ！」

「私はパチユリー・ノーレッジよ」

「む？俺は森 龍斗だ」

「私は霧雨 魔理沙だぜ！」

「私は博霊 霊夢よ」

「ふ〜ん・・・龍斗と言ったかしら」

「ああ」

「あなたはものすごい魔力を持っているのね、勿論妖力も霊力も」

「そうみたいだな」

紫に教えられるまで妖力があるのは気づかなかったからな。

「少し研究させてくれないかしら？」

「無理だな！」

「ええ、却下よ」

何故俺より先に断る？まあ俺も断るつもりだったが。

「そう、まあ断られるのは分かってたからいいけど・・・さつきも

言ったけれど、此処から先は行かせないわよ」

「なら押し通るまでだ」

「勿論だぜ！」

「ほら、さつさとやるわよ」

「魔女の力見せてあげる」

こうしてバトルは始まった。  
そして少し時間が経った。

「やるわね・・・ならこれならどうかしら」

「火符「アグニシャイン」」

火属性による弾幕がなされる。

「無駄だ」

「水符「ウォータープラネット」」

周りを水属性の弾幕で潰す。

これでスペルブレイク・・・次は何で来る・・・。

「次はこれよ」

「金符「メタルファティグ」」

黄色の中くらいの玉がはじけた。  
そうとしか言えない弾幕だった。

「くっ！ならこっちはこうだぜ！！」

「魔符「スダードストレヴァリエ」」

弾幕をばら撒きながら移動するため、相手の弾幕を消しながら進んだ。

「ならばこれはよ」

「――月符「サイレントヘレナ」――」

相手から粒弾が放たれた。

少しの間避けていると、ワイヤーみたいなものが段々、下向きにも撃たれる様になった。

消さないと拙いな。

「ならこれだ」

「――虚無「世界消滅」――」

名前負けしてそうだが、相手のスペルを消すだけなら十分だ。

「やるわね・・・次はこれ」

「――日符「ロイヤルフレア」――」

弧状に連なった赤い玉がばら撒かれる。

どうやらこれはパターンがあるみたいだな。

「もう少しで終わる・・・もう少し頑張れよ」

「勿論だぜ！此処の本を持っていくためにもな！」

「どうでもいいから早く終わらせたいのだけど」

「ハハ、了解」

「お喋りは済んだかしら？」

「ああ、待ってくれてたのか？」

「簡単に避けておいてよく言っわ」

「さてね」

「まあいいわ、このスペルもブレイクされた・・・ならこれでラストよ!」

――火水木金土符「賢者の石」――

今まで出てきた全ての色の玉が出される。

自分狙いや、ばら撒き、固定などを使ったスペルらしい・・・。

「君がどんなスペルで来ようとも・・・俺はその全てを凌駕するのみだ!」

――幻想「気高き理想郷」――

相手の弾幕より少しだけ密度の高い弾幕が出される。

このスペルは相手のスペルによって威力が増減するスペルだ。相手が強いスペルを使えば使うほどこのスペルの威力が上がるようになってる。

「これで終わりだ」

「むきゅ」

「大丈夫か？」

「え、ええ」

どうやら大丈夫なようだな。

「それじゃあ先に進ませてもらうぞ」

「ええ、止めることができないから仕方ないわ」

「なら此処の本を借りるぜ!」

「持ってかないで」

「大丈夫だって!死んだら返すぜ!」

「それを泥棒というんだが？」  
「そーなのかー」

まったく・・・。

「借りるなら死ぬまでじゃなくきちんとした日にちを決めろ、じゃないと邪魔するぞ?」

「うっ!なら一ヶ月でどうだ!」

「・・・それくらいなら大丈夫よ、でも一回につき5冊が限度、それ以上は無理よ」

「分かったぜ!」

ふう・・・これで大丈夫か。

「さて、先に進むか」

「ええ(おう)」

こうして俺達4人は先に進んだ。  
でも途中でルーミアがいなくなっていたのに少し驚いた。  
何処に行ったのだろうか・・・少し不安だ。

第7話 我らは神の代理人、神罰の地上代行者 我らが使命は我が神に逆らう事

後書きコーナー!!

龍「遅い」

少し体調崩したので・・・後PCの調子が・・・。

龍「まあそれならもつと急げ、後体調管理は大事にな」

イエツサー!!

龍「感謝コーナー」

ケルベルス様、メガネ様、感想ありがとうございます!!

龍「次回も頑張るのでゆっくり待ってて欲しい」

一応予定では木曜更新予定です!!

龍「後2、3話で紅魔郷は終わるだろうな、多分」

なので頑張ります!!

龍「ではな、また次回」

ではでは!

**第8話 犠牲があるから救いがあんだよ(前書き)**

はい、遅くなりました。

吐き気だけマシになったので投稿。

頭痛や眩暈は継続していますが、投稿しないと逆に落ち着かないので投稿しました。

期待せずどうぞー!!

## 第8話 犠牲があるから救いがあんだよ

図書館から少し飛ぶと、  
メイドが現れた。

「おや？君は・・・従者が出てきたという事はその主が近くにいるか、命令されたか・・・まあもうすぐで終わる事は確実だな」

「そうだな！」

「ええ、早く終わらせてお茶が飲みたいわ」

「龍斗さん・・・だったかしら？」

「ん？」

メイドから名前を呼ばれたので反応したのだが・・・教えていないはず・・・何故知っている。

「私はお嬢様の従者の十六夜 咲夜と申します、お嬢様がつれて来いと仰ったのでお迎えにあがりました」

「は？」

どうやら興味をもたれたみたいだな・・・この様子だと。

「なら行くわよ」

「そうだな」

「あら、あなた達は許可してないわよ？」

そう言いながらナイフを投げた。

霊夢や魔理沙がつまぐ反応できなかったのはやはり時を止められたからだろうな。

「どうやらあなたには能力が効かないようなので止めた状態で案内しますのでついてきて下さい」  
「分かった」

そして時は止められ、進む事に。

「あの2人をどうするんだ？」  
「私がお相手するのでご安心を・・・別に殺したりはしませんので  
「ならいいが・・・間違つても殺してみる・・・お前を殺すから  
な？」

少し殺気を込める。

「!？は、はい・・・分かっていきます」  
「それと敬語はなくて構わない、今は敵対しているのだからな」  
「・・・分かったわ、ここがお嬢様の部屋よ、無礼な事はしないで  
よ」  
「さて、約束しかねるな、一応異変解決に動いているのだから」  
「・・・はあく、じゃあ入るわよ」  
「ああ」

そう言つて咲夜は能力を解いた。

「お嬢様、森 龍斗を連れてきました」  
「入りなさい」  
「はい」

中から返事が返ってきた。

少しだけ幼い・・・しかし威厳を持った声が聞こえる。  
油断はしないが・・・全力で行かないとな。

「失礼する」

「ええ、ようこそ、紅魔館へ、用はこの霧でしょう？」

「ああ、この霧に意味はあるのか？」

「私日差しが苦手なのよ」

「吸血鬼だからか？」

「ええ、でもあなたからも吸血鬼の気配がするのだけれど・・・何故日差しを浴びても大丈夫なのかしら？」

「・・・真祖の吸血鬼だからな、まあ完全に大丈夫な訳ではない、朝と昼は少し力が弱まるからな」

「そう・・・真祖ね」

「どうやら納得したらしい。

「俺の名前は知ってるみたいだからそつちの名前を教えてください、そつちが知っててこつちが知らないのは不公平だろう？」

「フフ、そうね、私はレミリア・スカーレットよ」

「そうか、で？用件はまだあるんだろ？」

「ええ、真祖と聞いてさらにやる気が出てきたわ・・・」

「俺の力をみたいと？」

「ええ、私より上の存在が私より弱かったら嫌じゃない、だから戦ってみたいのよ」

「いいぞ、どうせ異変を解決するのに必要なものだったからな」

「フフ・・・今夜はこんなにも紅い月が出てるわ・・・」

「そうだな」

「「楽しい夜になりそうね（だな）」」

「こうしてレミリアとの弾幕ごっこが始まった。

「ほらほら！どうしたのかしら！その程度じゃ私には勝てないわよ

「？」

「・・・クロス、モード2nd」

『了解です』

クrossを銃に変える。

「行くぞ」

「ええ、来なさい!!」

――滅罪「原罪の矢」――

一部をイノセンスに変え、矢を撃ち出す。

「その程度かしら？」

そう言いながらレミリアは攻撃を避けながら接近してきた。  
この距離は!?!

「喰らいなさい」

――紅符「不夜城レッド」――

レミリアから十字に紅い霧状のオーラが出てきた。

「うおっ!?!」

それをぎりぎり避ける。

「やるわね」

「まあまあだろ?これくらいできなきゃ生きていけないからな」

「確かにそうね」

「ほらっ！次は俺からだ」

「ー狼符「ブルート・フォルモント」ー」

狼に姿を変える。

「なっ!?!」

「見せてやろうっ……この姿の力を!」

「ぐっ!」

相手を宙に浮かせ、連撃を繰り出す。

「満月の呪い、受けるがよい!」

「ぐう!」

さらに攻撃をする。

そして……、

「闇夜さえ怯え、血の惨劇は幕を下ろす!」

「がぁぁぁ!」

トドメといわんばかりに攻撃を振り下ろす。

「くっ……やるわね」

「ああ、そっちこそな、普通なら終わっているんだが」

「フフ……私をそこらの雑魚と一緒にしないでくれるかしら」

「そうだな」

「そっよ……」

「――神槍「スピア・ザ・グングニル」――」

レミリアの手に紅い槍が出てくる。  
なら……、

「――魔槍「ゲイボルク」――」

俺の手に某槍兵の槍が出てくる。

お互いに接近戦で終わらせようとしていた。  
無論この槍は心臓に突き刺されても死なないようにしている。

「はあああああ！」

「うおおおおお！」

互いに槍が振るわれる。

片方は力に任せ、片方は技に任せて振るう。

「そらそらそら！」

「はあああああ！」

槍で連続の突きを繰り返す。

相手はその突きに無理やり合わせてきた。

「……もうそろそろ終わらせるかい？」

「そうね、これで終わりよ！」

どうやら考えている事は同じらしい。

レミリアは槍に今込められる最大の妖力を込めていた。

「行くわよ!」  
「来い!」

互いに相手に向かって攻撃を開始する。

「はあっ!」

レミリアは槍を投げてきた。

「喰らうか!」

その槍を回避した俺は、レミリアの懐に入り込む。

「しまった!」

「飛べ」

相手を思いつき蹴り上げる。

「くっ!」

「この一撃・・・手向けと受け取れ!」

――突き穿つ死翔の槍――  
ゲイ・ボルク

思いつきり槍を投げた。

「がはっ!」

「これで俺の勝ちだな」

「・・・ええ、私の負けよ」

「さて、霧を消してくれるか?」

「ええ、敗者は勝者に従うわ」

これで異変は解決か・・・これで文句はないだろう。

「龍斗！終わったの!？」

「霊夢？ああ、終わったよ」

「そう、これで異変は解決ね」

「ああ」

「おう！これでゆっくりできるぜ!」

「フツ、魔理沙らしいが・・・まあやる事は決まっているだろう?」

「ふう・・・そういえばそうね」

「?何の事だ?」

「宴会だよ宴会」

「・・・そうだな！ならさっそく準備しないと!」

「そういうことだ、あんたらも参加だぞ?」

「え?」

どうやら自分には関係ないと思っていたらしい・・・。

「終わったのだから皆で宴会だ、それが約束?みたいなものだからな」

「そうなの?」

「ああ、だから参加しろ、まあワインとかならあるだろう?」

「え、ええ」

「よし、なら参加確定だな」

これでまた騒がしくなりそうだ。

そう思っていた時に、予想外な事が起きた。

「ガフツ!!!」

「ねえ、一緒二遊ボウヨ・・・」

「龍斗!？」

レミリアの妹・・・フランドール・スカーレットに胸を貫かれた。

## 第8話 犠牲があるから救いがあんだよ（後書き）

後書きコーナー。

龍「吐き気がなくなっただけで大分違うな」

うん。というより多分睡眠時間じゃね？と友達に言われたのでいつもの平均3時間睡眠から5時間くらいに増やしたんだ。

龍「結果は？」

吐き気だけ消えました。

龍「なら寝不足だったのか？」

いや、3時間以上寝ると逆にしんどくなるんだよね。

龍「・・・感謝コーナー」

いきなりですか・・・ケルベルス様、Jam様、感想ありがとうございます。  
ざいます。

龍「コイツの体調を心配してくれて感謝する、まあ自業自得な気持ちじゃないが」

でも大分マシになってきた（と思いたい）ので次の更新は守れそうな気がします。

龍「次回の更新は日曜か月曜を予定している」

次回で紅魔郷編のEXを終わりにし、その次で宴会で、今回の異変は終わりにしたいです。

龍「ではな」

ではでは！

第9話 一人でも、自分の事を解ってくれている者がいるだけで人は安心でき

今回は一番何がしたいか分からない気がします・・・(汗)

次回は宴会でその次から日常です！

それでは！異変のEX編をどうぞ！！

第9話 一人でも、自分の事を解ってくれている者がいるだけで人は安心でき

レミリアの妹・・・フランドールに心臓を貫かれた。

心臓を再構築するのに少しだけ時間がかかってしまっ・・・どうやら能力で破壊されたらしいからな・・・。

駄目だ・・・意識が・・・遠のく。

(俺が代わってやるから寝てろ)

お前は・・・。

(クク、別に誰も殺したりはしねえさ、だからとっとと代われ)

ちっ・・・すぐに戻るからな・・・。

(ああ、俺はただ殺すか暴れる事ができれば満足だからな)

だから俺は出したくないんだ・・・お前を。

(じゃあな)

くっ・・・急ぐか。

そう思いながら再構築に集中した。

>???.? Side <

クク、どうやら回復に集中したらしい。

心臓なんてなくても行動できるだろうに。

さて・・・楽しむか。

「龍斗？」

「大丈夫なのか!？」

「霊夢と魔理沙だったか?が心配そうに俺・・・本体を見る。」

「一応言っておくか。」

「ああ、大丈夫だ」

「・・・誰？」

「ん？」

「お前は龍斗じゃないな・・・誰なんだぜ？」

「どうやらお見通しらしい・・・まあ誤魔化すつもりもないからさっさと終わらせるか。楽しみたいしな。」

「今は説明は省く、後でコイツに聞け、敢えて名乗るなら・・・狂だ」

「その名前が一番しっくりくる。」

「まあそんなことはどうでもいい・・・俺は暴れたいだけだ。」

「さあ!その嬢ちゃん!俺と遊ぼうぜ!」

「ウン!遊ンデクレルノ?」

「ああ、だからかかって来い!」

「ウン!行クヨ!」

「俺は大太刀・・・天狼を取り出し構える。」

「さて・・・主人格には殺すなど言われているからな・・・非殺傷設定って便利だな。」

「余所見シテテ大丈夫ナノ？」

「――禁忌「レーヴァテイン」――

うおっ！？いきなり接近戦か！

面白え！！

「ならこれでどうだ！」

「――無明神風流奥義・玄武――

蛇を模した神風を放つ。破られてもさらに玄武の甲羅を模した神風で防ぐ。

この技は防ぐだけではない。

「ナ、ナニコレ！？動ケナイ！」

この技は相手の動きを封じる効果がある。

まあ一匹だと防御にしか使えないから二匹出したんだがな。さらに、

「――無明神風流殺人剣・みずち――

地面を食い荒らしながら相手に向かっていく。

本来の簡略版だからな・・・

「効力ナイ！！」

やっぱりか・・・。

「ならこれならどうだ！」

――無明神風流奥義・朱雀――

火の鳥を模した神風を放つ。さらに強烈な剣圧で相手の動きを封じ、上空から渾身の力を込めた一撃必殺の刃を振り下ろす。

「ガアアアア！！」

「やはり気絶まで持っていけないか・・・」

力加減が難しい・・・。

「モウ壊レチャエ！！」

――禁忌「フォーオブアカインド」――

相手が4人に増えた・・・。  
順番に倒すか。

「喰ラエ！」

――禁弾「スターボウブレイク」――

相手から綺麗な弾が発射される・・・まあ全部避けているが。

「さて、これで一人目だ」

――無明神風流殺人剣・塵――

自らの剣によって生じさせた熱エネルギーで空気の温度差を生じさせ、即席の蜃気楼を生み出す。  
この業は相手の体組織を破壊する。

「ガアアアアアア！！」

「これで一人目だ」

相手の分身が消える。

これで残り三人。

「ナメルナア！！」

「禁弾「過去を刻む時計」」

まるで時計を表すようなレーザーが出てくる。

片方は時計回り、もう片方は反時計回りで対になっている。

そこまで苦勞する弾幕ではない。

「これで2人目」

「無明神風流奥義・白虎」

白き獣を模した神風を放つ。一撃目で発生したすさまじい剣風で相手を引き寄せ、強烈なカウンターとなる二発目を放つ。

「グフツ！！」

「はい、二人目終了」

残り2人。

「ウ、ウワアアアアアアア！」

「――秘弾「そして誰もいなくなるのか？」――」

青い玉が中くらいのやつと、丸いやつが向かってくる。

そうすると、何処からともなく、粒みたいな玉が現れる。

それを避けると、少し経った後、こちらに戻ってくる。

どうやらパターンみたいだな。

ならとりあえずは……。

「分身ラストを消すとするか」

――無明神風流奥義・青龍――

分身の隠れている場所に向かって、16本の「みずち」の渦を作り出し、それが竜巻となってやつを宙へ舞い上がらせ、無防備なところに強烈な一撃を加える。

「次でラストだ」

「ナ、何デ壊レナイノ？」

「さてなあ？元々壊れているからかもな」

壊れているものは壊しにくいぞ？

「壊レチャエ！！」

――QED「495年の波紋」――

波紋を表すつばい全方位粒弾が放たれる。

何処からとも無く反射されるので避けるのが面倒になってきた……

さっさと終わらせるか・・・じゃないと主人格が戻ってくるし。

「いくぞ？これでラストだ」

――無明神風流最終奥義・黄龍――

信念の極みにて「朱雀」「白虎」「玄武」「青龍」4つの神風を同時に発動したときに起こすことが出来るもう一つの神風。

その姿は四神の中央に座し、森羅万象全てを護り、破壊する力を持った最強の神龍。

この業は威力がかなりある業だ。気絶までもっていけるだろ。

「ガ、アア・・・」

「どうやらまだみたいだな」

まあ後は主人格に丸投げするが。

もう心臓は完治したみたいだからな。

じゃあ後は任せませ？

>狂 Side end<

意識を取り戻すと、目の前にはボロボロのフランドールがやりすぎだ、あいつ。

「大丈夫か？」

「え、あ、うん」

「さて、君の中の狂気がある程度消しておこう」

「出来るの？」

「ああ、出来ない事は言わない主義だ」

まあ全部は消さないんだが。

「どうして全部消さないのかしら？」

「ん？分からないか」

簡単に説明するか。

「簡単に言うと、吸血鬼には狂気が少しでもないと拙いんだ、まあだから少しだけ残す、日常には困らない程度にな」

「あ、ありがとう」

「いや、礼はいらない、俺の我俣で行動するのだから」

「それでも・・・ありがとう！」

「フッ、なら受け取っておこう、さて消すぞ？」

「うん」

フランドール・・・長いのでフランでいいか。

フランの中の狂気を一時的に俺に移す。

・・・これでよし。

「あっ・・・なくなっていく」

「・・・これで終了だ」

これで大丈夫だろう。

とりあえず疲れた・・・帰って寝たい。

「じゃあな、また宴会で」

「じゃあな！」

「またね」

こうして異変は終了した。  
次は全員での宴会である。  
無論あまり飲まないがな。

第9話 一人でも、自分の事を解ってくれている者がいるだけで人は安心でき

後書きコーナー！

龍「今回はぎりぎりか？」

たぶんね！

龍「今回は何故鬼眼の狂？」

何となく！好きだったからさ！

龍「そうか・・・」

さて！感謝コーナー！！

龍「Jam様、ケルベルス様、メガネ様、感想感謝する」

次回の更新は一応水曜か木曜を予定！！

龍「あくまで予定なので気楽に待っていてくれると嬉しい」

では！また次回！！

龍「ではな」

第10話 弱かったなら上を目指してあげればいい、強かったならさらなる上を

今回も大分遅くなりました！

今回は宴会です！まあ宴会をした事がないので大分適当臭漂います  
が。

タイトルが長いのはもはやデフォだと思ってください。

誰かこの台詞分かる人いるかな？タイトルの。

では！どうぞ！

第10話 弱かったなら上を目指してあげればいい、強かったならさらなる上を

異変が終わり、今は宴会をしている。

「お〜い！もつと酒持って来おい！」

「魔理沙・・・飲みすぎだ」

「いやいや、まだまだこんなもんじゃないんだぜ！」

「はあ〜」

魔理沙は開始早々潰れた。

どうやら紫が度の高い酒を置いたらしい。

「あらあら、私のせいにされても困りますわ、そこ.....に置いていたら勝手に飲まれたのよ」

「・・・そうか」

そう言われたら仕方ないな。

他のやつは大丈夫か？

「ふうん、こういうお酒もいいわね」

「そうですね、お嬢様」

「咲夜、あなたも飲みなさい」

「いえ、ご遠慮させてもらいます」

「あら、私の酒が飲めないのかしら？」

「・・・いただきます」

やれやれ、どうやら楽しんでいるみたいだな。

「お兄様〜!!」

「うおっ!?!」

誰かにタツクルをされた。

まあこの呼び方は一人しかいないんだがな。

「フラン・・・急にタツクルをしないでくれ、少し痛い」

「ごめんなさい・・・」

少しだけシユンとなる。

はあくそんな顔をされたらこつちが悪いみたいじゃないか。

「まあ次は気をつけてくれ、それなら大丈夫だから」

「うん!」

「それで?何か言いたい事があつたんだろ?」

「うん!一緒に酒飲もうと思つて!」

「そうか」

大分元気になつたな。

狂気のせいで閉じ込められていた時とは大違いらしいからな。よかった。

「それで?何を持ってきたんだ?」

「ワイン!」

そう言いながらワインを見せてくる。

どうやらロマネコンティらしい・・・というよりあつたんだな。

「いいのか?」

「お姉様には許可をもらったから大丈夫!」

「ならいいか」

そうだな。許可をもらってるなら大丈夫だな。  
たとえ、

「あら？ここにあったロマネコンティは？」

「さあ？分かりません」

「・・・フランね？」

「おそらく」

とか言ってるから許可貰ってないんだろ？とか思いながらも、  
すでに飲んでしまっているので共犯だったりする。  
なので全力でスルーする。

というより「飲むより語られる事の方が多い」といわれるだけあつ  
て幻想入りしたか？

いやいや、それはないな。

・・・まあいい。今は楽しもう。

「龍斗」

「ん？霊夢か」

「楽しんでる？」

「ああ、まあ今はフランとだがな」

「そう・・・」

ん？何故少しだけ不機嫌そうなんだ？

「何かしたか？俺」

「いいえ、別に（無自覚にフラグ立て過ぎよ・・・ここにいるやつ  
大半が好意持つてるじゃない！！）」

ん？理不尽な怒りをぶつけられた気がする。

そういえばあの事はもう霊夢や魔理沙には話した。

あの人格が裏の人格だという事、人格と言うよりはただの衝動の塊みたいなものだとも。

まあそんな俺でも認められたんだ・・・頑張るしかないだろ？

「どうかした？」

「いや、霊夢は優しいと思ってな」

「!？」

ん？物凄く真っ赤になつたな。

「あ、当たり前じゃない！私はいつだって優しいわよ！・・・あなたには特別だけど・・・」

「何か言つたか？」

「な、何でもないわよ！／＼／＼」

そつといいながら遠くへ行つてしまった。

「なんだつたんだ？」

「・・・お兄様つて鈍感なんだね」

「?」

「・・・（お姉様も咲夜も私も苦勞しそつだなあ、一緒に協力しようかな？）」

何故だろうか・・・フランが恐ろしい事を考えている気がしてきた。

「さあて！もつと飲めよ龍斗」

「魔理沙？完全に酔つてるな？」

「酔つてないぜ！まゝだまゝだ飲めるんだぜえ!!」

魔理沙が暴走した。

しかも俺の口に直接酒を入れやがった……。

「大丈夫？」

「あ、ああ……何とかな」

もう少し飲まされたら拙かった……。

さすがにウォッカ一気飲みはキツイ。

「どう？飲んでるかしら？」

「ああ、幽香か……珍しいな、てつきり来ないと思っていた」

「失礼ね、偶にはいいかもしれないと思ってきたんだけど……うるさいわね」

「しかたないさ、楽しみたいだろうからな」

まだまだ増えそうだな。

「そう、なら私はあっちでゆっくりしておくわ」

「ああ、余裕があれば向かおう」

「ええ、楽しみにしておくわ」

そついいながら幽香は別の場所に向かった。  
珍しいな本当に。

「……（あの人もそつっぱいなあ）」

「どうかしたか？フラン、黙り込んで」

「？ううん！何も無いよ！」

「そつか」

ならいいが。

「ほら、あなたももつと飲みなさいな」  
「む？むぐつ！？」

さらに追加で酒を突っ込まれた。  
拙い・・・もつふらふらする。

「あら？やはり吸血鬼にはきつかったかしら」  
「な、何を・・・飲ませた」

「？ただの吸血鬼殺しよ？」

「何だ・・・そのピンポイントなのは」

「大丈夫よ、ただ酔い潰れるだけ、明日には治っているでしょ？」  
「うっ・・・」

くそ・・・さすがに飲みすぎたか・・・意識が・・・。  
その後の事は覚えていない。

>フラン Side <

お兄様の様子が変わった。

何というか・・・こっ・・・保護欲が出てくるような感じ。

「うっ・・・」

「大丈夫？お兄様」

「う、うん」

。大丈夫なのかな？すごく子供っぽくなって気がするんだけど・・・

「どっやら酔い潰れたようね」

「・・・どうして?」

「何がかしら?」

「どうして酔い潰す必要があるの?」

「本心とか聞きたいじゃない」

この人もライバル・・・お兄様は本当にモテルねえ。

「どうかしたの?」

「う、ううん、大丈夫だよ、お兄様」

「あらあら、まるで兄妹ね（今は龍斗の方が弟みたいに見えない）  
ともないけど）」

「姉妹?」

「いや、兄妹と言っただけど・・・」

お兄様が弟?

だって今のお兄様は年上には見えないもの。

「どうかしたの? フランお姉ちゃん」（首傾げ）

「!?!?」

か、可愛い!?!?

何故か小さくなってるから尚更!

「あら」

「あゝ!?! フランのやつ! 龍斗に抱きついてやがるぜ!?!」

「魔理沙・・・潰すわよ、手伝いなさい」

「お、おう」

あつちで巫女と白黒が騒いでるけど知らない!

今は・・・、

「可愛い〜!!」

「うわぁ!?!」

ぎゅーっと抱きしめる。

可愛すぎだよ〜!

「あらあら、霊夢が大変な事になってるわね・・・」

「お、落ち着けて霊夢!」

「落ち着いてるわよ?だから離シナサイ」

「あゝ、あの巫女なら戦い甲斐がありそうね」

「ちよっ!?!?ややこしくするな!」

「フフフ・・・ソウネ、魔理沙・・・早く離シナサイ」

「あゝ!酔いが醒めたぜ!くそっ!紫!何とかしてくれ!」

「仕方ないわね・・・少し反省してなさい」

「って!私もかよおおおおおおお!」

あつ、白黒がスキマに落ちていった。

まあいいよね!今はお兄様を愛でるだけ!

「フラン、私も混ぜなさい」

「ええ」

「・・・いい度胸ね、咲夜、龍斗をこっちに」

「はい、申し訳ありません、妹様」

「ああ!!卑怯だよ!お姉様!」

咲夜に時を止めてお兄様を運ばせるなんて!

「世の中勝った方が正しいのよ」

「むう〜、なら取り返すもん!」

「あら、姉に勝てるだけでも？」

「勝つもん！そしてお兄様を取り戻す！！」

こうして久々？の姉妹喧嘩が始まった。

お兄様のおかげでこんな風に楽しめるのだから感謝だね。

>フラン Side end<

次の日。

「くう・・・頭が割れるように痛い」

『圧倒的に飲みすぎましたからね』

「あれから何があったんだ？」

『特になかったですよ（マスターの可愛い姿は永久に保存です！）』

「そうか」

それよりも・・・何故周りはこんなにカオスなんだ？

『それはマスターのせいでもありませんけどね』

「何か言ったか？」

『いいえ』

それよりも片付けだな。

そう思い方付けを開始した。

実は前日の出来事が新聞になっているのは気づきもなかった。

まあ後で某幻想郷最速とO H A N A S H Iを高町式で行ったのは余談。

第10話 弱かったなら上を目指してあげればいい、強かったならさらなる上を

後書きコーナー!!

龍「遅い」

テストだからね。

龍「？」

学校でさ、今テスト中なんだよね。  
しかも3科目落とせば即アウト。

龍「・・・」

まあ1〜5まで選んで答えるやつだからまだマシだけども。

龍「そうか」

なので次やテンプレな転生も遅くなるかもです。  
申し訳ない。

龍「さて、感謝コーナーだ」

メガネ様、ケルベルス様、感想ありがとうございます!!

龍「今回は早ければ水曜、遅ければ土曜になる、すまないな」

でもその分頑張りますのでゆっくり待っててくださいね!!

龍「まあ待つててくれる人がいるかどうかだな」

「言わないで！挫けそうになるから！」

龍「ならないだろう？」

俺のハートはガラスだよ！？

龍「ふん、どうせ防弾ガラスだろ」

「違うからね！？」

龍「まあどうでもいい、ではな、次回で会おう」

ひでえ・・・では！

第11話 世のためだろうが何だろうが、それで誰かを泣かせてりゃ世話ねえぞ

今回から少しの間日常編です！

今回も遅くなりすいません！

今回も駄文ですが、楽しんでもらえたら幸いです。

第11話 世のためだろうが何だろうが、それで誰かを泣かせてりゃ世話ねえぞ

異変が解決し、宴会も終え、ようやく落ち着いた今日この頃・・・  
ようやく落ち着いたので今日はのんびりしようと思ひ、横になろう  
とすると、

「お兄様〜!!」

「ガフツ！」

いきなりフランにタックルを決められた。

普通の人間なら即死なんだが・・・。

まあそれはいいとして、よくはないが、

「何か用か？」

「遊ば！」

ああ〜弾幕ごっこか。

暇だからいいか。

「いいぞ」

「やった！じゃあ始めよう！！」

「ああ」

フランとの弾幕ごっこをその後、3時間にかけて行った。

「楽しかった〜」

「そうか」

さすがに狂気がないと考えて行動してくるから厄介だな。

「さて、弾幕ごっこが終わったことだし寝るか」「寝るな！」  
「ガフツ！」

いきなりとび蹴りをかますな、霊夢。

「あんた達が暴れた所為で神社がこんなにボロボロじゃない！元に戻しなさい！」

あゝ確かにそうだな。

よし、

「分かった、まあすぐに終わらせる」

そう言いながら大嘘憑オウルフィクションきでなかったことにする。

「え？」

「ほら、終わったぞ」

「・・・便利ね」

確かにな。

「お兄様！」

「どうかしたか？」

フランが呼んできたので返事をする。

「お姉様が呼んでるから来て！」

どうやらレミリアが呼んでいるらしい。

「分かった、霊夢、出かけてくる」

「ええ、帰ってきなさいよ」

「勿論だ」

さて、向かうか紅魔館。

さっそくフランと一緒に向かった。

「で？門番は仕事を何故していない」

「い、いえ！決して寝てた訳では！」

到着すると門番・・・美鈴が寝ていた。

咲夜に怒られるぞ？

「へえ・・・寝てたの」

「え！？」

サクッ

「お待ちしておりました、お嬢様がお待ちしております」

「そ、そうか」

美鈴はスルーか。

「お姉様は部屋にいるの？」

「はい」

「なら先に行ってるね！」

「ああ」

何か用でもあるのだろうか。

「（お姉様も多分お兄様の事が好きだろうし・・・協力してでも頑張らないと！）」

何故だろうか・・・嫌な予感しかない。

「では向かいましょう」

「あ、後で図書館に向かっているか？」

「はい、後でパチユリー様にも言っておきます」

「ああ、ありがとう」

「い、いえ」

何故赤くなるんだろうか・・・まさか病気になっているのか？

『（救いようがないですね・・・マスターは）』

何故か馬鹿にされた気がする。

「着きましたよ」

「ああ、入っているのか？」

「はい、お嬢様には伝えていきますので」

「そうか」

「では、お茶を入れてきますので」

「ああ」

そっぴいながら歩いていった。

まあ時を止めても俺は動けるからな。

「レミリア、入っているか？」

「ええ、いいわよ」

許可を得たので入ることに。

「用とはなんだ？」

「ええ、龍斗、ここで働くつもりはないかしら？」

「何故？」

「理由は簡単よ、1つはあなたが気に入ったから、もう1つは咲夜の負担を軽減するため」

「なるほど」

どうやらレミリアはきちんと考えているらしい。

「それは神社からでもいいか？」

「ええ、別に構わないわ（本当は住みこみで働いて欲しかったけど・  
・仕方ないわね）」

「なら受けよう、何をすればいい」

「基本は咲夜の手伝いやフランの執事よ、勿論私の執事もしてもら  
うわ」

いきなりハードな気がする。

まあ可能か不可能かを問われたら可能と答えるがな。

「それはいつからだ？」

「なるべく早い方がいいわね」

「なら来週からでいいか？週4日で」

「ええ、それで構わないわ」

「なら決定だ、で？用件はそれだけか？」

「む、会いたいと思うだけじゃ駄目かしら」

「？物好きだなレミリアも」

「そうしたのは貴方よ？」

どういう意味だ？

「・・・はあくやっぱり鈍感ね、それ自体罪じゃないかしら」

何だ？それは・・・意味が分からない。

「お兄様〜！！」

「うお！？ど、どうした？」

「お兄様の能力ってどんななの？」

能力？

「うん、お兄様の能力ってどんなのかなあって思って  
「確かに」

そつえばどうなるんだろうな。

「呼ばれれば即参上！ゆかりんよ！」

「呼んでないんだが」

いきなりスキマから紫が現れた。

確実に待機していたな？

「龍斗の能力は二つ」

「二つもあるの！？」

一つは想像つくが・・・。

というより何故こんな事に？話に脈略がない気がするぞ？

「そんな事はどうでもいいわ、能力を言っ頂戴」  
「むう・・・いいわ、1つは『空想を具現化する程度の能力』でも  
う一つは『ありとあらゆるものを使いこなせる程度の能力』よ」  
なんじゃそりゃ。

「チートくさくないかしら？」  
「確かにね、でもこうだから仕方ないじゃない」

でも定義が中途半端すぎる・・・せめて武器はとか細かい設定がな  
いとわかり辛いだろっが。

「じゃあね、龍斗もマヨヒガに来なさいよ？」  
「ああ、気が向いたらな」  
「ふふ、楽しみにしておくわ」

そっいいながら紫は戻っていった。

「さて、もうそろそろ図書館に向かうよ」  
「そう？なら私もついていくわ」  
「私も」  
「フツ、別に構わない、じゃあ行くか」  
「うん！（ええ）」

こうして図書館に向かった。

「で、こんなに賑やかなのね」  
「ああ、すまないな・・・また魔理沙に本を貸してたのか？」  
「ええ、あの子すぐに読んでるからすぐに取りに来るのよ、まあき

ちんと返してくれてるからいいのだけねど」  
「ならよかった」

どうやら魔理沙は約束を守っているらしい。

「パチュリー、何か手伝える事はないか？」

「ならその本を持っていってくれるかしら？」

「ああ、別にいいぞ」

「何処に仕舞えばいいかはその子が教えてくれるわ」

「小悪魔といいますが、よろしくお願いします」

「ああ、龍斗だ」

「存じてますよ、パチュリー様からよくお聞きしますから」

「こ、こあつ！／＼／＼」

「？」

何で赤くなるんだろうか？

『・・・駄目ですね、救われなさすぎです』

クロスのも酷い言われようだ。

「では運びましょうか」

「ああ」

本が目の前に50冊ほどある。

どんだけ出したままにしておいたんだろうか。

本の内容も、

『誰でも出来る黒魔術ーこれで好きな相手もイチコロ編ー』とか、

『？でも出来る簡易魔術』とか他にも色々あるな。

「カオスだな、本の種類が」

「ええ、でも楽しそうに読むのでつい」

「確かに、楽しそうなのは止め辛いからな」

「ええ」

そう喋りながらも作業は続けていく。

どうやら多く見えた本も二人でやるからかすぐに終わった。

途中写真が見えた気がしたが、パチユリーに全力で妨害された。

何の写真だったのだろうか。

「（言えない！龍斗の写真なんて・・・色々際どいものまで集めたのに！主に鴉天狗のおかげだけねど）」

何故だろうか・・・鴉天狗と肉体言語で話しをしなければならぬ気がしてきた。

「!?!」（ブルツ

何処かで某鴉天狗が身震いをした。

さて、

「終わったが・・・どうする？」

「今日はもう戻っても構わないわ、どうせ来週から忙しくなるのだからね」

「そうか」

なるべく優しくしてほしかったんだが・・・しかたないか。

「優しくしてくれよ?」

「!?!?!?!」

「パチュリー!？」

どうして倒れたんだ？

「ふっ……私の生涯に一片の悔いなし！」

パチュリー……何故知っている？

「きよ、今日は早く戻りなさい、パチエがこんなし……襲われかねないわよ？」

「あ、ああ、ではな、今日はもう戻る」

今日はもう戻る事にした。

パチュリーが怖いからな。

こうして一日は終わった。

霊夢に紅魔館で仕事をするというと、絶望したような顔をしたが、神社から通うと言うと、かなり安心していた。

何故だ？

第11話 世のためだろうが何だろうが、それで誰かを泣かせてりゃ世話ねえぞ

後書きコーナー!!

龍「死ね」

ぎゃあああああああ!!

龍「遅すぎるだろうが」

す、すみません。

龍「理由は？」

テストの結果が酷くて……。

龍「……仕方ない」

で、では、感謝コーナー!

龍「八雲 葵様、Jam様、メガネ様、ケルベルス様、感想感謝する」

というより誰が誰か理解できるように書けているんだろうか。

龍「無理だな(・x・)」

ちよっ!?

龍「後コイツが旧作のキャラを2キャラまで出そうとしている、よってアンケートだ、誰がいいか答えてくれ」

期限は次回更新まで！

龍「答えてくれるといいな」

デスヨネー。

龍「次回の更新は一応水曜か木曜予定だ」

ルーミアのEX化はもしかしたらオリジナルの異変で出るかもです。

龍「ではな」

では！また次回！

第12話 いいかい！ もっとも『むずかしい事』は！ 『自分を乗り越える事』

今回は能力の確認のため、東方成分が低め・・・寧ろ皆無と  
いって  
もいいかもしれません。

何で書いたんだろ？

第12話 いいかい！ もっとも『むずかしい事』は！ 『自分を乗り越える事』

能力が判明してから数日。

今日は特にする事も無く、暇なので、能力の確認でもしようかと思  
った。

まあ『空想を具現化する程度の能力』は分かっているから大丈夫だ  
が、『ありとあらゆるものを使いこなせる程度の能力』は基準が分  
からないからな。

武器は使えるんだろうか。

「色々試してみるか」

『どうするんですか？』

「何、能力の確認をな」

『そうですか』

そういえば……

「空想のほうは何処まで出来るんだろうか」

『試してみては？』

「それもそうだな」

という訳で、結界を張り、確かめてみる事に。

「人は呼べるんだろうか」

呼べるのならなのは達を呼べるんだが。

『関わりが深くなければ可能みたいですね』

「そうか……」

なら呼べないな。

呼べるのが誰か確かめてみるか？

「まずは・・・七夜だな」

『ぎりぎり呼べますね』

「次は・・・セイバーとギルガメッシュ」

『何故？』

「何となくだ」

『他には？』

「そうだな・・・バルバトスで」

『え!?!』

これくらいでいいか。

「よお、あんたは無事だったみたいだな」

「ああ、お前も元気そうだな」

「ああ、殺せたのは脳髄共だけだぜ？まったく、参ったねどうも」

「クク、なら殺し合おうぜ？」

「へえ？アンタからその言葉が聞けるとはな・・・いいぜ、楽しみにしておくとしよう」

さて、これで七夜は大丈夫だな。

「ここは・・・はっ、何故此处にあなたがいるのです!」

「ふむ・・・何故かはわからんが・・・雑種、理由を知っているならば答えよ」

「俺が呼んだ、以上」

「何？貴様のような雑種が我を呼んだだと？笑わせる・・・貴様ごときが我を呼び寄せるとはな」

「事実だから仕方ないだろ？」

「私達にどうしろと？」

「何、闘ってくれただけでいい、俺はまだまだ弱いからな・・・強くないといけないんだ」

「そうですね・・・いいでしょう、相手になります」

「ふん、雑種に我の力を見せるのもまた一興か、よかるう、感謝するがいい、雑種」

「ああ、感謝する」

さて・・・後はバルバトスなんだが。

「なあクロス」

『なんでしょうか』

「俺の気のせいじゃなければバルバトスが金色に光ってる気がするんだが？」

『ハハ、安心してくださいマスター、気のせいではありません』

「・・・面倒だな、オイ」

「ぶるうううああああああああああ！！」

うおっ！？でかい声だな。

というより・・・確実に俺が即死耐性あるからだよね？コレ。

さっさと離れよう。

さて、

「七夜、相手願う」

「いいぜ、お互いに燃え尽きようぜ！」

最初に七夜と戦う。

「そらっ！」

――閃走・六兔――

相手から蹴り上げが飛んでくるが回避する。

「まだまだ！」

――閃鞘・七夜――

消えたと思わせるスピードで上に移動し、斬りつけてくる。

「無駄だ」

――閃鞘・八穿――

スピードを上げ、一太刀入れる。

「クク、喰らうかよ！」

――閃走・水月――

移動用の技によって避けられてしまう。

「なら・・・捌く！」

――閃鞘・一風――

相手を掴みにかかる。

「ちっ！斬刑に処す！」

――閃鞘・八点衝――

相手からは八回の斬撃が放たれる。

「ハハッ！楽しすぎだぜアンタ！」

「そりゃどうもっ！」

――閃鞘・八点衝――

――閃鞘・八点衝――

互いの八回の斬撃が相殺し合う。

「クク、もつとだ、もつと楽しもっぜ！」

「ああ、そうだなっ！」

――閃走・六兎――

――閃走・六兎――

互いに蹴り穿つ。

「どうした！まだまだアンタは本気じゃないだろう！本気で来いよ

！」

「勿論だ」

――閃鞘・迷獄沙門――

七夜の動きがスローに見える・・・だが、

「こっちも負ける訳にはいかないんでね！」

――閃鞘・迷獄沙門＋極死・七夜――

お互いに交差し、斬り合う。

だが、七夜より俺は後ろにいて、すでにナイフを投げる体勢に入っている。

「くっ！」

「極死……七夜！」

ゴキッ！

相手の首の骨が折れる音がした。

「クク、やはり勝てないか……けどやっぱり楽しすぎだつてアンタ・

・紅赤朱と同じ……いや、それ以上だ、また殺し合いたいね」

「……偶になら呼ぶさ」

「クク、そうか、なら次まで寝ておくとするか、じゃあな」

「ああ」

これで七夜との戦いは終わった……次は、

「ようやく私達の出番ですか」

「待ちくたびれたぞ、雑種」

「すまないな、さて、始めるとしよう」

「大丈夫なのですか？」

「ああ、大丈夫だ」

「では、始めましょう」

セイバー……アルトリアとギルガメッシュとの戦いが始まった。

「ゆくぞ？上手くかわせよ？」  
「行きます！ハアツ！！」

セイバーは剣で、ギルガメッシュゲート・オブ・バビロンは王の財宝から宝具を飛ばし、攻撃してくる。  
ならば、

「連続投影……」

空中に投影魔術によって複製された宝具を待機させる。

「なっ！？あれはシロウの！？」

「贋作……贋作者め」

「一斉掃射！」

ゲート・オブ・バビロン  
王の財宝はこれで何とかなるかな？

「いいだろう、ならば見せてやろう……起きよ、エア」

ちっ！乖離剣エアか！

「ならば私も全力で行きます！」

そう言いながらセイバーは風王結界を解除した。  
インビジブル・エア  
エクスカリバー  
約束された勝利の剣はなんとかなるが……  
エヌマ・エリシュ  
天地乖離す開闢の星は  
面倒だ。

仕方ない。

アンサラー  
「後より出て先に断つ者」

エヌマ・エリシュ  
「天地乖離す開闢の星！！」

「斬り決る戦神の剣!!」  
フラガラク

斬り決る戦神の剣によって、相手の攻撃はキャンセルされ、心臓に攻撃がヒットする。

さすが因果を歪める事が可能な宝具だ。

これでギルガメッシュは大丈夫かな？

後は……、

「やりますね……ですが」

「ああ、こつちも負ける気はないんでね」

「では……行きます!」

「来い!」

相手はもう準備が完全にできている……ならこつちは、

「これで行くかうか」

「はあああああ!!」エクスカリバー 約束された勝利の剣!!」

「エクスカリバー・ガラティーン 転輪する勝利の剣!」

互いに持てる全ての魔力を込め、放つ。

エクスカリバー 約束された勝利の剣が星の光で両断するなら、エクスカリバー・ガラティーン 転輪する勝利の剣は

太陽の灼熱で燃やし尽くす攻撃だ。

「はあああああああ!!」

「負ける……ものかあ!!」

「なっ!?!」

セイバーをエクスカリバー・ガラティーン 転輪する勝利の剣の攻撃が飲み込む。

よし。

「俺の勝ちだ！」

「ええ、私の・・・負けです、またお相手願えますか？」

「ああ、勿論、こつちからお願ひするよ」

「では・・・また会いましょう」

そついいながらセイバーは消えた。

そついえばギルガメツシユは気がついたら消えてたな。

次はうまい酒が飲めるといいが。

さて・・・後は、

「なあ」

『何でしょうか？』

「逃げていい？」

『駄目ですよ？戦つてください』

「・・・呼んだ俺が言うのもなんだが・・・面倒だ」

『なら呼ばないでくださいよ！？幻想郷が消えちゃいます！』

「確かに・・・」

なら頑張りますか。

まあ・・・金色に光っているバルバトスとか普通は無理ゲーだけだな。

「ぶるうつうつああああああああ！！」

「うるさい」

「俺の本能がア叫ぶのさああああ貴様を殺せえええとおおお！！」

「発音がおかしく・・・気のせいかな？」

「余裕うつつかましてんじやああああねえええ！！」

――ヘルヒート――

紫色の炎を大量に飛ばしてくる。  
追尾してくるため、迎撃するしかない。

「霧符「ミスト・ボディ」」

体を霧に変えて、迎撃にでる。

「術なんぞ使ってんじゃねえ!!」

「グランバニッシュ」

ええ〜お前が言うなよ・・・。

地面が割れ、大量に襲ってくるのを避ける。  
避けていると、ポケットから、

「ゲツ、グミが落ちた」

ガシッ!

えっ?

「アイテムなんぞ使ってんじゃねえ!!」

ちよっ!?使ってない・・・落とすただけだろ!?

思いつきり掴まれ、叩きつけられ、斧で切り裂かれた。

「分身「空蝉」」

スペルカードで何とか避ける。

あぶないあぶない。

というより鋼体が9999は反則だと思っただが？

というより・・・何故こうなった。

俺は普通のバルバトスと呼んだつもりなんだが・・・。

『バルバトスに普通も何もありませんよ』

「それもそうだな」

さて、余裕がなくなってきたな・・・早く終わらせたい。

「俺の背後に立つんじゃねえ!!」

「バック・スナイパー」

げっ、いつの間にか後ろにまわってたな。

「ちい!!」

「必然「キングクリムゾン」」

相手の攻撃を避けるため+反撃のために放つ。

「ぶるうっああああああ!!」

「うるさい」

「煉獄「アマテラス」」

相手を燃やし尽くすかのような弾幕を放つ。

「追加」

「――魔神「死狂い」――」

相手に即死攻撃を大量に浴びせる。

「ぶるうつうつあああああああああああ――！」

「――ジエノサイドブレイバー――」

やはりマダ無理か。

相手の圧倒的なレーザーを避けながら考える。  
なら、

「これならどうだ？」

「――絶望「鮮血の結末」――」

「ぐうづづづづづ――！」

どうやらさらに即死属性がある、このスペルには耐え辛いらしい。

「貴様に朝日は拝ませねえ――！」

「――ポイズニックヴォイド――」

地面に魔法陣が現れ、何かが出てくる。

どうやら毒もあるらしい。

まあ避けたがな。



そう言いながら、直して行く。

「ふう……終わったな」

『はい、もう勘弁ですね、金色のバルバトスは』  
「確かにな……疲れた」

結界を解く。

「龍斗？何でそんなにポロポロなのかしら？」

「少し修行してた……疲れたから寝ていいか？明日は俺が当番するから……」

「え、ええ、いいわよ」

よかった。

もう……限界。

「きゃっ！？りゅ、龍斗！？／＼／＼」

「ZZZZ……」

「……はあく、まったく……寝るなら布団で寝なさいよ」

霊夢の声が遠くに聞こえる……相当疲れが溜まってたみたいだ。  
うん……ゆっくり休もう。

「あつ、コイツ……寝顔はこんなに可愛いのに……なんでいつもは凜々しいのかしら？」

おやすみ……なさい……。

そして意識を飛ばした。

第12話 いいかい！ もっとも『むずかしい事』は！ 『自分を乗り越える事』

後書きコーナー！！

龍「今回はかなりカオス？だったな」

何故かバルバトスにしちゃったんですよね。

龍「迷惑なだけだな」

ハハハ、すいません。

龍「そして遅くなった理由は？」

少し微熱がでまして。

まあ37.1度程度だったので様子見してたら治りましたが。

龍「そうか、なら大丈夫なんだな？」

ええ、なのでネギまの方は早ければ今日、遅くても明日には投稿できるように今から書きます。

龍「間に合うといいな」

ええ。さて、感謝コーナーです。

龍「メガネ様、感想ありがとう」

感想が減ってきて少し自信が減った今日この頃。

龍「元々なかつただろうが」

まあ感想がなくなっても最後までやりぬきますが。

龍「それでいい」

次回は・・・おそらく来週中になるでしょう。

龍「毎回遅くなってますまないな」

次回も頑張りますので、見てくれると嬉しいです。  
見捨てられないように頑張ります。

龍「ではな、次回で会おう」

ではでは！

第13話 やねばできるなんて、聞こえのいい言葉に酔っついてはいけませんよ

今回は永遠亭に向かいました！

理由は本編で！

まあ伏線みたいなものはいくらか置いといたのですが・・・気づき

辛いですしね！

それではどうぞー！

第13話 やればできるなんて、聞こえのいい言葉に酔っていてはいけませんよ

バイト？が決まって数日。

今日は霊夢達もどこかへ出かけたので、俺も出かけることに。

まあ出かけるのも限られてるがな。

少なくとも今は向日葵畑にはいかない。

面倒だから。

だから今は……、

「迷いの竹林も面倒だった……」

『当たり前ですよ、迷うのですから』

「油断した……というか嘗めてた、前は簡単にいけたのになあ」

『あれは相手が気づいて迎えが来たからでしょうに』

「それもそうか」

妹紅とも会ったが、やっぱり話しやすいな。

話が弾んだ。その横の慧音は怖かったが。

うん。何故あんな顔をするか……分からない。

しかもその視線の殆どは妹紅に向けてだし。

「さて……もうそろそろ着きそうなんだが……」

『そうですね』

「おや？また落とし穴……因幡が仕掛けて優曇華が引っかかったな？」

『分かりやすい構図ですね』

「まったくだ」

「ちよっ！？分かってるなら助けてくださいよ！？」

「だが断る」

「ちよつ！？酷いですよ！」

「まあ冗談だ」

「冗談に聞こえないですって！」

そう言いあいながら落とし穴から優曇華を出す。

「まったく、てめのやつ・・・後で覚えておきなさいよ・・・」

「引つかかる方も引つかかる方だがな」

「うっ！」

まあ仕方ないか・・・よくも悪くも素直なんだし。

「さて、迷ったから連れて行ってくれ」

「ええ！？べ、別にいいですけど・・・前回は迷ってませんでしたよね？」

「・・・前回は前回だ」

誰でも迷うときは迷うんだ・・・。

「はは・・・いいですよ、ついて来て下さい」

「了解した、すまないな」

「い、いえいえ！師匠からも言われていますから！」

「永琳から？」

「はい、龍斗さんはきつと道に迷ってるだろうからここまで案内しなさい、と」

「そうか」

絶対態と俺が迷うようにしてるな・・・。

「龍斗さん？」

「どうかしたか？」

「いえ、もう着きましたよ？」

「そうか」

どうやら考え事をしている間に着いたらしい。

「師匠、龍斗さんを連れてきました〜！」

「そう、お疲れ様、龍斗は私が案内するからそっちは任せるわ」

「了解です！」

そう言いながら優曇華はどこかへ行った。

「何か用かしら？」

「ああ、一応薬を貰おうと思ってな」

「あなたには必要ない・・・ああ、そういう事」

「理解が早くて助かる」

「いいわ、少し待っててもらえるかしら？今から調合してくるわ」

「感謝する」

「いいわよ、その代わり姫様の相手をお願いするわ」

「・・・了解した」

どうせゲームだろうからな。

なるべく格ゲーがいいな。

「じゃあさっそくやるわよ〜！」

「・・・ああ」

輝夜がきたのでさっそくゲームを始める事に。

最初は、

「私はこのキャラで行くわ！」

「なら俺はコレだ」

「ちよっ！？ト○なんて卑怯よ！開幕小パンで終わるじゃない！」

「そんな輝夜はラ○ウか、なるほど・・・剛VS柔だな」

「・・・まだよ、まだ終わりと決まった訳じゃないわ！まだ諦めない！」

「せめて痛みを知らず死ぬがいい」

「ちよっww」

デデデデザタイムオブレトビューションバトワンデッサイダステニー

ナギツペシペシナギツペシペシハアーンナギツハアーンテンシヨ  
ヒヤクレツナギツカクゴオナギツナギツナギツ

フウハアナギツゲキリユウニゲキリユウニミヲマカセドウカナギツ  
カクゴーハアーンテンシヨウヒヤクレツケンナギツハアアアアキ  
ンホクトウジヨウダンジンケンK・O・

「命は投げ捨てるもの」

「・・・orz」

バトトウーデッサイダステニー セツカツコーハアアアアキ  
ーン テーレツテーホクトウジヨーハガンケンハアーン

F A T A L K ・ O ・ セメテイタミヲシラズニヤスラカニシヌガ  
ヨイ ウイーントキイ

「ふっ」

「っ、次はト○禁止よ！」

「了解した」

「私はもう一度ラ○ウよ！」

「なら俺はジ○ギだな」

「ふっ！勝ったわね！」  
「甘い」

しばらくすると、

「星が溜まった！今よ！」

テンニメツセイ！

「甘い」

ヤ、ヤメテクレー

「な、何ですって！？どうして一撃必殺が避けれるのよ！」  
「さてね、まあこれで終わりだ」

ミニククヤキタダレローFATAL K.O.

「orz」

「まだまだ甘いな、半人前の技では俺は倒せん」

「な、なら別のゲームよ！」

「いいぞ、次はどうする」

「次はメ〇ブラよ！」

「了解」

「私はこれね！」

「秋〇か、なら俺は七〇かな」

「くっ、クレセントムーン・・・なら私はハーフムーンよ！」

ROUND 1 ファイト

「いけ！そこよ！」

「甘い、遅すぎるんだよ！」

「今よ！」

「さて、終わらせるか」

「これが当たれば私の勝ち！」

「当たればな」

極死・・・七夜！

ラストアークフィニッシュ

やれやれ、まいったねどうも

「これで俺の勝ち」

「も、もう一回よ！」

「了解した」

「今回はランダムで選びましょう、それならフェアでしょ？」

「そうだな」 運A+

「さあランダムよ！」

そして互いのキャラが決まる。

「ふうん、白レ○ね、少しキツイかしら（まああつちはきつともつと酷いキャラが・・・!?）」

「ふむ、バグバージョンの姫ア○クか」

本来はイクリップスしかないのがクレセントになったやつだ。

「コイツ・・・運もバグだったの!?で、でも使い慣れていないはず！なら・・・勝てる！」

結果。

「ま、負けた・・・完膚なきまでに!」

「ま、楽しかったんじゃないの?」

「くう!つ、次は負けないわよ!」

「また今度な」

こうして輝夜との遊びは終了。

永琳から薬を貰いに向かった。

「お疲れ様、悲鳴がすごかったのだけれど・・・何をしていたのかしら?」

「ゲームだよ、格闘ゲーム」

「なるほどね、ああ、これが薬よ、あまり使いすぎないでね?」

「ああ、分かっている、金はこれで足りるか?」

「え、ええ、ところで・・・何故これを?」

「分かっているのではなかったのか?」

「分かっているても答え合わせくらいはしたいと思うものよ」

「そういうものか」

「そうよ、で?」

「・・・はあ」

どうやら言うしかないようだ。

まあたいした理由ではないから大丈夫か。

「最近自分の中に狂気が増えたんだ、それも2倍や3倍なんかじゃない」

「どれくらいかしら?」

「30倍だ」

「・・・それで？」

「抑え辛くなつてきてな、だから今回は薬を頼んだんだ」

「そう、だから狂気をかなり押さえ込む薬を要求したのね？」

「そうだ、押さえ込むつもりではいるが・・・耐え切れなければ大変な事になるからな」

「保険をかけたわけね」

「そういうことだ」

元々狂気は人一倍たまりやすかったからな。

元々狂つてたんだろうさ。

さて、

「今日はもうそろそろ帰るとしよう」

「あら、もう帰るのかしら」

「ああ、今日は俺が当番だからな、料理の」

「そう、次は？」

「次はおそらく薬が切れたとき、もしくは異変が起きた時かな」

「そう、また会いましょう、うどんげ！送ってあげて」

「了解です！龍斗さん、こっちはです」

「ではな、また会おう」

「ええ」

こうして俺は永遠亭から神社に戻った。

霊夢や魔理沙には心配されたが、少し寝れば大丈夫だと伝えた。

『（まあ狂気が原因なのですからあなたがち間違いではありませんが）

』

「まあ少しは楽になるだろうさ」

そう言いながら俺は薬を飲み、布団に入った。

夕食は霊夢と魔理沙と一緒に食べたが、好評だった。素直に嬉しかった。

そう思いながら寝た。

薬の副作用を聞くのを忘れていたのを思い出したのはそれから数分してからである。

第13話 やればできるなんて、聞こえのいい言葉に酔っついてはいけませんよ

後書きコーナー!!

龍「遅い」

すみませんでした!!

龍「さて、さつさと感謝コーナーをしる」

イエッサー! ユタ様、雨季様、メガネ様、ケルベルス様、感想あり  
がとうございます!!

龍「次回は遅くなるかもしれない」

いところに会いに行くんですよね、もう少ししたら。

龍「だから遅れるかもしれん、もし叔父から借りれたら更新できる」

次回は薬の副作用による番外のような本編です!  
お楽しみに?

龍「・・・北斗有情破顔拳」

ひでぶっ!

龍「ではな」

第14話 死にそう？なんのことはねえ、だったららてめえ……生きてんじや

最近戯言シリーズを読み始めました。

いいですよね、戯言シリーズ。

今回は番外のような本編です。

次から異変編に入りたいと思います。

第14話 死にそう？なんのことはねえ、だつたらためえ・・・生きてんじや

朝起きたら女になっていた。

いきなり何を言ってるのかと思うだろうが俺も何を言っているかわからねエ・・・超スピードだとか超能力だとかそんなチャチなものじゃ断じてねえ・・・もつと恐ろしいモノの片鱗を味わったぜ・・・。

「さて、現実逃避はここまでだ、なぜ女になっているんだ・・・」

『おそらく永琳さんの薬の副作用ですね、そう書いてありますし』

「な・・・に？書いてあるだと？」

『はい、これに』

「どれどれ・・・」

<この薬を飲むと性別が反対になります・・・気をつけてね >

154

この文字は大きさが2mmだった・・・見つけれるか！

しかも って何だ！ って！バカにしてんだろ！

間違いなく喧嘩を売ってるな？よし、ならその喧嘩買った！

『お、落ち着いて下さい！相手の思う壺ですよ！？』

「それもそうか・・・ならどうするか」

『とりあえず永遠亭に向かうのはいいと思います、その後の行動ですな』

まったく・・・ややこしい薬をよこしたものだ。

「うるさいわね〜どうかしたのか・・・し・・・ら？」

「むっ」

霊夢がやってきた。

まあ今の俺の姿を見れば戸惑うのは仕方ないか。

「もう起きたのか霊夢」

「な、なんで女になつてんのよ、理由をいいなさい」

「理由も何も・・・薬の副作用だ」

「誰が作ったのよ・・・」

「永琳」

「ああ、納得」

これだけで納得されるとは・・・。

ついでに言うと霊夢は永琳とは面識があるぞ？

少し前についてきたからな。

「どうするか・・・永琳のことだから戻らないってことはないだろうが・・・」

「どうするもこうするもないでしょ、今すぐ行くわよ、とっちめてやらないと（龍斗が女になったら不便じゃない、色々と）」

まあ霊夢のいう事には一理あるな。

とっちめないとな・・・ククク。

薬の入っていた袋から紙が出てきた。

どうやら説明書らしい。

「この薬を飲むと性別が反転します、そのため、もう一つの薬と一緒に服用下さい、なお、もし反転してしまった場合・・・戻るのは1日かかります、だと？」

薬は一種類しか入ってないんだが？

確実に面白半分でやったな？

これはO H A N A S H Iが必要だな。

というより紙が見つかり辛い場所に入ってる時点で確信犯だろ。  
言い逃れはできまい。

まあ犯人は永琳かてゐだろうがな。

6：4くらいの比率で。

「さて・・・行くぞ霊夢、来るならついて来い」

「ええ」

そして俺達は永遠亭に向かった。

早く元に戻るために。

まあ着物が落ち着かないのもあるがな。

さて・・・到着したが・・・永琳かてゐはいるのだろうか。

「いなけりや待つだけよ」

「それもそうか」

「あ、あの・・・」

「どうかしたか？優曇華」

「師匠とてゐならいますよ？呼びましょうか？」

「そうか、なら頼む」

「はい、待つて下さい・・・師匠、龍斗さんが来ました！」

「そ、そう、なら呼んで頂戴」

何処か焦っているような感じで呼ばれた。

どうなるのかを理解したらしい。

「よオ、永琳・・・覚悟はできてンだろオナア！」

「ちょ、ちょっとくらい聞きなさい！私はきちんと入れて渡したわ、抜いたのはてめでしょようね」

「注意書きはどオ説明すんだ？」

「注意書き？」

「コレだ」

そう言いながら2mmで書いてある注意書きを見せる。

「はぁ・・・てめには後でお仕置きね、御免なさい、私の責任だわ」

「・・・いや、てめにお仕置きすればいいだけ・・・協力しよう」

「そう、ならとっておきで行くしかないようね・・・」

「そうだな、地獄を見てもらおうか、もしくは自分の罠に引っかかってもらおうか」

「出来るのかしら？」

「出来るか出来ないかじゃないさ・・・やるんだよ」

「フフ、そうね」

「フフフフ（ククク）」

「（今だけアンタに同情するわ・・・てめ）」

その後、てめの姿を見た者は誰もいなかった。

「勝手に人？を殺さないでほしいウサ！」

「ほう、まだ足りなかったか・・・クク、まだまだ続けようか」

「そうね、新薬の実験にもちょうどいいわ」

「え、じよ、冗談でしょ？」

「冗談に見える？」（にっこり）

「う、うさー！！」

まあお仕置きも終わったし・・・ん？内容？聞きたいか？

聞きたいなら止めないが・・・まああえて言うなら普通の人間なら

廃人確定なやつかな？

「これを飲めば少し待てば元に戻るわ」

「少しとはどれくらいだ？」

「大体30分くらいかしら」

「分かった」

すぐに飲んだ。

変な味がする・・・こう苦味が強い。

「次からこれと一緒に服用すれば大丈夫よ」

「了解、さて・・・霊夢、戻るぞ」

「え、ええ（私来た意味あったのかしら）」

霊夢が何か考えているが・・・気にしない方向で。

「ではな、まさか2日連続で来るとは思わなかったが」

「私もよ、まあてゐは任せて頂戴、もうこんなことはさせないわ」

「分かった、任せよう」

まあ少しやりすぎた感が否めないが。

「じゃあな」

「ええ、また来なさい、歓迎するわ」

こうして無事に薬を貰い、帰宅した。

30分たったら確かに戻った。

他の誰か・・・特に鴉天狗に見られたら大変だっただろう。

まあ見られたら記憶がなくなるまで殴ってたかもな。

『(文さんには後で写真を貰いましょう、そのために協力したのですから)』

「何かよからぬことを考えてるな？クロス」

『いえいえ、滅相もない、そんなことを考えているはずがないじゃないですか(無駄に鋭い！恋愛関係に持っていけないんですかね！この鋭さ!?)』

「どうかしたか？」

『いえいえ、まあ今日は疲れたので眠ります』

「デバイスに睡眠なんてあったのか？」

スリープモードならあるだろうが……。

『私は”特別”ですから!』(ドヤア

なぜだろう……今コイツがどや顔している気がしてムカつく。

「まあ寝るなら好きにしろ、疲れているならなおさら」

まあいつも働かせてるしな。

『マスター……おそらくもう少しで異変があります、どうしますか?』

「どうするも……ただ手伝っただけだ」

『そうですか(そう言いながら中心にいるんですよね)』

異変……次は何だったかな？  
確か……妖怪桜だったかな？

『春が訪れなくなるんですけどっけ?』

「多分な・・・まあ俺はあまりあのゲームをしていないからな、おぼろげにしか覚えていない」

『ならその時によって考えましょう』  
「だな」

もう少しで異変だ・・・何かイレギュラーがあると面倒だな。  
何事も無く解決すればいいが。

第14話 死にそう？なんのことはねえ、だったらためえ……生きてんじゅ

後書きコーナー!!

龍「……なぜ女に変化させた」

何となく

龍「死ね」

うおっと!?

龍「チツ！感謝コーナーだ」

舌打ち!?え、えっと、ケルベルス様、雨季様、メガネ様、感想ありがとうございます!!

龍「次は異変だが、妖々夢だったよな？」

多分ね。調べてからだと思うので少し遅れるかもです。

龍「まあ必ず更新はするから安心してくれ」

では！また次回！

龍「ではな」

第15話 完璧な人間なんて一人もいねえ、互いに支えあって生きていくのがー

今回から異変です！

ゆっくりじっくり待っててくださいな。

妖々夢はまったくプレイしたことはありませんがねー！

それではどうぞー！

第15話 完璧な人間なんて一人もいねえ、互いに支えあって生きていくのがー

あの副作用じけんから大分たつた。

今は春のはず・・・目の前の雪景色がなければ完全に春なんだろうが・・・。

「やっぱり異変かねえ」

「異変だな」

「異変ね」

「なら解決しないとな」

「ええ」

「ああ」

まったくやる気が見えない巫女と、逆にやる気あふれる魔法使いがいた。

「・・・冷えるな」

「さぶいわね」

「冷えるんだぜ！」

いや、魔理沙のは冷えないだろ、むしろ快適な気がする。

まあ霊夢はさぶいだろうがな。

「ああもう！早く終わらせてコタツに入るわよ！」

「はいはい、まったく・・・霊夢は怠け者だぜ！」

「いや、こつ冷えていたら仕方ないだろうさ」

まあまだ冬なみの冷えだからな。

どうやら春が盗られたらしい。

まあどうやってかと聞かれれば・・・？としかならないが。

「さて、さっき誰かいた気がするんだが？」

なんか白い人。

「気のせいだぜ！私は気がつかなかったしな！」

「そうね、気のせいじゃないかしら」

「・・・そうか」

クロスからは反応があつたって言われたんだが・・・後で謝ろう。

「で？ここは何処だ？誰かの家っぽいが」

「さあ？どうでもいいわよ・・・」

「そうだな！」

何でだろうか・・・こいつらからやる気が見えない。

「ああ・・・もつとやる気出せって、俺に出来る事なら何でもやるから」

「「本当!?!」」

「うお!?!あ、ああ」

墓穴掘ったか？

「さあ！やるわよ!!--」

「おっ!!--」

まあやる気があるのは良い事で。

「そういえば」

「何？」

「どうかしたのか？」

「どうかしたのかしら？」

「一人増えてないか？」

そう言いながら振り向くと咲夜がいた。

「お嬢様に頼まれたので」

「なるほど、なら協力しよう、その方が効率的だ」

「確かにね」

というわけで協力関係に。

「で？此処はどこかしら？」

「さあ？でも人が住みそうなとこだよな、猫とか、犬とか、狐とか」

「そもそも本当に春なのかしら・・・おかしいじゃない」

「迷い込んだが最後！おかしいと思ったなら人に聞く！呼ばれて飛び出て・・・」

忙しいなこの子。まあ律儀に全部に反応を返しているのはいいとは思うが。

つていうより・・・疲れ果ててないか？

「最後？」

「出る杭は打たれる・・・か？」

「人じゃ無いじゃない」

「それはさておき、迷い家にようこそ、で、何の用？あ、後聞かれども答えられないけど・・・ゼエゼエ」

うわぁ〜しんどそつだ。

というよりあいっすら分かっててやってるな？

「それくらいにしとけ、お前ら遊んでんだろ」

「そんなことはないわ」

「無いぜ！」

「無いわ」

「ならいいが・・・さて、用件は何かな？」

「ここは迷い家、本来なら来れるはずないんだけど・・・どうやって来たの？」

どうやってと言われても・・・

「気がついたら？」

「無意識に」

「何となく？」

「気合」

「全員別々!？」

まあそれはどうでもいいじゃねえか。

「どうしてもよくないんだけどなあ・・・」

「まあ・・・要は足止めみたいなものだろ？さっさと終わらせて先に進むぞ」

「」「了解」「」

「よ、4対1!?!ひっ卑怯じゃない!」

「いやいや、相手するのは順番だよ、最初は俺だ」

そう言いながらスペルの準備をする。

まあ今回はネタスペカのみだがな。

「じゃあいくぞ！」  
「おおー!!」

戦闘開始

まずは最初に、

――変身「555」――

ダイヤルを打ち込み、ベルトにつけて、変身する。

『Complete』

姿は勿論ファイズ。

「な、何それ!？」

「? ネタस्पカだ」

「・・・(ネタのほづが凶悪だったりするのよね)」  
「いくぞ!」

そう言いながら、俺はファイズフォンを取り出し、入力コード、106を入力。

『Burst Mode』

光弾を3連射する。

「うわっ!？」

「やはりコレくらいなら避けるか」

ならこれで・・・

「次は私だよ！」

——陰陽「清明大紋」——

いきなり弾幕が飛んできた。  
よけ辛い・・・なら、

——必殺「グランインパクト」——

ファイズショットをこぶしにつけて、弾幕に殴りかかる。

ドカーン！

「・・・やりすぎたか？」

「一応半分に抑えようとしたんだが・・・どうやらその半分で済んだんだが・・・。」

「クレータが出来る時点でやりすぎだぜ」

「まったくだわ、まあうちの境内じゃないだけマシだけど」

「・・・紅魔館もこうなるのかしら」

「さ、さて！なら次はこれだよ！」

——鬼符「青鬼赤鬼」——

「どうやら式紙を使うようだな。  
ならば、」

「いくぞ！」

「――必殺「クリームゾンスマッシュ」――

ファイズポインターから円錐状の赤い光を放って、式紙を捕らえた。その後、とび蹴りを放つ。

「はあああああああああああ！！！」

ガガガガガガ・・・ドカーン！！

これで式紙は消えたな。

「え、ええ〜！？」

「さて、次はあるか？」

「つ、次！」

「――鬼神「飛翔毘沙門天」――

どうやらラストにするつもりらしい・・・なら。

「こちらもそれに応じよう」

「――変化「アクセルフォーム」――

デジタルウォッチ型デバイス「ファイズアクセル」のミッションメモリーをファイズフォンに入れることで、

『Complete』

と音声 が 鳴り、変化する。  
そして、アクセルフォームに変化した。

「な、何それ!？」

「見てれば分かる」

さて、時間がない・・・すぐに終わらせる。

「すぐに終わらせるぞ!」

「!？」

『Start Up』

準備を整え、発動させる。

発動させると、10秒間だけ通常の1000倍の速度での移動が可能になる。

まあ・・・要はかなり速く動けるといふ事だ。

「いくぜ?遅れるなよ？」

「ふえ!？」

相手の弾幕全てを殴って消す。

相手の弾幕も数が多いが、こちらもその数だけ殴り飛ばす。  
・・・もうそろそろか。

「終わらせる!」

――必殺「アクセルクリムゾンスマッシュ」――

相手を全方位からロックオンした後、同時多重的にクリムゾンスマッシュを叩き込む。  
威力も申し分ないはずだ。

『Time Out』

これで終わりだ。

「きゅ」

「ふむ、次に進むか」

「そうね」

「そうだぜ！」

「そうするわ」

こうして一人（前の部分で触れられることなく倒れた人？含め2人）を倒した。

これから少し大変な事になりそうだが……まあ頑張るしかなかるうて。

「さあ！先に進むわよ！」

「ええ」

「了解だぜ！」

大丈夫だろうか……先走りそうなんだが。  
まあいい……何とかするか。

「さあて……何事も異常イレギュラーがなければいいが」

『さて、どうでしょうね、不幸か幸か、大凶に選ばれてますからね、マスターは』

「大凶は選ばれたやつの証だが……嬉しくは無いね」

『まったくです』

どんな事があっても何とかするだけだな。

第15話 完璧な人間なんて一人もいねえ、互いに支えあって生きていくのがー

後書きコーナー!!

龍「なぜフェイス？」

好きだから!

龍「・・・そうか」

さて!今回も終わったから寝る!モウ疲れた!

龍「・・・感謝コーナーしてからな?」(アイアンクロー)

ぐぬぬ・・・了解。

ケルベルス様、Jam様、メガネ様、感想ありがとうございます!!

龍「次回も頑張って今週中に投稿予定だ」

その前にネギまですけどね。

龍「両方頑張らせるので安心してくれ」

俺が安心できない!

龍「しるか」

¥(・O・)ノ

龍「・・・ではな」

スルーされた！？  
で、っでは！

第16話 救いなんて、求めない、俺たちは自分で、生きていく方法を見つけて

今回はステージでいう4ですね。

うん。何故か気を抜いたら弾幕戦が雑に・・・泣きたい。

こんな駄文ですが楽しんでいただけたら幸いです。

第16話 救いなんて、求めない、俺たちは自分で、生きていく方法を見つけて

さて、次は誰だろうか……。

「なあ」

「ん？」

「あのスペカは本当にネタなのか？」

「ああ、正しく言えば、ネタだけど火力や能力を自重しなかったスペカな」

「……あの猫には同情するんだぜ……」

でも一番加減がきくスペカでもあるんだよな。

まあライダーのパンチとかキツクの威力って洒落にならんがな。

「……それより」

「どうかしたのかしら？」

「なぜ雲の上なのに桜が舞っているのか」

「上空の方が暖かいなんて……素敵過ぎて涙が出るわ」

「本当ね、この雲の下は、猛吹雪だって言うのに」

「まっただけ」

「というか俺の疑問への答えになっていない……だからそっちの子が答えてくれるかな？」

「この辺はこの季節になると気圧が……下がる」

「なんかテンションも下がりそうね」

いきなりそれは酷くないか？

「まあ俺達は先に進みたいんだが……そこをどいてくれないか？」

「その前に一曲聴いてかない？」

「確かに君達の奏でる曲を聴いてみたい気もするが・・・またの機会にしたいな、今は忙しい」

「さあ演奏開始よ、姉さん、やっちゃいな！」

フフ、話を聞いてくれません。

これで某再翻訳を思い出したやつは負けな？

「まあ要はここを通りたければぶっ飛ばせて事だな！分かりやすいぜー！」

「いや、そんな事は言っていないからな？」

「・・・物騒ね」

「それを言える立場か？」

「・・・何のことかしら？」

「そう思っならまず俺の眼を見て言おうな？霊夢」

そこまで露骨に眼を逸らされるとな。

「そついえばアンタ達の目的は何なのよ」

露骨に話を逸らしたな。

「私達は騒霊演奏隊、お呼ばれで来たの」

「これからお屋敷でお花見よ、私達は音楽で盛り上げるの」

「でも、あなた達は演奏できない」

「いや、俺は演奏できるぞ？」

ギターとか、バイオリンも一応できるし、ピアノも可能だ。頑張ればトランペットも可。

「私もお花見したいわ」

「俺もできるなら参加したいな」

「私もだぜ！」

「・・・私も参加するわ」

「あなた達はお呼びでない」

あれ？俺は目線が外れてる？

「何で龍斗には眼を向けないのかしら？」

「その人は呼ばれてるから」

は？なぜだ？俺は面識はないはずだが・・・紫か？

まあとりあえずは、

「そこを押し通る」

「協力するんだぜ！」

「私はパス、龍斗で十分じゃない」

「私も様子見します、いなくても十分そうなので」

・・・本気かよ。

いや、本気で下がりやがった。

・・・何とかなるか？

「私達の曲を聴けえ！！」

「それは別の人の台詞なんだが・・・」

なぜ知っている？

まあそんなこんな（どんな感じだ）で弾幕勝負が始まった。

ついでに言うと、俺の通常弾幕は星とナイフだ。

咲夜と魔理沙が喜んで、霊夢が不機嫌だったのが不思議だった。

『マスター、考え事は後です、今は目の前の事に集中してください』  
「それもそうか」  
「まだまだ逝くよ」  
「字が違う」

それに幽霊が言つと洒落にならん。成仏的な意味で。

「リリカ・・・下がって」  
「ええ〜何で〜姉さん？」  
「その人がさつきしようとしてたの見えなかったの？」  
「え？」

ばれてたか。

「あつ！糸がある！」  
「そう、そのまま進んでたら・・・」  
「あ、危なかった・・・」  
「いや、胴体とおさらばはしないからな？」

きちんと斬れない様になっているさ。  
さて、小細工はいらないとみた。  
魔理沙も小細工は嫌いだろうしな。  
でも弾幕が少し鬱陶しい。  
だから、

――南斗雷震掌――

膝を立ててしゃがみ、片手で地面に突きを入れることで、斜め前方に巨大な気の柱を発生させる。

これによって、弾幕の一部を消し飛ばす。

「すごいな！さすが龍斗だぜ！」

「そうか？」

これくらいなら大抵のやつができるぞ？

主に別の世界の転生者とか。

「まずは私から」

「――偽弦「スードストラディヴァリウス」――」

難易度はルナですかそうですか。

面倒だが仕方ない。

目の前の圧倒的？な弾幕に少しだけ現実逃避。

まあ何とかなるけどな。

「私に任せるんだぜ！！」

「――恋符「マスタースパーク」――」

魔理沙が目の前の弾幕をレーザーで吹き飛ばす。

相変わらず威力がすごいな。

なら俺は・・・、

「――魔眼「一時の夢」――」

邪眼で相手に幻覚を見せ、見当違いの方向に弾幕を放たせる。

まあ1分しかもたないんだが。

「ジャスト1分だ、いい夢は見れたか？」

「あ、あれ？確かにあつちに弾幕が当たったはず！」

「残念、それは夢だ」

「くっ！」

「なら次は私だよ！」

——冥管「ゴーストクリフォード」——

次はメルランか。

まあ前がルナサだったから多分そうだろうとは思ったが。  
うん。音楽が聞こえるだけでやる気が出るな。

『テンションがあがるのは勘弁してください、マスターの場合、テンションが上がると何をするか分かりませんから（主に自重を忘れますから）』

「そうか？なら仕方ない」

でも相手の能力的には上がっちゃまうんだよなあ。  
まあ大丈夫か。

テンションが上がっても被害は少ないだろうし。

「くっく（ゾクッ）」「」

何故だろうか・・・相手が震えだしたんだが？

『（感じ取りましたね）』

「さて、この弾幕を何とかしないとな」

「なら私に任せるんだぜ！！」

——魔砲「ファイナルスパーク」——

マスタースパークより激しいレーザーが放たれる。  
・・・すごいな。

だが、そのおかげで相手のスペルをブレイクできた。

「なら三人で行くよ」

「あ、あれ？私の分・・・」

「行くよ」

「ええー!!」

何故か不憫な感じがしてきた。

――騒葬「ステージャンリバーサイド」――

やはり三人で来るだけあつて弾幕が激しい。

まあゲームでは全画面のボム使うとダメージが三倍に・・・。

『言っちゃ駄目ですマスター』

「?まあいい、魔理沙が当たりそうだ、弾幕を消すか」

――禁忌「フォーオブアカインド」――

「龍斗が四人に増えた!?（あ、あれ?これって・・・一人くらい  
持ち帰っても・・・）」

「持ち帰ろうとしないでくれ」

「!?!?!」

ん?霊夢が真っ赤に・・・いや、今は弾幕を消すのが優先だな。

――審判「ギルティ・オワ・ノットギルティ」――

「――霊符「夢想封印 散」――  
「――星符「ドラゴンメテオ」――  
「――幻葬「夜霧の幻影殺人鬼」――

分身した四人でそれぞれ別のスペルを唱える。

あれ？今思ったらオーバーキルじゃないか？これ。

目の前には上から降ってくる弾幕と、大量のナイフ、バラバラに散開した弾幕に高密度の弾幕・・・やりすぎた。

「うう・・・ら、ラスト・・・」

「――大合葬「霊車コンチェルトグロツソ怪」――

どうやら最後らしい。

というよりよく耐えられたな。

自分でもやりすぎた気がしないでもない。

「いや、やりすぎなんだけ」

「うん、うん」

全員もそう思うか。

というよりあっちの三人が必死に頭を縦に振っているんだが・・・  
そんなに怖かったか。

「（・・・龍斗を怒らせないようにしましょう）」

「（同意だぜ）ですわ」

何か思われている気がしないでもないし、心も読むことはできるが・・・  
今はいいか。

目の前の弾幕に集中しよう。

「さて、魔理沙・・・ラストだ、頑張るぞ」  
「おう！」

まだ分身は消していないしな。  
というより相手の弾幕を全部避けているんだが・・・分身も。

「早く終わらせたい・・・」

「うん、まさかこんなに大変だとはねえ」

「早く休みたいよぉ」

「だそうだが？」

「「え？」」「」

「よぉし！早く終わらせてやるんだぜ！」

――魔砲「ファイナルマスタースパーク」――

三人でクルクル回りながら弾幕を撃っているせいで、思いつきり巻き込まれたな。

「ふう・・・すっきりしたぜ！」

「かわいそうに・・・」

「それには同意するわ、咲夜」

確かにやりすぎた気しかない。

「すまないな、加減を忘れた・・・これはお詫びだ」

そっぴいなから治療する。

「ありがとう」

「いや、こちらが悪いのだから当然だろう？まあ今回は曲を聴けないが、また別の機会に聴きたい・・・楽しみにしている」  
「う、うん」

「その時は張り切るよ〜！」

「任せて！」

「フフ、ああ、楽しみにしている」

さて、先に・・・あれ？

「「「「・・・」」」」(ゴゴゴ)

な、なんでジヨジヨみたいに後ろに・・・スタンドみたいなものが見えるんだ？

咲夜は洒落になつてないんだが？能力的に。

「な、何かしたか？」

「・・・別に(鈍いのよ・・・鈍感)」

「別にないんだぜ！(鈍感だよなー)」

「いいえ、何も(まったく・・・先が思いやられるわ)」

「？」

「「「はあ」」」

「皆苦労しそうね」

「ええ」

「まったくだぜ」

「・・・いや、異変だから苦労はするだろ」

「「「・・・」」」

「な、何だ？」

なんで「駄目だコイツ・・・早く何とかしないと」みたいな顔で見てくるんだろうか。

「後でO H A N A S H Iね」

「協力するぜ(わ)」

「逃げるなら・・・いや、もう遅いか」

何故こうなった。

「まあ今は異変よ、先に進むわよ、そのあんた達！」

「何？」

「どうやったらこの扉は開くのかしら？」

「この扉は開かないわ」

「お前達は、この中に入るんじゃないのか？」

「私達は上を飛び越えて入るのよ」

「・・・ほっ」

いやいや、扉が役割を果たしてない・・・いや、魔理沙もなるほど  
って顔をしない。

そこの2人も納得するな！

・・・まあ飛び越えるしかなさそうだが。

壊したら駄目だろうし。

そう思いながら、結局は扉を飛び越え、先に進んだ。

そういえば・・・なんでアリスは隠れたんだろうか？

何故かずっと見てただけなんだよな・・・。

『(救われないうすね、あの人も此処の人も)』

「？」

『何でも無いですよ、今のマスターには理解できませんから』

失礼だな・・・でも何故か否定できない。

そう思いながらスペカの補充に勤しんだ。

第16話 救いなんて、求めない、俺たちは自分で、生きていく方法を見つけて

後書きコーナー！

龍「・・・」

どうかした？

龍「色々酷くて何も言えん」

・・・orz

龍「事実だろうに」

い、一生懸命頑張っていきます！！

龍「というよりムシウタを知っている人がどれだけいるか・・・だな」

個人的には好きなんですけどね。

龍「まあいい、感謝コーナーだ」

ケルベルス様、メガネ様、感想ありがとうございます！！

龍「コイツも名言がなくなりつつある」

多分妖々夢までなら大丈夫ですがね！

龍「まあよければ名言を感想にでも書いてくれると嬉しい」

探してるんですけどね。

龍「まあ次は頑張れば次の土、日、遅くても再来週くらいには投稿する」

頑張ります！

龍「まあ次はネギまだ、前は駄文に駄文を重ねた駄文になったが・  
・次は少しでもマシになるようにさせるからな」

が、頑張ります・・・（挫けそう）

龍「ではな、また次回で会おう」

で、ではでは！

**第17話 信念無き者が信念ある者の魂を踏みこむことだけは絶対に許さない**

今回は妖夢戦です！

今回はもしかしたら番外編かもです。

まあ今回は今までと同じかそれ以上に戦闘をがんばって見ましたが、  
こんな感じでいいんですかね？

それではどうぞ！！

第17話 信念無き者が信念ある者の魂を踏みにじることだけは絶対に許さない

三人の女の子を倒して……これだけ聞くと悪役だな。別に構わないが。

今は階段をひたすら駆け上がっている。

まあ飛んでいるが。

「ねえ……」

「む？どうかしたか？咲夜」

どうやら考え事をしている間に話しかけられたようだ。

「聞きたい事があつたから聞きたいのだけれど……いいかしら？」

「ああ、別に構わない」

「なら聞くわ……どうしてそんなに悲しそうな眼をしているのかしら」

「悲しそうな眼？」

「ええ、まるで大切な人に裏切られたような、そんな感じね」

やれやれ……どうしてこつとも鋭いかねえ。

「後、霊夢や魔理沙も気づいているわよ？」

「……そうか」

「まあいつか話してくれるまで待つから大丈夫よ」

「そうか、ありがとう……今回の異変が終われば……話ささ」

「ならいいわ」

「まっただくだぜ！」

話を聞いていたか。

「さあ、そうと決まったら先に進むぞ」

「「「おう！（ええ）」」」

まあもうすぐで一段落つくだろうからな。

「騒がしいと思えば・・・」

「む？」

目の前に人魂？みたいなものを連れた女の子が現れた。

「生きた人間・・・」

「死んでたら騒がないのか？」

「騒がない」

「悪かったな、死んでなくて、でもまあ・・・異変があれば解決するのみだ、悪いが、ここを通してもらうぞ」

「人間がここ白玉楼に来ることはそれ自体が死のはず・・・何故」

「さあな？もしかしたらもう死んでるのかもな」

一回死んでいるから此処にいるんだしな。

それに、

「もう俺は人間じゃない、今は吸血鬼だ」

「なるほど・・・ならあなたの春を奪えばあの西行妖は満開さいぎょうまみあやかしになるかもしれない」

「さあ？もしかしたら満開にならないかもな」

そも・・・そんな事はさせないがな。

「じゃあ、戦うか」

「私も手伝うわ」

「そうか・・・頼んだ、咲夜」

「ええ」

「2人・・・でもお嬢様のためにも！負ける訳にはいかない！！」

「残念、俺達も護りたいモノがあるんでね、負けてやる訳にはいかないんだ、アンタを倒す・・・悪いね」

そういいながらナイフを構える。

「さあ・・・始めよう、俺の名は龍斗、零崎 龍斗だ」

「私の名は魂魄 妖夢、そして・・・妖怪が鍛えたこの楼観剣に斬れぬものなど、あんまり無い！」

言ってて悲しくないんだろうか、もしくは恥ずかしくはないのだろうか。

「私は咲夜・・・幽霊でも斬れるのかしら？」

そういいながらも皆が構える。

「行くぞ！」

そう言いながらナイフ型の弾幕を放つ。

「そんなもの！！」

相手の刀で斬り伏せられる。

「私を忘れないでくれるかしら？」

能力で時を止め、ナイフを投げる。

「くっ！なめるな！！」

——人符「現世斬」——

弾幕をグレイズしながら神速の居合いで攻撃してくる。  
まさかの緋想天とかのタイプか。

「どうするのかしら？」

時を止めて聞いてきた。

・・・言うのは何だが、卑怯だな。

「使えるものは使うものよ」

「それもそうか、あの攻撃にはコレで行くさ」

そう言いながらナイフを見せる。

「へえ、楽しみにしておくわ」

そういった後、能力が解除された。

「はあああああ！！」

「遅い」

——閃鞘「七夜」——

閃鞘・七夜で相手の上に周り、斬りかかる。

「くっ!!」

相手は避けながら弾幕を放ってきた。

「あたりはしないわ」

「――幻符「殺人ドール」――」

ナイフが周囲に大量に投げられ、弾幕を打ち消しながらも相手に向かう。

「くっ!これなら・・・どうだ!!」

「――断命剣「冥想斬」――」

剣に気を纏わせて打ち落とされた。  
やはり剣で戦うやつとは楽しいな。

「行くぞ!俺なりの神速を見せてやる!」

「――無極「四式・零」――」

自分のできる限りのスピードで相手に接近し、居合いを放つ。

「くうううう!!」

やはり終わらないか。

「わ、私は・・・負ける訳には・・・いかない!お嬢様のためにも!負ける訳には行かない!!」

「・・・それがお前の信念か？」

「そうだ！だから貴方たちを倒します！！」

「そうか・・・なら俺も全力で戦おう」

そう言いながら準備する。

「クロス、リミッター開放、フルドライブ」

『了解、フルドライブ・・・お気をつけて』

「ああ、負けないさ、俺にも譲れない思いの二つや三つあるからな・・・全力でぶつかるのみ！」

ナイフから刀に変え、構える。

「咲夜、準備完了だ、下がってもいいぞ？」

「そう、なら少しだけ下がるわ」

そう言いながら咲夜は下がった。

ありがたい・・・これで心置きなく戦える。

「さあ行くぞ！殺しはしないが・・・零崎を始める！！」

「うおおおおお！！」

互いに刀を構え、接近する。

これで終わらせる気だ。

いいだろう・・・終わらせる！！

――人鬼「未来永劫斬」――

相手の攻撃で斬りあげられた。

「はあああああああー!!」

更に全方位から超高速で追撃を加えてくる。

「これで!!」

「ああ、これで・・・終わりだ」

「なっ!?!」

――無極「極式・世界」――

零から四式までの攻撃をまったく同時に放つ。

「終わったか」

「負け・・・ですね」

「ああ、俺の勝ちだ・・・先に進ませてもらう」

「はい・・・お嬢様を頼みます」

「クク、普通敵に頼むか？」

「いえ・・・あなたの名を聞いて、決めた事です」

「は？」

何故俺の名を聞いただけで？

「貴方の事はお嬢様から教えて頂きました」

「？」

「幽々子様が・・・楽しそうに話してました、紫様が・・・紹介したい人がいると言ってる、どんな人なんだろうって・・・名は龍斗です」

「そうか」

紫が紹介していたのか。

「写真を見せてもらい、どのような人なのか余計に気になりました、そして強いとも聞きました、なので戦ってみたいと……結果はボロ負けでしたが（苦笑）」

「そんな事はないさ」

「いえ……今はいいです、今は……お嬢様を……頼みます」

「ああ、任せろ、止めてみせるさ」

「……これで安心して寝る事ができます」

どつやら長い事寝てなかったらしい。

「ならゆっくり休め……お前は、もう休んでもいいんだ、後は任せろ」

「……はい」

そう言いながら妖夢は眠った。

どつやら相当疲れていたらしい。

「終わったかしら？」

「ああ、すまないな」

「いいわよ、ねえ？魔理沙、霊夢」

「ええ（おつ）」

やはり優しいな。

「さあ、先に進もうか……少しはお灸を据えないとな」

「そうね」

「ああ！」

幽々子には少し教えないとな。

まあ不要だろうが。

ここまで必死に妖夢が動くんだ・・・それだけ素晴らしい主だとい  
うことだ。

でもまあ・・・止めないとな。

あの木は満開にさせてはいけない。

あの木は・・・消滅させるか、封印を強化する必要がある。  
紫に協力してもらおうか。

「ねえ・・・」

「ん？どうかしたの？」

「私たち・・・空気じゃない？」

「言わない方がいいんだぜ」

「・・・そうね」

後ろで何か聞こえるが気にせず先に進む。

もうすぐで幽々子と戦う。

妖夢に任されたんだ・・・負ける訳にはいかない。

そう決心しながら先に進むんだ。

第17話 信念無き者が信念ある者の魂を踏みに行ることだけは絶対に許さない

後書きコーナー!!

龍「死ね」

いきなり!?

龍「お前・・・次で番外編だと?」

い、いや!?!きりが良ければだよ!?!多分異変が終わった後だよ!?!

龍「ならいい」

ほっ。

龍「さて、感謝コーナー」

冷えピタ様、雨季様、ケルベルス様、感想ありがとうございます!!

龍「すまないな、毎回こんな駄文な上に更新が遅くて」

言い返せない!!

龍「事実だ」

・・・いいもん、次回から後書きで別キャラだすからな!!

龍「は?」

誕生日記念に新しくキャラを作ろうかなあと後書き限定で。

龍「・・・なら大丈夫か？」

人気があれば本編にできるけどね！！

龍「大丈夫だ、人気はない、この小説もな」

o r z

龍「・・・ではな」

では！次回は今週中に更新したいと思ってます！！

龍「出来るのだろうか」

やってみせる！！

ではでは！

**第18話 やると決めたことはやる それだけだ（前書き）**

今回も大分遅くなっちゃいました（汗）

その上駄文・・・鬱だ。

今回で妖々夢編は終了です。

次で宴会が終わり、日常（導入編）になります。

## 第18話 やると決めたことはやる それだけだ

妖夢を倒し、先に進んだんだが……。

「いきなり戦闘か……というよりも幽々子の様子がおかしい」

何かにとり憑かれたかのようなようだ。

「くっ！余裕があるならもう少し手伝って欲しいんだぜ！」

「まったくね！」

「――霊符「夢想封印」――」

「――魔符「スターダストレヴァリエ」――」

相手はすでにスペカを発動させている。

内容は、

亡郷「亡我郷 - 自尽 -」である。

霊夢も魔理沙も咲夜も避けるのに必死のため、静かになっていく。まあ弾幕が地面に当たったりする音で騒がしいんだが。

「というよりアンタだけおかしい気がするんだけど！？何で当たらないのよ！？何で通り抜けるのよ！」

「さあ？」

何でだろうな。

すでに一度死んでいるからか？

そう思っていると、腕が消しとんだ。

「へえ……てつきりまとめて消えると思ってたんだが……まさか腕だけとはな、例外ってやつか？」

「さあね！でも私たちはそうなるとは限らないわ！」

まっただな。

――亡舞「生者必滅の理 - 魔境 -」――

相手の後ろに扇が開かれ、弾幕の密度が増した。さらに、スペカのせいで増加。

「だあああああ！面倒だぜえ！一気に吹き飛ばしてやる！！！」

――恋符「マスタースパーク」――

大小交えた青い玉を避けるのが面倒になったらしく、魔理沙が思いっきり吹き飛ばした。

「確かに面倒ね……なら」

――幻符「殺人ドール」――

大量のナイフを飛ばして、弾幕を削る。

「あ、当たりそうね……ならこっしょうしょう」

――夢符「二重結界」――

霊夢は結界を張って耐えた。

――華霊「バタフライデイルージョン」――

どうやらあれでスペルブレイクしたらしい。

次の弾幕は、何かよく分からないのが追いかけてき、そこから弾幕が飛んでくる。

他にも放たれているので正直面倒ではある。

「ちっ」

――系符「鋼糸・盾」――

鋼糸を細かくまとめ、盾のようにする。

最近なぜかできるようになった技だ。

一応他にも剣、斧、槍などもある。

今回はどうやらスペカを使わずブレイクできたらしい。(霊夢達が)

――幽曲「リポジトリ・オブ・ヒロカワ」 - 神霊 - 「――

色とりどりの弾幕が放たれる。

自分に向けられてなければじっくりみていたいな。

「えらく余裕ね」

「いやいや、結構いっぱいだからな？」

「そうは見えないんだぜ」

「というよりもお前らも余裕あるだろ」

しゃべるくらいの。

「面倒ね!」

——靈符「無想封印 集」——

弾幕を放ち、相手の弾幕を消していく。

「くっ！当たり前そうなんだぜ」

「大丈夫か？なんなら俺が消すが？」

「大丈夫だぜ！」

——恋符「ノンディレクショナルレーザー」——

霊夢と同じく、魔理沙も弾幕を消し飛ばしていく。

「・・・やはりおかしい」「どうかした？」

「いや、相手の様子がおかしい、いくらなんでも急に攻撃したりずつと黙ってたりはしないだろ」

「それもそうね・・・なら何かあるのかしら？」

「考えられるのは別の異変が起きている可能性だな、その確率がたかい」

「なるほどね・・・ならどうする？相手は意識が無い状態っぽいし、下手に刺激すると大変だと思っけど？」

「そうだな」

どうするか・・・一応あるにはあるんだが。

いつその事あの黒い霧だけでも壊すか殺すか？

まあとりあえずは、

「あのスペカをどうにかしないとな」

「ええ、そうね」

「まったく・・・面倒だぜ」

「でもそうしなければ先には進めないでしょう？」

「そうだな」

やれやれ、まいったねどうも。

まあ・・・救いたいモノは救う主義だ。

それを相手が望んでいようが望んでいなかろうが。

俺は・・・後悔だけはしたくない。

「ならする事は決まってるでしょ？」

「ああ」

「なら私たちはそれに協力するだけだぜ！」

「魔理沙・・・感謝する」

「勿論私たちもよ？」

「ええ、当然ね」

「霊夢、咲夜・・・ああ、ありがとう」

喋っている間にも弾幕は襲ってくる。

だが、

「無駄なんだぜ！」

――魔砲「ファイナルスパーク」――

魔理沙が圧倒的なレーザーで相手の弾幕を吹き飛ばす。

「でかした！霊夢！」

――グラム・サイト妖精眼発動――

眼を発動させ、霊夢に指示を出す。

「分かってるわよ！」

——霊符「夢想封印 散」——

どうやら本当に伝わっていたらしく、散によって相手の弾幕が消えていく。

よし、これなら・・・いや！まだか！

「咲夜！」

「分かってるわ」

——幻葬「夜霧の幻影殺人鬼」——

咲夜のナイフによる弾幕で最後の分も消される。

「今だぜ！龍斗！！！」

「分かっている！！！」

この眼の力で見て観て視て見極める！

「お前の正体はわからない・・・だがな、お前の罪は、お前が抱える」

幽々子の腹の部分に攻撃する。

だが、これはあの黒い霧にしか効かない。

これで幽々子は大丈夫なはず・・・だが、

「桜がまだ解決していない・・・しかもあの黒い霧があの本に向かいやがった！」

「龍斗！どうするんだぜ！？」

「何か策はあるんでしょうね!？」

――「反魂蝶 - 八分咲 -」――

きやがった!？

「とりあえずはひたすら避ける! 避けてれば大丈夫だが当たればどうなるか分からないぞ!」

「了解だぜ!」

圧倒的な密度の弾幕を避け続ける。

どうやら完全にとり憑いたみたいで、あの木をもう一度封印するとは不可能みたいだ。

だが・・・あれを破壊すると幽々子が!

仕方ない・・・、

――空想「Blut de Schwester」――

空想具現化によって、幽々子が消えないようにするための準備をする。

木ではなく、この屋敷全てを範囲に。

さあ、これで遠慮はいらない。

「あの木を・・・西行妖を潰すぞ」

「おう!」

「「ええ!」」

まずは霊夢から、

「行くわよ!」

――神技「八方鬼縛陣」――

一気に大量の札型の弾幕が放たれる。  
相手の大量にある弾幕を消しながら進んでいく。

「今の内に咲夜！」

「ええ、分かってるわ」

――幻葬「夜霧の幻影殺人鬼」――

さっきと同じ弾幕が放たれる。  
これによってさらに消えていく。

「魔理沙！！」

「おう！任せろ！！」

――魔砲「ファイナルマスタースパーク」――

さらに太くなったレーザー・・・いや、ビームが、放たれる。  
これによって相手に隙ができた。

「・・・今だ（よ）！！」

「おう！」

――偽月「Blut de Schwester」――

空想具現化によって月を落とす。  
本来なら酷い被害がでるため、使わないが、今は結界を張っている  
ため大丈夫なので遠慮なく放つ。

「とどめだ!」

そう言いながら、俺はクロスを日本刀に変える。

――剣技「無極極式・世界」――

無極の型の零から四までをまったく同時に放ち、最後に直死によって点を斬りつける。

黒い靄がさらに逃げそうだったので、

――剣技「無極零式・虚無 散」――

超小型のブラックホールを大量に出し、黒い靄をそこに放り込む。これで・・・本当に終わりだ。

「終わったのね」

「ああ、これで今回の異変は終わりだ」

「ふう・・・疲れたんだぜ!」

「まったくな」

幽々子はまだ目が覚めない。

当然ではあるか。

能力を無理やり強化され、意識を奪われ、勝手に行動されてはな。と思っっていたんだが・・・

「ん〜 おいしいわ〜」

「なんでもう起きてんだよ」

起きて食事をしていた。

「あら？アナタが紫の言ってた龍斗ね？紫からよく聞いてるわ〜よろしくね？」

「ああ、で、今回の事は覚えているか？」

「・・・ええ、あの黒い霧に捕われて、アナタ達に攻撃していた事も覚えてるわ」

「そうか、なら話は早い、あの霧に心当たりは？」

「ないわね、でも閻魔様なら何か知ってるかもしれないわ、聞いてみたらどうかしら？」

「そうさせてもらう」

宴会が終わったらいくか。

「さて、嫌な事は忘れて、宴会だ」

「宴会するの？」

「ああ、幽々子も来るよな？妖夢は来ると思っぞ？」

「ならお邪魔させてもらうわ〜」

これで一件落着かな？

まあ問題は山積みだが、今は宴会を楽しもう。

第18話 やると決めたことはやる それだけだ（後書き）

後書きコーナー！！

龍「さつそく感謝コーナーだ」

雨季様、Jam様、夜神様、ケルベルス様、感想ありがとうございます  
ます！！

龍「で？あつちで待機しているのは誰だ？」

ん？後書き限定のキャラ（仮）

龍「なぜ仮なんだ？」

お試しだよ、人気があれば続くけどね。

龍「なるほど」

？「あ、あの〜もういいですか？」

あ、うん。自己紹介して。

？「はい、私はナギです、といってもどこかの鳥頭やお嬢様はまっ  
たく関係ありません」

だろうね。

龍「大丈夫なのか？コイツで」

ナ「失礼ですね・・・このゴキムシにできるのですから私にもできますよ」

いきなり口が悪い!?

ナ「気のせいでは?いくらなんでも私には悪口はととてもとても」

龍「・・・どうでもいいか」

ク『どうでもいいですね』

おまえら大概酷いな!?

ナ「で?次はいつになるんですか?塵」

生物ですらないんですね・・・えっと、次回は今週中にあげられたらいいなあ・・・と。

ナ「これだから単細胞生物は」

ミジンコバカにすんな!

龍「どうでもいい、じゃあ次回では宴会だ、ゆっくり待っててくれ」

ナ「では、次回でも会いましょう・・・さあ給料を要求します」

ひでえ!?!?で、ではでは!!(逃走)

龍「あつ、逃げた」

第19話 死ぬ覚悟なんてどうってことねえんだよ、カントンじゃねエのは・

遅くなりすいません!!

今回は宴会です!

次回から少しの間、日常編です!

今回もオチが似たり寄ったりですが勘弁を・・・。

それではどうぞ!!

第19話 死ぬ覚悟なんてどうってことねえんだよ、カントンじゃねエのは・

異変が終わり、今は宴会だ。

敵同士でも終わったら宴会、それが楽しみなやつもいる。

まあ後片付けは俺が霊夢がするんだが・・・。

「飲んでるかあ？」

「ああ、酒臭いぞ、魔理沙・・・少し飲みすぎだ」

「まあだまあだいけるぜ！もっと強い酒持って来い！」

紫は今はいない、なぜかと言うと、

境界がゆるんでいる なら紫に言うか（自分でできるけど） わざ

とやってましたごめんなさい 判決・死刑 再起不能リタイア 今此処

の状態なのでいない。

まあ自業自得だとしかしいようがない。

ついでにいうと境界は修正しておいた。

同じ能力が一応使えるからな。

（年季が違うからうまく・・・うわっ！何を、やめ（作者はスキマ送りにされました））

電波が来た気がしたがスルー安定だな。

「私の怒りが有頂天！」

「どうした急に」

「フラン！龍斗を賭けて勝負だぜ！！」

「いいよ〜でも・・・勝てるかなあ？」

「今の私を止める事はできないぜ！！不可能を可能にするのが私なのだぜ！！」

それは色々危ないんだが・・・記憶喪失的な意味で、微妙に助手を混ぜるな。

「フフフ・・・さあアナタの罪を数えなさい！」

レミリアまでネタに・・・。

咲夜も忠誠心を鼻からたらしてるし。

ついでに言つとレミリアが喧嘩をふっかけたのは幽香だ。

――起源「マスタースパーク」――

あつ、蒸発した。

「はぁ・・・ここには馬鹿しか集まらないのかしら？」

「さあ？でもまあ・・・たまには悪くないさ」

「・・・そんなものかしらね？」

「そんなもんだ」

記憶が完全に戻った状態だとなおさら思う。

ああ記憶はどうやら平行世界の俺が取り戻した瞬間、別の世界の俺にも戻つたらしい。

神の説明だ。

それはさておき、

「幽香もゆつくり楽しんでくれ」

「何処に行くのかしら？」

「ああ、今回から此処に来たやつらに挨拶をな」

「そう、ならいいわ・・・後で戻ってきなさい」

「?まあ戻れたらな、結構大変なんだ、あいつらの相手するのは」

「そう(大変な理由を理解しようとしてもしないのかしら?)」

「じゃあまた後で」

「ええ、後で」

そして俺は妖夢と幽々子のいる場所に向かった。

どうやら隅のほうにいたらしい。

「どうだ?楽しんでる・・・幽々子に関しては聞くまでもないか」

「ゝ あら、龍斗じゃない、ええ、楽しんでるわよゝ龍斗も食べるかしら?」

「いや、見てるだけで腹一杯だよ、で?妖夢は楽しめてるか?」

「はい、楽しんでます」

「硬いな・・・もう少し軽く接しろ、その方が楽だぞ?」

「ハハハ、これはもう癖なので」

やはり真面目なんだな・・・まあ珍しい方なんだろうが。

「で?挨拶だけではないのでしょうか?」

「やはりお見通しか」

「ええ、貴方はなるべく無駄な事はしないようにしているもの、まあ空回りしている事も結構あるみたいだけど」

笑いながら言われる。

「どうだろうな?まあ無駄な事はしたくないとは思っているが・・・さて、用件だが」

「あの西行妖のことね？」

「ああ、あれには幽々子・・・アンタの体が封印されていた、それを消し飛ばしてしまつたからな・・・すまない」

「気にしてないわよ？あのままだともつと大変な事になつてたんだから、仕方ないわ」

「一応あの封印の範囲を家全体に広げたから大丈夫だろうが・・・」

だから今幽々子は消える事無く存在している。

「・・・何かできることがあつたら言つてくれ、俺にできることなら何でもしよう」

「・・・なら楽しみとつておくわ」

「ああ、妖夢もな」

「私もですか！？」

「ああ、できることなら何でもな」

「そ、そうですね、なら後で考えておきます」

「ああ」

さて、後ろで微かに待っている霊夢とでも話すか。

「さて、じゃあ楽しんでくれ、幽々子はほどほどにな」

「ええ、分かつてるわよ」後、10杯ほどで我慢しておくわ」

それで我慢なんだな・・・。

「あ、あの・・・すいません」

「いや、楽しんでもらえたならいいさ」

まあ一番大変なのは霊夢だが。

そう思いながらも、霊夢の場所に向かった。

「ふう……」

「どうだ？」

「騒がしいだけよ……少しは抑えて欲しいわね」

「クク、無理をいうな、こいつらはこうだからな、仕方ないさ」

「……それもそうね（最近毒されて来てる気がするのだけれど・  
・気のせいよね？）」

『（気のせいではないんですよね〜最近霊夢さんもテンション高  
いですし）』

「その酒は？」

「紫のところから持ってきてもらったのよ、それくらいしてもらっ  
ても罰は当たらないでしょ？」

「それもそうだな」

後に分かる事だが、その酒は紫の一番気に入ってる酒だったそうだ。

220

「龍斗も飲む？」

「ああ、少しだけな」

あまり酒は強くないんでな。

「何の酒なんだ？」

「鬼殺し」

「なん……だと？」

なんでこいつらはピンポイントで狙ってくるんだろうか。

いや、これ以上飲まなければ大丈夫だ。

そうだ、これを置いて話せば……

「お兄ちゃん〜」

「ガフツ！」

酒が思いつきり口に入った!?

ま、まずい・・・いや、味はうまいが。

『(さて、写真・・・動画を撮る準備をしますか)』

後でクロスとは話し合いだな。

そう思いながら意識をなくした。

> 霊夢 Side <

龍斗にフランがぶつかって酒が龍斗の口に入っていった。

その瞬間、龍斗が反応しなくなった。

「龍斗？大丈夫なの？」

「お兄ちゃん？」

「うう・・・うん大丈夫」(少し舌足らずで)

!？な、何かしらこの可愛い生物。

お持ち帰りOKかしら？

「お兄ちゃん!」

「どうかしたの？フランお姉ちゃん」

お、お姉ちゃん？随分とうらやま・・・コホン、仲良く・・・私もそう呼んでくれるかしら？

ギョッ

!?

「どうかしたの？霊夢お姉ちゃん？」（首傾げ）

お、落ち着くのを私・・・素数を数えて落ち着くのよ！

素数は1と自分の数字でしか割れない孤独な数字・・・私に落ち着きをくれる・・・無理よ！

こんな可愛い生物！

ギユウツ

「ん？どうかしたの？霊夢お姉ちゃん？」

「ああ、可愛いわね！私を萌殺す気かしら！」

「・・・（壊れた・・・仕方ないよね、あの可愛さだもんね）」

その後の事は覚えてないわ、でも・・・わが生涯に一片の悔いなし！  
！そう思える記憶だったわ。

> 霊夢 Side end <

> 龍斗 Side <

・・・此処は。

『目が覚めましたか？マスター』

「ああ、で？何があったんだ？周りが血の海なんだが・・・」

どうしてこうなってるんだ？

『後で映像を見せますから今は片付けましょう（後でマスターの悶える姿が想像できますw）』

「そうだな」

さて・・・片付けるか。

片付けはその後、30分くらいで終わった。  
分身超便利だな。

その後、映像を見せられて悶えた（恥ずかしさのあまり）のは仕方ないと思う。

第19話 死ぬ覚悟なんてどつってことねえんだよ、カントンじゃねエのは・

後書きコーナー!!

龍「我こそは蛇遣い座アスクレピオスの使者なり・・・その呪わしき命運受け入れし者にのみ賜うべきは 毒蛇の牙に秘められし高き天と深き地獄の力なり・・・されば愚かなる者共に鉄槌を打ち下ろせ 荒ぶる神魔の怒りを以て！」

スネークジエノサイド  
蛇殺し!?

龍「死ぬ！」

ぎゃあああああああああああああああああああ!!

ナ「何をしているんですか・・・馬鹿ですか？」

龍「ここにいたこいつが悪い」

ひでえ・・・。

ナ「さすがですね、もう再生しましたか」

いや・・・3回死んだ。(気分的に)

龍「さて、感謝コーナーだ」

スルー!?!え、えっと夜神様、メガネ様、ありがとございます!!



ちよっ!?!それは洒落になって・・・ぎゃあああああああああ  
あ!!

ナ、では・・・次回も頑張るそうなので、次回もゆっくり待って  
ください」

第20話 神に祈る者、神を敬う者、神を知らぬ者、 神を罵る者が勝者になっ

今回も大分遅くなった上に駄文・・・もう何も怖くない。

さて、今回も中途半端ですが、楽しんでいただければ幸いです！

数話書いてからまた異変です。

宴会から数日。

今日は幽々子から呼ばれていたため、さっそく逝く事にした。  
ん？字が違う？別の意味ではあってるから大丈夫だ。

『大丈夫ではないと思いますが』  
「気にするな」

ということに到着した。

「妖夢、幽々子はあるか？」

「はい、呼んできますね」

「ああ」

どうやらまだ寝ているらしい。

もう昼なんだが？

そう思いながらに待っていると、

「ちよっ！？幽々子様！その格好でうろつかないで下さい！！龍斗  
さんがいるんですよ！！」

「ええ〜いいじゃない、別に減る訳じゃないんだし・・・」

「駄目です！きちんと服を着てください」

何で何も着てないんだ？

いや、直接見たんじゃない、会話で確定したんだが。  
それよりも、

「さっさと服を着てくれ、別に急いでいない」

「そつ？ならそつさせてもらつわ」

気配が遠くに行つた。

おそらく着替えにいつたんだろつ。

妖夢も苦勞しているな・・・。

「はあ・・・すみません、幽々子様が・・・」

「いや、気にしていない、そついえば妖夢は決まつたのか？頼み事は」

「え？ああ・・・はい、それは幽々子様の分が終わつてからお願いします」

「了解した、大抵の事なら大丈夫だ」

あの眼からして・・・修行っばいがな。

「お待たせ」

どうやら着替え終わつたらしい。

「で？頼み事は決まつたか？」

「ええ、紫に聞いたら料理が得意だそつだから・・・私が満足するまで作つてくれるかしら？」

「ああ、いいぞ？それでいいんだな？」

「ええ」

それぐらいなら・・・少しキツイだけだ。

「大丈夫なんですか？」（小声）

「ああ、大丈夫だ」（小声）

どつやら相当心配しているらしい・・・まああの食欲を見ている身では心配にはなるよな。

「大丈夫だ、沢山食べるやつは他に居た（スバルとかエリオ的な意味で）」

だから早く確実に作る事が可能だ。  
いざとなれば分身すればいいし。

本来分身ってこんな使い方するためのもんだったか？違う気がする・・・まあいいか。

「じゃあ台所を借りるぞ、材料はあるからな」

「え？」

王の財宝（宝庫）にしまつてある。

ん？ルビがおかしい？いや、どこもおかしくはない。

「では・・・頑張つて下さい」

「そこまで酷いか？まあいい・・・全力で挑むさ」

さて、包丁も投影で一番いい物を使うか。  
まな板とかはここにあるしな。

「・・・久々だな、ここまで頑張るのは」

『そうですね、エリオやスバルさん以来ですからね・・・どつやらそれ以上の可能性はありますが』

「そうだな・・・まあそれでも頼み事は完遂させてみせるさ」

そう言いながら料理を作り始めた。

出来た傍から持って行き、幽々子に持っていくと、

「まだ足りないわ」

と言われ、その倍を持って行くと、

「まだ足りないわ・・・私を満足させたければその三倍は持ってきなさい!!」

「何処の慢心王だ」

結局百人分くらい作った気がする・・・疲れたな。

「ふう・・・これで満足か？」

「ええ、ありがとう、感謝するわ」

「いや、詫びだからな・・・まあ満足してくれて助かったよ、さすがに後百人分は作れそうに無いからな」

まあ十人分くらいなら作れそうだが。

「さて、次は妖夢の番だ・・・何が望みかな？」

「私は・・・剣の修行をつけて下さい」

「それでいいんだな？」

「はい、少しでも強くなりたいので」

強くなりたい・・・か。

「何故か聞いても？」

「自分を貫き通すため・・・護りたい人を護るためです」

「・・・そうか」

その理由なら十分だな。

「了解した、なら今からか？」

「はい、出来ればですが」

「クク、大丈夫だ、さて・・・始めようか」

「はい!!」

こうして妖夢との修行が始まった。

剣を振るう。

そのたびに相手が必死に避けているのが分かる。

ガキーンッ!

相手の剣を受け止める。

「妖夢、そんなんじゃ駄目だ、隙だらけだぞ？」

「くっ!!」

妖夢は体勢を立て直すために後ろに下がった。

「はぁああああ!!」

後ろに下がった瞬間、刀を構え直し、向かってきた。構えは中段・・・だが、狙いは・・・

「下段だな」

「なっ!？」

妖夢の攻撃を受け止める。

これは止められないと思っていたのか、隙が出来る。

「そら！隙だらけだ！」

――閃鞘・八点衝改――

刀で八点衝を放つ。

「くっ！！！」

どうやら少しだけ避け切れなかったらしい。

「ふむ・・・もう少しフェイントを入れてみたらどうだ？愚直すぎるぞ？」

「はいっ！」

まるでスポンジのように吸収していく・・・教えることの出来る立場じゃないが・・・楽しいな。  
もう少し行けるか？

「もう少し速くなるぞ？」

そう言いながらスピードを上げる。

「くっ！」

妖夢は必死に避けている。

「避けるだけか？」

「くっ・・・はあっ！！！」

こっちの攻撃が少しゆるくなった瞬間を狙って、反撃をしてきた。

「効かん」

「まだまだああああ!!」

――人符「現世斬」――

妖夢はスペカを発動させ、踏み込みからの攻撃を放ってきた。  
ふむ、これなら……、

「これで大丈夫かな？」

――斬符「斬り伏せられし心」――

相手の攻撃に完全に合わせて斬撃を放つ。  
それは寸分の狂いもなく、妖夢に当たる。

「うう……」

「大丈夫か？妖夢」

「はい、まだまだいけます!!」

「そうか」

少し嬉しく感じるな……ここまできちんとした信念は滅多に感じられないからな。  
なら……、

「妖夢、今から認知すら不可能な居合いをする……その体で覚えて取得してみせる」

「はい!!」

「いくぞ」

――無極極零式・無――

もはや馬鹿らしくなるくらいのスปีドで居合いを行う。  
これは直撃したらしく、妖夢は倒れた。

「大丈夫なのかしら？」

「ああ、急所ははずしているし、そもそも非殺傷設定だ」

「ならいいわ、でも聞かせて頂戴・・・何故認知すらできないスปีドで斬ったのかしら？」

「簡単だ、妖夢の成長具合に期待しているんだ・・・間違いなくあの子は強くなる」

あんなまつすぐな目をしたやつは特にな。

俺はあんな眼はできやしない・・・まあ少し濁っているからな。

「だからこそ使った・・・多分あのスปีドの十分の一くらいのスปีドなら少し修行したら使えるようになるさ」

そう思ったからこそ加減はしなかった。

加減は失礼だからな。

といつてもまあ・・・楽しかったのもあるのかもな。

「なら妖夢が起きるまで時間があるのね？」

「ああ、多分1、2時間くらいは起きない」

疲れもあるだろうしな。

「さて、何をお望みで？」

「お話かしら？」

「まあだろうな、で？内容は？」

「そうね・・・あなたは死についてどう思うかしら？」

死？

「私の能力は死を操る程度の能力・・・死についてはよく考えさせられるのよ・・・だからあなたの意見を聞きたいと思ったの」

「そうか・・・」

死・・・か。

「ある意味俺も死は近いからな」

「どういうことかしら？あなたに私の能力が効かないのとの関係はあるのかしら？」

「そうだな、俺も使えるのもあるが、ある意味俺は生物ですらない」

いや、一応真祖は生物になるのか。

「まあ俺は普通じゃないんでね、常識なんて通用しないさ」

「そう」

「ああ、それに俺は一度死んでいる、死にはある意味近く、そして遠い・・・だからこそだが、死は万物全てにあるものだと思っている」

「全て？」

「ああ、まあある意味幽々子より性質が悪いからな・・・この眼は」

まあ借り物ではあるがな・・・この直死の魔眼は。

「まあそれぞれで解釈が違うからな・・・俺の場合は死を与える側になっているからな、余計に理解しないといけないから・・・だから

ら俺はたとえ悪と言われようとも、エゴでも背負い続けると決めたんだ・・・今までずっと死を見続けたからなおさらな」

慣れてはいけないんだろうが・・・慣れた。  
慣れてしまったんだ。

「そう、龍斗もきちんと考えてるのね？」

「クク、まるで俺が何も考えてないみたいじゃないか」

「そう？（恋愛事に関してはそんな気がするわよ？）」「？」

何故か別の事で責められそうな気がする。

「うう・・・」

「ん？起きたか？妖夢」

「あっ・・・!？」

「どうかしたか？」

「こ、これは一体!？」

「ん？」

何処か変か？

ただ膝枕をしているだけなんだが？

「・・・（鈍いのね）」

「し、失礼しました!!すぐにどきますので!!」

「いや、もう少しゆっくりしている、疲れてるだろ？」

「は・・・はい・・・／／／（余計に休まらないです!）」

何故か妖夢の顔が真っ赤なんだが・・・熱か？

「!?!?!」

「む？熱が少しあるか？」

「（これは救いようがないほどに鈍いわね・・・苦勞しそうだから）」

「

確か熱を測る時は額と額をあわせるのが効率がいいそうだからな。そう思っただけで行動に移すと、妖夢がまた寝てしまった。ふむ、やはり疲れていたらしい。

「さて、今日はもう帰るよ」

「あら、もう帰るの？」

「ああ、あまり遅くなると霊夢がうるさいからな」

まあそれが何だか近づいてる気がして嬉しいのだが。

「まあ次もまた来るさ、妖夢にはまた修行をしようと言ってくれ、自分のためにもなるからな」

「ええ、伝えておくわ」

「ああ、頼む、次もまた料理を作っけて持ってくるからな」

「任せなさい!!」

急にやる気が・・・まあいいか。

「じゃあな」

「ええ、また会いましょう」

こうして神社に戻った。

食料の事を話したら霊夢が本気で怒ってきたのに驚いたのはまったくの余談だ。

あれは怖かった。

第20話 神に祈る者、神を敬つ者、神を知らぬ者、神を罵る者が勝者になっ

後書きコーナー！

龍「遅い」

ナ「死になさい」

ストレートに酷いな！？

龍「さて、感謝コーナーだ」

八雲 葵様、雨季様、夜神様、Jam様、ケルベルス様、メガネ様、七夜士郎様、感想ありがとうございます！！

龍「今回も駄文ですまない、精進しようとしても空回りしていな」

ナ「この作者にそれを期待しては駄目です」

ひでえ・・・挫けそう。

ナ「前書きで死亡フラグ建ててるので拾ってください」

龍「それもそうだな」

ひでえ・・・遠回しに死ねと？

ナ「遠回しに言ったつもりはありません」

龍「まっただ」

・・・orz

龍「次回はおそらく霊夢と魔理沙と咲夜との話だろう」

うん。そうだね。

ナ「次はもう少し早く書き上げなさい」

はい、頑張ります！

龍「ではな、次回も頑張らせる」

ナ「まあ期待は程々にのんびり待ってて下さい」

では！また次回！・・・なんで宴会の話になると感想が増えたんだろっか？

龍「宴会だからじゃないか？」

**第21話 奇跡を起こせる条件は・・・諦めない事だ(前書き)**

はい、お久しぶりです。

少し(本当に)マシになってきたような気がするので再開しました！  
まったく触れてなかったもので今まで以上にグダグダですが、楽しんでいただけたら幸いです。

今回は初の前編です！

## 第21話 奇跡を起こせる条件は・・・諦めない事だ

どうやら夢を見ているようだ・・・。

何故かって？だって・・・

「どきなさい！そこにいると龍斗が見えないじゃない！」

「いやだぜ！私を退けたければ力づくで来い！」

「・・・覚悟はいいわね？」

「げっ！咲夜もいるのかよ・・・」

何故か不穏な雰囲気になっているからだ。

「うん、夢だな」

『マスター・・・ところがどっこい夢じゃありません！現実・・・これが現実！！』

「黙れ」

何故カ○ジ？

「さて、現実逃避はやめておくか、おい、霊夢、魔理沙、咲夜」

「・・・何！？」「」

「何故ここにいる？霊夢は分かるが・・・ほかの二人は何故だ？」

「それは・・・」

かくかくしかじか

「なるほど」

要は暇だったから来たと。

まあ魔理沙は分かるが・・・咲夜が暇なのは信じられんな。

「ええ、お嬢様が休暇をくださったので」

「で、する事もないから来たと？」

「ええ」

ふむ、ならついでだ。

「お前達の願いを聞こう、約束だしな」

異変の時の。

「そうね・・・なら料理を作ってくれるかしら」

「霊夢はそれでいいのか？」

「ええ、今はそういう気分なのよ」

なるほど。

「私は魔法の研究の手伝いをしてほしいんだぜ！」

「は？」

「龍斗はそのくらいの知識はあるんだろ？」

「まあ・・・少くくは」

第5魔法とかなら可能だが・・・あつ、魔理沙と相性いいのか？あれは破壊とかもできるしな。

いや、まあ教えはしないぞ？

教えてもできるとは限らないしな。

「まあできる範囲でならいいだろう」

「よし！ー！」

「咲夜は？」

「私は……」

「どうやらまだ悩んでいるらしい。  
なら、」

「2人分が終わってからもいいぞ？」

「そう言っと、」

「いえ、決まったわ」

「そうか」

「どういう内容なんだろうか？」

「執事の仕事を増やさない」

「は？」

「そんなことでいいのか？」

「ついでにいうと、今は週3回である。」

「ええ、週5回にしないさ」

「むう……異変のときは？」

「異変を優先で」

「なら私用は？」

「なるべく仕事優先で」

「……了解」

「まあそれで済むならいいか。」

「さて、じゃあまずは霊夢からか？」

「いえ、私は夕食の時でいいわ」

「そうか？なら魔理沙だな、で？何を聞きたい？」

「コレの作り方なんだ」

「む？惚れ薬？」

「ああ！今実験中だったんだけどな・・・少し不安だったから聞こうと」

なるほど・・・だが惚れ薬は・・・あつ、あれがあつたか。でも、

「惚れ薬を誰かに使うのか？」

「え、あ、ああ」

「ふむ・・・なら言うておく、やめておけ」

「何故？」

「理由は簡単だ、そんな事して惚れられて・・・本当に嬉しいのか？その感情は無理やり作り出した感情だぞ？」

「!？」

「分かるなら研究でとめとけ」

「あ、ああ」

ふむ、納得したか。

「さて、一応コレがレシピだが・・・ほかに何かないか？」

「ならこの魔力増強薬を・・・」

「それはこれを・・・」

「まったくついていけないわ」

「まったくね」

その後も話は弾んだ。

それから大体2時間。

「これで大分進む・・・感謝するぜ！」

「ああ、気にするな、これくらいなら暇なときにもまた協力する」

「本当か!？」

「ああ」

そう言うと、相当嬉しかったらしい。

飛び跳ねている。

「さあて、それじゃあ霊夢・・・料理は何かいい？希望を聞こう」

「そうね・・・それじゃあ・・・前龍斗が言ってた海老チリっていうのを」

「了解」

海老は在庫があつたかな？

・・・あつた、まだ余裕がある。

さっそく作るか。

「咲夜、すぐにできると思っから皿を出してくれ」

「分かつたわ」

咲夜には頼んだから・・・、

「魔理沙は海老を剥くのを手伝ってくれ」

「了解だぜ！」

よし、これですぐに終わるな。

そんなこんなで完成。

「さあ皆で食べ、それくらい作っておいた」

「さすが龍斗だぜ！」

「まったく・・・現金ね」

「食べないのなら私が全部食べるわよ？」

「食べないとは言っていないわ」

「コラコラ、喧嘩するな」

「してないわ」

ならいいが。

食事は楽しくが一番だからな。

さて、幽々子じゃないからコレで十分なはずだな。

「さて、少し出てくる、すぐに戻るから安心してくれ」

「・・・分かった(わ)(ぜ)」「」

そういつつ、俺は外にでた。

「紫」

「何かしら？」

「また外来人か？しかも無駄に力があるじゃねえか」

「ごめんなさい、屑だったから食べちゃおうと思ってたのよ」

「ああ、まあいい、場所は分かる、処理はしよう」

「ありがとう」

「何、運動だよ・・・食後のな」

どうやら場所は魔法の森みたいだな。

アリスに何もなければいいが。



わじ。

「誰だあ？俺の邪魔をしようとする愚か者は？」

「さあ？愚か者なんて知らないわ、知る必要もない、あなたは私にここで倒されるのよ」

どうやらダメージはあまり無かったみたいね。

「ああ？まあいい・・・さっそく確かめるとしようか！-！」

――冥府「地獄のロンド」――

スペルカード！？

どうやらただの外来人じゃないみたいね。  
なら、

――戦符「リトルレギオン」――

相手の弾幕は少し濃い程度・・・このくらいならこれで・・・それに準備もあるし。

「ひやははははは！無駄だ無駄だあ！その程度で止められると思っ  
てんのかよ！-！」

どうやらまだダメージはないみたいね・・・それにこの弾幕・・・  
追尾するみたい。

それに数が少ない代わりに威力が高いみたいね。  
どうりで消せないはず。

でも・・・

「もう殆ど威力はないわ、これで消えるわね」

「――呪符「上海人形」――」

上海からレーザーを放たれる。

「チツ！」

これで弾幕は完全に打ち消せた+相手にダメージを与えたみたい  
ね。

「うぜえんだよ！」

「――獄符「ケルベルス」――」

次は番犬？まったく・・・芸がないわね。

でも数は少ないから・・・威力が上がっているか、何か隠している  
みたいね。

「――偵符「シーカードールズ」――」

上に大量に人形を向かわせ、そこからレーザーを放つ。

「うぜえー！！」

「――蛇符「ウロボロス」――」

次は蛇？節操がないわね。

でもまあ・・・



――獄符「黒き獣」――

何・・・あれ？

どう考えてもあれは人の使って良いものじゃないじゃない！！  
何とかしないと！

――人形「レミングスパレード」――

爆弾を積んだ人形を大量に向かわせる。

これで少しでも傷ができればいいのだけれど。

「ひやはははは！無駄だ無駄だ！その程度じゃビクともしねえよ！」

「はぁ・・・やっぱりね」

でもまぁ・・・目的は十分に果たせたわね。

じゃあ後は任せたわよ？龍斗。

「ああ、後は任せろ」

後ろから頼もしい声が聞こえた気がした。

>アリス Side end<

>龍斗 Side<

急いだ結果、何とか間に合ったが・・・何故敵の姿がハザマなんだ？  
性格が違うみたいだからハザマ本人ではないだろ。

それにあれは黒き獣・・・やつの目的の出来損ない。

はぁ・・・安請け合いでするんじゃないな。

まあ信頼されているみたいだから、それに答えないと。

「さあて、零崎を始めようか」

まだあまり実感のない名だが・・・何故かしっくりくる。  
やはり前世での名だからだろうか？  
まあいい。今は目の前のやつを処理するだけだ。

「てめえ・・・邪魔すんじゃないやねえよ！」

「黙れ・・・俺の大切な者を傷つけた罪は重い・・・ここで死ぬ」

――結界「無限の絶望」――

俺の深層心理・・・固有結界をスペカにしたものを発動させる。  
この中では相手に権利はない。  
ただ・・・『剥奪』されるのみ。  
こっちでいう耐久スペルだな。

「な！？俺のスペカが！！」

「さあ・・・死ぬ覚悟はできたか？」

「オイオイ、冗談きついで・・・あいつから手を出してきたんだぜ  
？なら正当防衛じゃねえか！」

ああ・・・確かにそうだろうさ、だがな？

どこかのライダーの台詞を借りるなら、

「ここにいたお前が悪い、俺に目を付けられるような事をしたお前  
が悪い」

「・・・理不尽だなあオイ」

「よく言われるよ」

もう言われ慣れたよ。

「でもまあ・・・テメエはここで死ぬんだから関係ねえがなあ!!」  
そういいながらやつは蹴りを放ってきた。

「ちっ！やつの言ってた通りか」

「はあ？別に黒幕がいるみたいだな」

「喋りすぎたか・・・ここは引くべきか？」

「逃がすとも？」

逃げる権利を『剥奪』する。

これで逃げる事はできない。

「逃げられない・・・何をした！」

「『剥奪』しただけだ、別に不思議ではあるまい」

「テメエ・・・それがどれだけ難しいと思っただやがんだ！」

できるのだから使う、手段は多い方がいい、ただそれだけだ。

「ちっ！ならテメエを殺してから戻るか」

そういいながらナイフを構える。  
なら、

「それなら俺も・・・お前を殺す」

クロスをフルドライブで開放する。

ただしモードは2nd。



相手に獣状のオーラをぶつける。

「ガッ！ゆるさねエ！許さねえぞ！テメエ！！」

「誰がお前の許しをこうかよ！！」

「フエンリル」

片方の銃をでかく変化させ、相手に向かって連射する。

「いつまでもやられてたまるかああああ！！」

「蛇翼崩天刃」

思いつき蹴り上げを放ってくる。

ちっ、避けるしかないか。

「ハア・ハア・クソッ！クソッ！……第666拘束機関開

ソウル・オブ・ランゲージ

放……次元虚数方阵展開！コード〓S・O・L……碧の魔道書

プレイブル

起動！」

碧の魔道書だと！？

なんでやつが……いや、姿があれな時点でその可能性があったな。技も同じだし。

なら……、

「たく……なんでまたてめえみたいなやつと戦わねえといけねえんだよ……だが、見せてやるよ……蒼の力を！」

右手が変化する。

久々だな……コレ使うの。

「第666拘束機開放、虚数方阵展開！・・・蒼の魔道書起動！  
・・・いくぞ！この蛇野郎が！」

蒼の魔道書を起動させ、相手に向かう・・・目の前の敵を・・・俺  
の護りたいモノに危害を加えるモノを排除するために・・・。

第21話 奇跡を起こせる条件は・・・諦めない事だ(後書き)

後書きコーナー！

龍「大丈夫なのか？」

ナ「おや、龍斗が心配するとは珍しい」

確かにそうだね。

龍「まあ・・・状態が状態だしな、うつ病は洒落にならん」

ハハハ、大丈夫だよ。

今は少しだけ落ち着いてるし、だから執筆してるんだし。

龍「お前の場合は執筆して気を紛らわせてるだろ」

ナ、ナンノコトカナー。

ナ「はあ・・・さて、感謝コーナーです」

ケルベルス様、メガネ様、七夜士郎様、夜神様、感想ありがとうございます！  
ざいます！！

龍「次は後編、オリジナルの異変の導入編だな、といってもまだ異変は始まらないが」

ナ「オリジナルの異変が終わる前にアンケートするそうです」

まあ簡単なやつですけどね。

龍「内容はその時発表する、気長に待っていてくれ」

ナ「まあ次の更新は急ぐそうです、今まで休んだので」

頑張ります！

龍「そのまえにネギまだがな」

ソウダッター！

龍「・・・ではな」

無理やりめた！？

ナ「では」

第22話 生きているかぎり、誰もが戦士なのだ、戦士に立ち向かえない敵など

今回も遅くなった上にこの駄文・・・絶望した！文才のなさに絶望した！！

・・・失礼、取り乱しました。

というよりこのサブタイトルの台詞知ってる人いるんですかね？

周りの人は知らないんですよね・・・マイナーなのかな？

第22話 生きているかぎり、誰もが戦士なのだ、戦士に立ち向かえない敵など

フレイブル  
蒼の魔道書を起動させたのはいいが・・・、

「さて・・・どうするかな」

「何言つてやがんだ？」

やつがもし誰かとリンクしてやがったら殺すのに直死が必要になる  
んだが・・・調べるか。

――グラム・サイト  
妖精眼発動――

相手の状態を見る。

ふむ、どうやらリンクはないみたいだ。

これなら十分潰せる。

「クロス、モード1nd」

『了解』

ナイフに変え、構える。

「グダグダうつせえぞ！とつととおつ死ねや！」

そう言いながら相手が蹴りを放つ。

これくらいなら・・・

「これで十分か」

こちらも蹴りを放つ。



「む・・・やはりしぶとい、どこかのGみたいだな」  
「テメエ・・・」

劣化以下だな。

ハザマはもつと強いはずだからな。

少なくとも俺みたいなやつに禄に攻撃できずに負けるようなやつではないはずだ。

「さて・・・もういいか？」

「がっ・・・何がだ」

「テメエの茶番に付き合うのがだよ」

「何だと？」

「お前は下っ端だろ？情報も大して得れなかったしな」

コイツはたぶん最弱なんだろうさ。

「だからさっさと終わらせる・・・覚悟はできたか？答えは聞いてないが」

「テメエ・・・馬鹿にすんじゃないやねえ！！」

「フェローチエ荒々しく！」

水が下から湧き上がる。

「なっ！？」

「グラツイオーソ優雅に！」

その水が凍る。

「ば・・・馬鹿な！？」

「終わりだ・・・グラランドファイナーレ！」

その氷が砕けた。

「これで終わったか？」

『はい、魔力反応、生命反応共に消滅、完全沈黙完了です』  
「そうか」

さて、じゃあ死体処理してから帰るか。  
そう思っていると、

『マスター！』

「どうした？」

『魔力反応です！』

「やられてしまいましたか・・・まあ別に構わないのですが」  
「誰だ？」

「その質問には答えかねますが・・・一応名乗るならルイとでも  
ルイか。」

「で？お前の目的は何だ？」

「ただの塵回収です、あなたと戦闘を行う気はありません」  
「逃がすだけでも？」

「いえ、なのでさよならです」  
「なっ！？」

もう準備してやがった！

「クロス！」

『すいません・・・見失いました』  
「そうか・・・」

魔力反応がなかった・・・レアスキルか何かかな？  
だが今はそれはおいといて、

「戻ろう」

『そうですね』

じゃないとあいつらがうるさい。

「アリスには礼を言わなきゃな」

『そうですね、ついでに何か頼み事でも聞いてみてはどうでしょう？』

「それはいいな、なら実行しよう」

そう思いながら一旦アリスの家に向かった。

「で、ここに来たの？」

「ああ、で、何か頼みはあるか？俺のできる限りの事をしよう」

「・・・考えておくわ、今はゆっくりお茶でも飲みましょ」

「そうだな」

その後、人形の話や、ほかの魔法について話し合い、盛り上がった。  
何故かずっと上に上海がいたがな。

『（すごく懐かれたようですね・・・魅了A+くらいあるんじゃないでしょうか）』

「何かあったか？クロス」

『いえ何も』

何故か失礼なことを考えられてた気がした。

「さて、もうそろそろ戻るよ」

「そう、次は何時来るのかしら？」

「そうだな・・・今作ってる人形ができたら言ってくれ、その時に来るとしよう」

「わかったわ（すぐにでも完成させないと！）」

何故かやる気が上がっている？

『（マスター・・・いつその事刺されたらいいと思うのは何故でしょうか・・・刺されたとしても気づかないのでしょうか）』

「？じゃあな、また会おう」

「ええ、また会いましょう」

アリスの家を出て、神社に戻った。

「で？何処に行ってたのかしら？」

「そうね・・・それは気になるわ」

「早く正直に言った方が身のためなんだぜ？」

「・・・（御免なさい、言い辛かったのよ）」

帰ったら修羅が三人いた。

まあ理由を言えば許してもらえると思い、話したが、

「そう、アリスの家に行ってたのね？（後でアリスとはO H A N A S H I しないとね）」

「そうか・・・アリスの家に行ってたのか（アリスもライバルか・・・やれやれなんだぜ）」

「・・・（魔女にナイフは効くかしら）」

「はぁ・・・（メイドと霊夢の考えが一番物騒ね）」

今すぐアリスに逃げろといいたくなかったのは何故なんだろうか。

『（アリスさん！超逃げて！！）』

その後、何処からか悲鳴が聞こえたような気がした。

第22話 生きているかぎり、誰もが戦士なのだ、戦士に立ち向かえない敵など

後書きコーナー!!

龍「遅い」

ナ「速さが足りませんね」

うん、ごもつともで。

龍「まあ・・・仕方ないな、お前だし」

ナ「そうですね、この作者ですし」

お前ら2人そろって酷いな。

龍「知るか」

ナ「まったくです」

ORZ

龍「さて、感謝コーナー」

ナ「メガネ様、ケルベルス様、雨季様、夜神様、感想ありがとうございます」  
ざいます」

次回こそ早めに投稿できるよう頑張ります!!

龍「まあまだ日常編だ、もしかしたら番外編で何か書くかもな」

ナ「あまり期待せずゆっくり待っていてください」

もしかしたら後書きにゲストを呼ぶようになるかもです！まあ・・・  
希望があればですがね！

龍「ではな」

ナ「では」

ではでは！

第23話 俺たちは生きてるだけで幸せなんだ（前書き）

どうも！最近はどうどん更新スピードが遅くなる一方で・・・すいません（汗）

月姫の漫画は名作。異論はないと思いたいですね。

さて、もう少ししたら異変です。

その異変が永夜抄なのかオリジナルの異変なのかは・・・こつ御期待？

## 第23話 俺たちは生きてるだけで幸せなんだ

あの襲撃から数日。

今は紅魔館に来ている。

まあ勿論目的は執事の仕事をするためにきたんだがな。

「さて、今日は何をすればいいのやら」

『今日は図書館の掃除、昼食、夕食の準備、フランさんの遊び相手だったと記憶しておりますが?』

「そうだったか」

大変だろうが・・・咲夜に比べたらマシか。

アイツ・・・この倍以上の仕事をこなしているからな。

「まずは図書館からだな」

『そうですね』

今日は本の整理だけだったか?なら楽なんだが。

『それで終わればいいですが・・・(マスターはいらないうところでフラグを建てますからね・・・しかも勝手に回収しちゃうというたちの悪さ)』

何故だろうか・・・そこはかたなく馬鹿にされた気がする。

「じゃあ移動するぞ」

『了解です』

約束の時間まで残り少ない・・・時間止めて進むか。

そう思いながら、時を止め、向かった。

「で？今日は本の整理だけで構わないか？」

「少し聞きたい事があるのだけど・・・いいかしら？」

「なんだ？別に構わないが」

そう言うと、パチュリーは、

「そう、なら聞かせてもらおうわ・・・魔理沙に薬の作り方を教えたのは貴方よね？」

「ああ、聞かれたから答えたまでだ」

そう言うと、肩を少し震わせ、

「そう・・・あの薬・・・私も作ろうとしてたから参考になって助かったわ・・・そこは感謝するとして、魔理沙の惚け話でやたらと貴方の事を話されるのだけど？薬の話の後に」

「は？」

惚け話ってなんだ？

どんな話だ？

『（リアルでいつてるんですかね？なら・・・哀れすぎます）』

「・・・そう（こういうやつだったわね・・・はあ・・・何で龍斗を好きになったのかしら）」

『（世の中には惚れたら負けって言葉があるんですよ？）』

「・・・まさしくその通りね）」

「本はこれだけか？」

「ええ」

何故か二人？が話し込んでいるみたいだったから本の整理をしていた。

うん。相変わらずカオスだな。

本の題名。

―混沌・これが本当の混沌だ！初級編―

―これで君も厨二病！厨二病の全て・・・上級者編―

―黒魔術版くそみそテクニク・これでどんなノンケでもイチコロ

！―

ナニコレ怖い。

特に最後のやつ。

絶対に読みたくない。

「どうかした？」

「いや・・・この本は別の意味ですごいな」

「そう？まあ・・・普通の人は読めないでしょうね」

普通じゃなくても読みたくないんだが？

「じゃあ終わりだな、次は昼食か」

「そう、楽しみにしてるわ」

「なら頑張らないとな」

今日は何を作ろうか。

そう思いながら厨房に急いだ。

「で、悩んだ結果がコレ？」

「ああ、何かいけなかつたか？」

「いや・・・料理自体はすごく美味しいからいいのだけれど・・・この旗とか飲み物がオレンジジュースとか完全に喧嘩売ってるわよね？買うわよ？」

「？」

「確実にコレって外の世界でいう『お子様ランチ』よね！？」

「そうだが・・・何か？」

「私が子供だって言いたいのかあああああああああああ！！！」

そう言いながらレミリアはグングニルを投げてきた。

「あぶないな」

「うがー！当たりなさいよ！」

「当たったら痛い」

「痛いようにしてるから当然でしょ！！！」

『（普通の人なら即死ですよ）』

「大体普通の料理にしなさいよ！なんでお子様ランチなのよ！」

「フランは喜んで食べてるぞ？」

「このオムライスおいしー」

すごく喜んでるぞ？旗も好評だし。

「私は普通のオムライスなら食べるわよ！この如何にも子供が食べます みたいなのが気に入らないの！」

「お子様ランチは大人でも食べるぞ？」

食欲が少ない人とか。

というか前世では女友達とファミレスとか行くと毎回お子様ランチ食べてたな。

何でだろうか？理由を聞いたら顔を紅くしながら「ちょ、ちょっと

お腹すいてなくて・・・／＼／＼」とかいってたしな。

『（鈍感な前世からでしたか・・・まあ余裕がなくなる前からみた  
いですが）』

「お姉様」

「何！？今忙しいの！用件は早く！」

「うるさいよ？静かにしよう？食事中だよ？」

「お嬢様・・・お静かに、お食事中です」

「なっ！？」

いや、常識だろ？

「あなたに常識を言われるなんて・・・orz」

「何故落ち込む」

『マスターが非常識の塊だからでしょうに』

「後でO H A N A S H Iな？」

『・・・スイマセンデシタ』

「逃げるなら・・・いや、もう遅いか」

『ウンダンドロドーン！』

「はぁ・・・まあいいわ、今回は許すけど次はないわよ？」

「怖い怖い、まあ気をつけるとしよう」

「・・・腑に落ちないけどまあいいわ、後でフランの相手よろしく  
ね」

「ああ、遊び相手くらい楽にこなしてみせるさ」

「わーい！」

フランが抱きついてきた。

よほど嬉しいらしい。

嬉しそうな顔を見ているとこちらも嬉しくなってくる。  
というかレミリアはクロスこいつの喋りはスルーなのな。

「じゃあ今日も弾幕ごっこだな？」

「うん！今日こそ勝つよ！」

「そう簡単に負けてはやれないな、今日も全力で相手しよう」

「じゃあ行くよー」

ー 禁忌「フォーオブカインド」ー

「いきなりか」

「うん！お兄様は簡単に壊れないもん！全力でいっても大丈夫だよ  
ね？」

「ああ、本当に兄妹みたいだな・・・兄妹ってのは遠慮しないもん  
だ、全力で来い、その全てを受け入れよう」

「「「「じゃあ行くよ！！」「」「」」

その後はフランが全てのスペカを、俺は三枚のスペカで対抗し、二  
時間に及ぶ戦闘は終了した。

勿論俺の勝ちで。

まだ負けてやる訳にはいかないからな・・・兄として負ける訳には  
いかないからな。

実はレミリア達が居る状態で始めたため、巻き込まれたやつが4人  
いて、レミリアが途中で乱入してきたのは・・・気にしない方向で。  
咲夜が血の海（鼻血）に沈んだりしたのもスルーで。

唯一まともだったのは案外小悪魔なのかもしれない。

第23話 俺たちは生きてるだけで幸せなんだ（後書き）

後書きコーナー！！

龍「遅すぎるんだよ！」（蹴り）

ぐはっ！！すいませ・・・ん。

ナ「まったくです、もう少し早くできないのでしょうか？」

う・・・これが今の限界です。

龍「なら精進あるのみだな」

ナ「キリキリ働きなさい」

ひでえ・・・精進あるのみなのは認めるけど。

龍「当然だ、さて・・・感謝コーナー」

ナ「Jam様、夜神様、メガネ様、感想ありがとうございます」

次回かその次くらいで異変に入ります。

一応ニパターン考えていますが、多分その場のノリになると思いますが。

龍「駄目人間め」

褒めるなよ。

ナ「駄目ですね・・・手遅れです」

で、では！次回も頑張りますのでゆっくり待っててください！

龍「ではな」

ナ「では」

**第24話 自分を護れないヤツに他人を護る事は出来ない(前書き)**

今回から異変です。

結果的にオリジナルの異変はこの異変に少し導入する感じになりそうです。

今回も駄文ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

## 第24話 自分を護れないヤツに他人を護る事は出来ない

最近は妙に月が満月続きだ。

どうやら異変らしい。

霊夢は、

「月見酒に飽きたわね」

とかいつてたからもうそろそろ動くかね？

そういえばどうやら今回は俺は咲夜とレミリアの2人と一緒に行くことになった。

なんでもじゃんけんで決めたのだとか。

・・・そんなに嫌か。

『(駄目ですこのマスター・・・早く何とかしないと!)』

ん？何故かバカにされた気がする。

(気のせいですよ、早く向かいますよ・・・怒られますよ?)

それもそうだな。

「さて、今回の装備はこれで大丈夫かな？」

『寧ろ多すぎでしょうね、スペルカードを50枚も持っていく必要はないですよね?』

「何があるか分からんからな」

(確実に転生者用イレギュラーだよ、まあ・・・持ってて損はないだろうけど)

(いざとなれば俺達に任せな・・・全員潰してやんよオ)

心強い事で。

そう思いながらも集合場所に向かった。  
遅れるとうるさそうだ。

「遅いわよ!」

「む」

「5分前行動ですよ、お嬢様」

「私達より早く来なさい」

「無茶言つなよ・・・集合時間の1時間前とか無理だからな?まだ俺寝てたからな?」

「文句は受け付けないわ!」

「酷いなオイ」

どこの暴君だ。

「ああ〜さつさと進むぞ、じゃないと夜を終わらせられないだろ? 咲夜が原因でも月を何とかしたら戻すんだろ?」

「え、ええ・・・わかってたのね」

「当たり前だ、同じ能力を持っているのなら余計にな」  
時を操れるなら造作もないだろうさ。

「さすがに満月ばかりだと飽きるのよ、いや、満月の方が嬉しいのだけど」

「だろうな」

俺も満月の方が力が出るからな。

『(要は今のマスターはおそらく最大で90%くらいまで出せそう

ですねって事ですねわかります(´)

90ってどこか・・・これでも全力を出せないんだな。  
早く同化を終わらせないとな。

「さて、行くわよ」

「畏まりました、お嬢様」

「・・・あなたが言う違和感だらけなような違和感がないような・・・微妙ね」

「そうですね、龍斗には敬語は合わないのでは？と思ってたのです  
が」

「酷いな」

『事実では？』

「よし、少し・・・頭冷やそうか」

『魔王！？』

どこからか「魔王じゃないの！？」とか聞こえたけど・・・気のせいだな。

「何処に向かうかは決まってるのか？」

「いえ、適当に・・・ですかね？」

「ええ、運命に任せれば大丈夫よ」

「ジー」

「だ、大丈夫に決まってるでしょう！！」

「そうか」

「そうよ！！」

ずっと見てたら慌てたな。

まあ咲夜が鼻から忠誠心をたらしめているが・・・スルーでOKだな。

「で、さっきの虫はスルーか？」

「スルーでいいかと」

「何故？」

「ろくな事になりません・・・早く進みましょう、出てこないうちに」

「出てこないうちにとか言つと出てくるのよ！」

そう言つとマジででてきたな。

(まるでG・・・)

(ストップだア・・・それ以上は言つな)

「さあ、現れたわ・・・そのお嬢様を渡して貰おうかしら！」

コイツは本気で言つてるんだろうか？

「現れたら・・・虫が可哀相でしょ？ 五分の虫にも一分の魂でし  
たっけ？」

「八割減ね(だな)」「」

「もしかして・・・物騒な話？」

そんなもの決まつてるだろ？

「「いえ(いや)、殺生な話」」

「良いのよ、私は人間以外には興味が無いから」

「興味が無いから心配なのですよ、人間なら食料で済むかも知れ  
ないけど、それ以下だと・・・、はあ、無慈悲にも程があります」  
「ひええ」

そういう意味なのか？

まあ・・・、

「そつちがその気なら俺もそれ相応の報いを与えよう」「ニヤリ」  
「ひい!?!」

む?今思えば幽香と一緒に相手してたやつじゃないか。  
なら・・・、

「遠慮はいらないな?」(超ドS)

「遠慮はいらないのね?」(ドS)

「そのようですね」(隠れS)

「え・・・えつと・・・お邪魔しました!」

そう言いながら奴は逃げていく。

「まあまあ遠慮はするな・・・さあ、楽しめ」

「きゃっ・・・きゃあああああああああああああああ!」

「!」

その時の状態は間違いなく見せられないよ!状態だったといえよう。  
え?いつも通り?・・・いや、そんなことは無いだろ。

「さて、十分いじ・・・相手したから・・・満足しただろ?」

「は、ハイッ!も、もうしません!!」(ガクブル)

どうやらトラウマになったらしい。

このレベルでトラウマになってたら・・・本気出したら廃人確定だな。

「さあ、先に進もうか」

「そうね、時間も結構使ってしまったことだし」

「お嬢様もお楽しみでしたよ？」

「そ、そんな事はないわ」

「そうですか」

絶対嘘だな。

なんせ一緒にアイツをいじ・構ってる時の顔がすごい笑顔だったからな。

「とりあえずは先に進むか、レミアもそれでいいよな？」

「ええ、早く終わらせて帰りたいもの」

「そうですね」

俺達はアイツリゲルを放置して先に進んだ。

第24話 自分を護れないヤツに他人を護る事は出来ない(後書き)

後書きコーナー!!

龍「遅い」

ナ「まったくです」

仕方ないね！これが俺だもの！

龍「・・・」スッ

ナ「まだですよ、まだ攻撃には早いです、まずは感謝コーナーをやつてからです」

龍「・・・そうだな」

何それ怖い。

龍「じゃあ感謝コーナーだ」

七夜士郎様、夜神様、メガネ様、感想ありがとうございます！

龍「さて、これでいいよな？」

ナ「ええ、全力でどうぞ」

ちよっ!?

龍「後、この異変（永夜抄）の途中でオリジナルの組織が出る、それが今回の敵だ」

ナ「まだまだ穴だらけですが、頑張らせますのでゆっくりお待ち下さい」

に、逃げなかつたらやられる!?

龍「さあ・・・覚悟八出来タカ？」

ナ「逃げ道は無いですよ？否定しておいたので」

さ、さすがありとあらゆるものを肯定（否定）する程度の能力・・・チートすぎるぜ！

龍「じゃあな、閻魔にあつたらよろしく言っといてくれ」

OK！映姫様に会ってくる！

ナ「ポジティブですね」

龍「じゃあな」（月落し+烈メイオウ攻撃）

で、では！また次回（蒸発）

龍「ではな」

ナ「では」

第25話 お前が死んでも何も変わらない、 だが、お前が生きて、変わるもの

今回はオリジナルの異変の導入編です。

といってもまだオリジナルの異変は始まりません。

少なくとも完全に入るのは非想天の次くらいを予定しています。

といってもあくまで予定ですが（汗）

では！今回も楽しんでいただけたら幸いです。

第25話 お前が死んでも何も変わらない、 だが、お前が生きて、変わるもの

リグルをいじ・・・倒して先に進んだんだが・・・。

「ふむ」

「どうかした？龍斗」

「いや、少し忘れ物をしたみたいだ、レミアアと咲夜は先に進んでくれ、すぐに追いつく」

「・・・わかったわ、すぐに追いつきなさい」

「了解だ」

まあ忘れ物なんてものはないんだが。

ただ・・・ずっとこっちを見学しているやつに挨拶でもしようと思っただけだしな。

「さて、ここまで来れば大丈夫だろう・・・出て来い」

「おや、やはり隠れるのは苦手ですねえ」

「お前のせいではれた」

「おやおや、私のせいですか？あなたも隠れるのは得意ではないでしょうに」

「それでもお前よりは自信がある」

こいつら・・・仲間割れか？

「はあく、別にどうでもいいでしょうに、今は目の前の獲物を片付けますよ」

「勿論」

「お前らの名前は聞かない、でも・・・お前らは俺の敵だな？」

クロスをナイフに変え、構える。

「ええ、その通りです、本来は見学だけですんだのですがねえ」

「お前の本気を見て来い……だそうだ、そのためなら手段は問わないだそうだ」

「……もし俺がお前らの誘いに乗らずにあのまま進んでいたら？」

「あの2人には仲良く死んでもらってましたねえ、それくらいしないと本気が見れなさそうですし」

「は？」

コイツは今何て言った？

「だからですねえ、貴方の大切な人を殺す……ただそれだけですよ……うわつと!？」

「ちっ」

「舌打ちとは酷いですねえ……ああ、護れなくなるのは怖いですよねえ、貴方のひとつだけの信念なんですから」

「黙れ」

「いやいや、貴方は強い、それも本来ならイレギュラーなんてものに収まるはずの無いほどの力を持っていますし……でもその程度では私たちは倒せませんし殺せませんよ？」

やつはそう言いながら余裕の笑みを浮かべる。

どうやらそれだけの自信を持つに値するほどの力を持っているみたいだな。

「早く殺るぞ……時間が勿体無い、こんな雑魚に時間は……いらぬい」

「そうですねえ……まさかここまで弱いとは思いませんでしたし……早く終わらせましょう」

片方は刀、片方は銃を構えた。  
どうやら片方は近距離、片方は中距離及び遠距離で戦うみたいだな。  
まあそんな事はどうでもいい。  
今は、

「目の前の敵を斬滅するだけだ」  
「貴方にできますかねえ！！」

やつが無造作に刀を振り回してきた。  
俺はそれを避け、

――裏無極一式・蓮華――

一閃に見える斬撃を放つ。

「その程度で当たるとでも？」  
「馬鹿か？」  
「なっ！？」

一回の斬撃に見えて十五回の斬撃だ、これがこの技の特徴。  
最大五十回までいける。

「やれやれ、小細工がお上手で」  
「どけ」  
「くっ！」

もう一人のやつが銃で援護してくる。  
どうやらあの銃は某魔術師殺しと同じやつみたいだな。  
当たると瀕死になりそうだ。

「終わりだ」

「残念、これで終わってたら生き残れないよ」

空想具現化によって魔力をまったく使わずに、同じ概念をぶつけ、相殺した。

「次はこっちだ」

――裏無極三式・白夜――

物量作戦に出たかのような圧倒的量の斬撃を放つ。さすがに避けきれないのか、相手にダメージがいく。

「つつ……どうやらまだ本気を出さないようですねえ……どうします？大切な人を片っ端から殺しましょうか？」

「……面倒だから皆殺し」

「おお、それはいいですねえ……それなら本気を見れそうだ」

皆殺し？人里のやつらもか？あの無関係な人達までもが殺されるのか？

「クロス……固有結界発動、詠唱破棄、『無限の絶望』発動」

『……了解です』

――無限の絶望――

周りが殆ど真っ暗になり、少しばかりの希望といわんばかりの光があるだけの世界が現れた。

「なるほど・・・これが全てを剥奪する世界ですか・・・楽しめそうですねえ」

「楽しむ必要は無い・・・早く殺す」

「了解ですよ」

どうやら能力はばれてるらしい。

だが、

「剥奪からは逃げられない・・・そうだろう？」

「いえいえ、能力は剥奪できないようにしているので大丈夫ですよ」

「ほう？」

「要はこの結界は無駄」

まあ対策はしてくるか。

だがな？

「能力だけしか庇わなかった自身の愚かさを呪え・・・剥奪対象」

生』『死』」

「なっ！？ガッ！！」

「ば・・・馬鹿な！その能力は生命に直接影響を与えられないはず！」

「勝手な言い掛かりだな、誰が言った？俺はあらゆるものを『剥奪』できるといったはずなんだがな？」

「な・・・に？」

「今の状態はわかるか？今の状態は生きるという事と死ぬという事を奪った、よって貴様らは生きる事も死ぬ事もできなくなった訳だ」

「人間にそんな事ができるはずが・・・」

「残念だったなア、俺は人間じゃねェんだ」

吸血鬼なんだよな。

「さア・・・覚悟は出来たか？」

俺の大切なモノ達に手を出そうとしたんだ。  
死ぬ覚悟くらいできてるよな？

「くっ！ここは・・・逃げるしかないようですねえ・・・ガハッ！」  
「そう・・・だな、今の俺達では・・・勝てない、逃げるしかないな・・・ガハッ！ゴフッ！」

普通の人間ならもう廃人になっているレベルなんだが・・・まあこいつらにはこの程度では無理か。

「逃がすわけないだろ？剥奪対象追加、『逃走』を剥奪」

相手から逃げるといふ概念を剥奪する。

これでやつらは逃げたくても逃げる事が出来ない。  
そして、

「最後に何か言う事は？」

「くっ・・・ないね、そんなもの・・・グッ！」

「そうですねえ・・・精々周りに気をつける事ですね、我々の仲間はいくらでもいますよ」

「そうか・・・じゃあな、永遠に苦しみ続ける」

――裏無極極式・深淵――

斬撃に固有結界の概念を付属させ、相手に放つ。

すると、相手に当たった後、相手を固有結界内部に閉じ込める。

まあ簡単に言えば白レンのアーケドライブもどきだな。

「クロス、敵の反応は？」

『結果内部にあります』

「そうか・・・結果を一時的に排除、ただし内部の状態を永遠に保存」

『了解です』

「ふう・・・」

これでやつらは永遠に苦しみ続ける事になったな。さて、

「時間をかけ過ぎた、急いでレミア達に合流しよう」

『レミアさんはカンカンに怒ってるでしょうね』

「言っな・・・」

あいつらには絶対に手を出させない・・・俺が護ると誓ったんだ、ほかの誰でもなく、自分自身に！

第25話 お前が死んでも何も変わらない、だが、お前が生きて、変わるもの

後書きコーナーが始まるよおオオオオオ!!

龍「今日はいつもよりテンションが高いな」

ガンダムEXVSが明日発売! 今日予約してきた!!  
後、バイトの面接が明日ある。

龍「なるほどな」

うん。アニメBarだってさ。

ナ「なんですか? それ」

コスプレとかして配膳とかチラシ配りとかするらしいよ?  
週2、3くらいで。

龍「・・・大丈夫なのか?」

面接に受からないとどうも。

龍「そうか、まあ頑張れ」

ナ「さて、感謝コーナーですね」

夜神様、メガネ様、Jam様、感想感謝です!!

龍「次回はもし面接に受かったら遅くなるかもな」

ナ「受かる気がしませんが」

悔いの無いよう頑張るぞ。

龍「そうか・・・次は遊戯王を更新予定だ、といってもまだプロロ  
ーグしかないから次で1話目だな」

ナ「遅いですからね」

その後にネギまを更新してこれを更新するので遅くなると思います。

龍「だから気長に待っていてくれ、ではな」

ナ「では」

ではでは！

第26話 意味もなく戦いたがる奴なんざ、そうはいない。戦わなきゃ、守れ

遅くなりました！

少しでも体調不良になっていたのと、感想にて指摘された部分をどのように直すかを悩んでました。

今までののは敢えてそのままにしますが、これからは今まで以上に頑張ります！！

第26話 意味もなく戦いたがる奴なんぞ、そうはいない。戦わなきゃ、守れ

あの後レミリアと咲夜と合流し、先に進む。

またあのようなイレギュラーがある可能性は十分にある・・・だが今は、

「聞いているのかしら？龍斗」

このご機嫌ナメなお嬢様の機嫌直しだな。

「ああ」

「なら言いなさい、あの時何をしてたの？」

「・・・少し絡まれてね、なるべく平和解決しようとしたら失敗して時間がかかった、いやはや、参ったねども」

間違っではない・・・はず。

まあ平和的解決（笑）だが。

「・・・咲夜はどう思っのかしら？」

「・・・嘘はついてないかと、言葉を濁しているだけで」

「・・・」

鋭い？な。

まあ・・・間違っではないか。

「そんな事より先に進むぞ、俺のせいとはいえ遅れているのだからな」

「そつね・・・でも後で聞かせてもらっわよ？」

「・・・ああ、構わないさ、さて・・・先に進むとしよう」

「ええ、進むわよ」

俺達は先に進む事にした。

別に目の前に転がってる鳥の妖怪はスルーしたわけじゃないからな。違うぞ？絶対にだ！

『言い訳乙』

「後で話しな？」

懲りないやつだ。

『oh・・・』

そんなこんなで人里に到着・・・のはずなんだが。

「人里がない？」

「そうですね、まるで『なかった』かのようです」

「よく分かったな、その通りだ・・・この人里は『なかったこと』になっている」

「へえ・・・それほど護りたいものでもあるのかしら？」

「ああ、だがここには何も無い、別の場所に向かうといい」

「ええそうね・・・とでも言うつとでも？」

「それならばこちらもそれ相応の対応をしなければならぬ」

「へえ・・・私に勝てるつとでも？」

「勝てるか勝てないかではない、護らなければならぬ・・・ただそれだけだ」

慧音先生はさすがだね、先生の鏡だ。

でも残念ながら姫様は納得してないみたいだ。

「そう、なら余計に手を出したくなっちゃったわ、咲夜、龍斗、相手してあげなさい」

「はい」

「・・・今回はパスで」

「そう、まあいいわ、咲夜一人で十分だし」

「なめられたものだな、一人で十分だと？」

「ええ」

うわあ・・・はつきり言うなあ。

「さて、任せたわよ咲夜」

「はい」

「龍斗にも本来は戦ってもらうつもりだったんだけど？」

「俺があの人と戦うとでも？」

「そうね、あなたは無駄な戦いは避けるタイプだったわね」

まあ勝手に相手から寄ってくるから逃げられないがな。

それにあの人とは戦いたくない。

能力の件もあるが・・・何より護りたいモノの内に入ってるからな。

「龍斗」

「ん？」

考え事をしていると、レミリアが喋りかけてきた。

羽根を忙しなく動かしている事から結構呼んでいたらしい。

「咲夜とアイツの弾幕がこっちに流れてくるわ、何とかしなさい」

「――幻符「殺人ドール」――」

咲夜がスペルカードを発動させる。

咲夜の周囲にナイフが浮かび、慧音に襲い掛かる。

「くっ！」

慧音はひたすら避けている……が、さすがに避けきれなくなったのか、スペルカードを使うみたいだ。

――国符「三種の神器 剣」――

慧音は後ろに退きながら弾幕を張り続ける。

使い魔が複数出現し、追い討ちとばかりに楔みたいな弾を咲夜に向けて放たれる。

「なあ」

「何よ」

「咲夜と慧音の弾幕はまったくこっちに来ていない……それなのに迎撃を頼むのか？」

「ええ、早く向かわなければならぬでしょう？」

「……だが」

「甘えないで欲しいわね、今回はアイツは敵よ？敵に容赦してるよっじゃ異変なんて解決できるはずがないわ」

レミリアが言いたい事は分かる。

要は切り替えると。

今の慧音は俺達の敵。

敵ならば退けなければならない。

……はあ、殺す訳ではないから……大丈夫だよな？

いざとなれば土下座しても謝罪するか。

『マスター、行動に移すなら今ですよ』

「そうだな」

「頼むわよ」

「ああ」

こちらも早期解決が望ましいからな。

仕方ないとはいわない方がいいか。

「慧音」

「何だ！？今君と話している余裕はないのだが！？」

慧音は咲夜から放たれるナイフ型の弾幕を必死に避けている。

俺が介入しなくてももうすぐ終わりそうだ。

でもそれじゃあ納得しないだろうな・・・レミリアが。

「はぁ・・・慧音、最初に言っておく」

「何だ！？」

「すまない・・・後でいくらでも叱りを受けよう、頭突きだって受ける・・・だから、眠れ」

そう言いながら俺はスペルカードを使う。

――幻符「ナイトメア・ワールド」――

外見は普通の紫と紅の弾幕に見えるが、自身の能力『空想を具現化する程度の能力』によって、当たると急激な睡魔に襲われるという性質を付加させている。

これに当たればどんなやつでも眠ってしまう弾幕だ。

「普通の弾幕？いや・・・龍斗が使ったのなら普通ではないはず

だ

何その信用方法。

俺だと何もかもが普通ではないのか？

『あながち間違ってますけどね』

「握りつぶしてやろうか」

『スイマセンデシタ』

「くっ！この程度の弾幕！！」

慧音は必死に弾幕を避けている。

だがこれはさっきの咲夜のスペル、幻符「殺人ドール」よりも範囲が広い。

避けきれないはずだ。

「避けきれない・・・ならば！」

そう言いながら慧音は次のスペルカードを取り出した。

——「無何有浄化」——

！？原作では条件を満たさないと出てこないスペルか！

スペカが発動された瞬間、かなりでかめの弾が大量に出現し、こちらの弾幕を消しながら向かってくる。

しかも今までの弾幕より速く放たれているため、非常に避けづらい。だが、

「慧音、一つ忠告だ」

「何だ！」

「目に見える弾幕が全てではないぞ？」

「何!？」

俺が発動してスペル、幻符「ナイトメア・ワールド」はさっき言った効果以外に効果がある。  
その効果が見えない事だ。

本命が一切見えなくなるスペルなんだ。  
そのため、見えている弾幕ばかりに目が行くと、この本命が避けきれなくなる。

「がつ!？」

「すまない、ゆっくり眠れ・・・人里には絶対に手は出さないし出させないから」

「・・・後で・・・説教だ」

「ああ、甘んじて受けよう」

最後に慧音は満足そうに眠った。

「ご苦労様」

「まったくだ・・・咲夜だけで済んだだろうに」

「いえ、私のみではもう少し掛かりました、龍斗のおかげです」

「そうか」

えらく自信があるな。

慧音も十分強いはずなんだが・・・じゃないと人里の護りを任せられたりはしないはずだしな。

「それに龍斗が負けるはずないわ!なら龍斗の活躍を見たいじゃない!」

何故かうー うー 言いながら言われたんだが・・・ここでする必

要はあったのか、カリスマブレイク。  
すでにカリスマ（笑）になってるんだが？

「お嬢様・・・」（ジイー

そして咲夜は何故最近あげたデジカメで録画してるんだろうか。  
気のせいかな？そのデジカメにはお嬢様及び龍斗専用とか書かれてる  
んだが？

俺もとられてたのか？

なら後で写真及びビデオを消去しないと。

そう思いながらもレミリアと咲夜を引きずりながら先に進んだ。

まさかこのデジカメが原因で第1次デジカメ争奪戦が起きるとはま  
ったく思わなかった。

第26話 意味もなく戦いたがる奴なんざ、そうはいない。戦わなきゃ、守れや

後書きコーナー!!

龍「さつそくだが感謝コーナーだ」

ナ「荒井スミス様、ケルベルス様、メガネ様、夜神様、感想ありがとうございます」

今回は少し戦闘の際の描写を増やしてみました。

まだまだ足りないと思うので、これからしっかり試行錯誤していこうと思います。

なので指摘があればどうぞ。

龍「まあこれから精進していこうと思うそうだが、やはりこいつも人間だからな・・・忘れてそのままの状態が続くようなら指摘してやってくれ」

ナ「今回はネギまもしくは遊戯王の予定です」

なのでこの東方は少し遅くなるかもです。

龍「気長に待っていてくれ」

では!!

龍「ではな」

ナ「では」

第27話 聖書にこうあります 『右のほおを殴られたら

.....

今回も遅くなりすみません！

今回の戦いは前編後編に別れてます！

あ、後、今日中に東方の番外編も投稿予定です！

なのでゆっくり待っていてください！！

あの慧音との戦いから少し経った。  
今はもう迷いの竹林にいる。

面倒な事ばかり起きている気がするが・・・まだ起きるんだろっな。

「早く終わらせましょう？じゃないとこの永い夜は終わらないわよ？」

「そうだな」

まったく・・・まあ仕方ないのかもな。

この月の正体・・・それが分かっていれば尚更。

「さて、次は誰が来るか・・・」

「大抵のやつは貴方達が戦えばいいでしょう？なら安心よ」

「・・・そうだな」

これはあれか？全て押し付けられるというオチか？

「咲夜も大変だな」

「いえ、もう慣れましたので」

「何よ・・・最初は大変でしたとでもいいたいのかしら？」

「いえ、そんな事は」

確実に遠回しでもない状態で言ってるよな？

「面倒ごとになりそうだ・・・この2人と向かったのはミスか？」

このままだとここで少しばかり時間を浪費しそうだ。

まあ・・・次は誰か想像はできるから、対策でも練っておくか。

「クロス・・・糸をめぐらせておけ」

『了解です、距離は？』

「勿論限界一步前まで」

『了解です』

クロスに指示を出し、距離200～500mの間に糸をめぐらせる。これで不意打ちは大丈夫だと思いたい。そう思い、糸を確認していると、

「な、何よコレ・・・」

「む？」

いきなり反応があつたかと思うと、そこには貧乏巫女が。

「貧乏で悪かつたわね・・・最近は何故分かつた」

「・・・何故分かつた」

「勘よ！」

「さすが巫女・・・勘がさえてる」

「嬉しくはないけどね・・・まさか異変に龍斗が関与してたなんて「は？」

いや、勘も怖いがある考えも怖いぞ？

まさかとは思うが・・・

「辻斬りみたいな事をしたんじゃないだろうな・・・」

「・・・何よ、ただ目の前の妖怪を片っ端から退治してただけよ」

「・・・」

それを世間一般的に辻斬りと言っただが・・・。

「それよりも！」

「む？」

「アンタ達ね！いつまでも夜を続けさせてるのは！」

「・・・そうね、確かにこの夜は私達がそうしてるわ・・・けど、あの月を見て気づかないのかしら？」

「月？」

まさか・・・夜が終わらない事が主体の異変だと思ってたのか？  
いや、夜が続くのも異変だが。

「ともかく！この状態を何とかしなさい！」

「ええ、別に構わないわ・・・今回の異変が終わればね」

「だからこの夜が異変じゃない」

「龍斗、この巫女・・・本気でいつてるのかしら？」

「さあな、でもまあ・・・今は先に進むのが優先される」

「それもそうね、咲夜」

「はい」

「あの巫女を何とかしなさい、龍斗も手伝ってくれるわ」

「オイ」

勝手に決めるな・・・手伝うが。

（ねえ・・・僕達もたまには戦いたいんだけど、いいかな？）

む、そういえば考えたいが、まったく戦ってなかったな。

（そうだよ、僕達は楽しみにしてたのにさ、まったく戦わせてくれないんだもん、暇で暇でしょうがないよ）

すまん。ならば今回は譲ろう。喧嘩せず代わってくれ。

(了解)、今回は僕だよ、次は大助ね)

(了解だア・・・まアその次は狂識か狂だがなア)

結構順番決まってるんだな。

「早く戦うわよ」

「了解だ」

(さっそく戦えるんだね！楽しみだなあ・・・)

ほどほどにな。

(了解了解、分かってるって！)

・・・前はすごく悲惨だったぞ？(前の世界では)

(気のせいだって、加減はしっかりするさ)

ならいいが。

まあ・・・霊夢相手なら加減はいらないだろうさ。

寧ろ加減してたら負ける可能性も十分にある。

それくらい俺達は未熟なのだから。

(じゃあ代わってくれ？)

ああ、了解だ。

「さぁ・・・始めようか、弾幕ごっこを」  
「全力で行くわよ！」

そう言いながら俺は、鏡夜と入れ代わった。  
やりすぎないといいなあ・・・。

> 龍斗Side end <

> 鏡夜Side <

ようやく出てこれた！

そしてついに戦闘！これがワクワクせずに入れるか？否！断じて否！  
もう始めっからクライマックスだよ！

「？龍斗じゃない・・・誰かしら」

「うん？よく分かったねえ〜今は鏡夜だね、ほかに結構いるからね、また他の人に会う機会は一杯あるだろうさ」「そう、ならアンタが私の相手するの？」

「そうだよ、いや〜楽しみだったんだ！スペルをせっかく作ったのに全然戦闘できなかったんだもん、暇だったからテンション上が  
るよー！」

「そ、そう」

あつ、面倒臭いやつだなあ〜って顔だ。

酷いなあ。

別にいいけどね！

「さぁ！始めようか！楽しい楽しい弾幕ごっこを！」

「・・・何かが違う気がするんだけど」

「気のせい気のせい！何も間違っていないよー！」

やっぱり勘が鋭いなあ。  
あっそうだ。

「咲夜さんだっけ？」

「はい、何でしょうか」

「今回は僕一人で戦ってもいいかな？ ストレスがすごいんだよね」

「お嬢様」

「いいわ、好きにさせなさい」

「了解しました・・・任せましたよ、鏡夜さん」

「うん、了解了解、必ず勝ってみせるよ」

よし！全力で戦うぞあゝ。

「クロス、君は休んでてね、僕に使われたくないでしょ？」

「・・・」

「君のマスターは龍斗・・・主人格のみだもんね」

「そうですね、私がマスターだと認識しているのは龍斗という名の一人の人間だけです、あなたは身体がマスターでも心が違いますから」

「だろうね、だから今は休んでて、能力を使えば最悪、武器はいらないから」

「でしょうね・・・では、少し休みます」

そう言いながらクロスはスリープモードに入った。

うん、やっぱり龍斗、主人格は羨ましいなあ・・・こんなに思われてるなんて。

まあまったく気づいてないんだらうけど。

「考え事とは余裕ね！」

おっと、霊夢から御札の形をした弾幕が放たれる。  
そういえば始まってたね。  
さて、まずは……

「これはどうかな？」

フラグメント、スピード速発動。

ーデー・ンドライブF・Hーフォックスハウンド

自らの速度を加速する。

今回はマツハ2だけど、実際は最大マツハ9まで頑張れる。

「はやっ! ? くっ! !」

「ほお、これを防ぐか……いやはや、これは楽しくなりそうだね」

ん? 口調が違う? いやいや、切り替えて大事だよな。

「くっ……龍斗もそうだけど、アンタもそんなに速いなんてね……」

「いや、まだまだ速くなるぜ? この程度で驚かれたら心外だね」

「アンタ、さっきまでとは別人ね、まさかまた代わったのかしら?」

「いやいや、今は戦闘用に切り替えてるだけだよ、まあ……今はこの戦いの事だけ考えているべきだよ、じゃないと……一瞬で終わるからね」

「言うわね……」

さて、次はどうするか。

霊夢が放つ弾幕が激しくなっていくなか、僕は次の手を考える。

まあその間もずっと弾幕を斬撃として放ってるんだけどね。

「スペルカード」

「――靈符「無想封印」――」

目の前に色とりどりの弾幕が僕に向かって放たれる。避けようとするが、かなり追尾してくる。

・・・確かこれは追尾性能がかなり高かったはず・・・なら打ち消すのがいいか。

フラグメント、アゲニッシュワックス炎神の息吹発動。

「――伝導・アゲニッシュワックス炎神の息吹――」

アゲニッシュワックス マイクロウェーブ炎神の息吹は超分子振動を発生させる能力で、炎もその特性上出せるようになってる。

そのため今回は、地面を振動させ、相手に向かって地を通して炎を放つ。

あっ、弾幕があまり消えてない・・・仕方ない。

フラグメント、第四波動発動。

「――第四波動――」

アゲニッシュワックス炎神の息吹によって発生した、熱エネルギーを吸収し、増幅して放つ。

この時に、熱エネルギーを炎に変えているため、ものすごい熱量になっっている。

これで大丈夫だろうけど・・・よくよく考えたらスペルカード使っていない!?

な、なら！

「スペルカード！」

「ー強化「ドラゴンインストール」ー」

自身をかなり強化する。

え？さっきまでフラグメントだったのに何故急にGG？って聞いたいの？

理由は簡単に言うと、使ってみたかっただけなんだ。テへ

・・・主人格の顔じゃなかったら自殺ものだね。

そう思いながらも構える。

どうやら霊夢も本気を出すようだし、まだまだ楽しめそうかな。

え！？これ前編なの！？

第27話 聖書にこうあります 『右のほおを殴られたら

.....

後書きコーナー!!

龍「さつそくで悪いが、感謝コーナーだ」

メガネ様、夜神様、感想ありがとうございます！

龍「今日中に一応クリスマス番外編を投稿予定だ、まったく書いてないがな」

急いで書きます！睡眠？そんなものはなかった！

ナ「馬鹿ですね」

言うな！自覚してるから！

ナ「・・・性質の悪い」

龍「まったくだ」

ひでえな。

龍「まあ次はたぶん遊戯王だ（番外編）その次にネギま（番外編）で最後に東方（番外編）だ、全部クリスマスの話になるからな・・・今日中に間に合わせろよ？」

頑張ります！

龍「ではな、次回」

ナ「では」

ではでは！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4434u/>

---

幻想郷に飛ばされし信念貫きし者

2011年12月25日01時47分発行